

序章 現代の忍者

忍者。主に戦国時代に各地の大名に仕え諜報、暗殺を行った影の存在。

そして、幕末頃に完全に滅び現代では、存在しないとされる者達。

しかし、それらの情報は全て嘘である。現代でも多くの忍者が存在し、古くから続く国からの密命を遂行するために密かに活動している。

そして、ネオンに彩られた夜の街。関原繁華街。ここに、多くの人に紛れて一人の忍者が任務を行っている。

その忍者の名前は、石川影虎。いしかわかげとら 一見、細身に見える体は鍛えられその瞳は刃物のように鋭い。上下真つ黒な服を着て、時折、緊張を和らげるために深く呼吸を繰り返しながら、今回のターゲットの後を追う

ターゲットである男は某会社に勤める営業マンだ。昼は真面目なサラリーマンをしながら、裏ではここ最近世間を騒がせる空き巣の犯人である。勿論、男も最初から空き巣の犯人では無かった。

きっかけは、数週間前に買ったとある筆。その筆を持ちながら念じると筆に真つ黒な墨が滲み出る。その墨で壁に円を描くと円の壁はなくなり建物の中に自由に入れるという不思議な筆だ。

しかも、無くなった壁は数分で修復され描かれた墨は無くなる。つまり、ターゲットの男が使ったという証拠は何一つなくなり完全犯罪の出来上がりだ。

影虎の任務は、男が持っているその不思議な力を持った筆を気づかれずに奪取すること。

男は相当、例の筆にご執心のようにいつでもスーツのポケットに入れていることは調べが付いている

後は、すれ違う一瞬に筆をスルだけ。スリの技術は忍者にとっては基本中に基本。景虎も幼少の頃に会得している。

しかも、相手は空き巣の常習犯とはいえ一般人。こんな任務、普通の忍者ならば息をするように達成出来る。そう、普通の忍者ならば、である。

影虎は、深呼吸を繰り返しながら男に近づく。突然、景虎の耳にはめているイヤホン型の通信機から少年にしては高い声が響く。

『どうやら、だいぶ緊張しているようだね。トラ君。変わってあげようか？』

それは最近、影虎が所属したチームのリーダーさいが雑賀ハジメの声であった。

その人を食ったような話し方に景虎は少し緊張よりも苛立ちが勝る。

「ほっといて下さい。大丈夫ですよ。こんな任務、一人で出来ます」

『へー、なら見せてごらん。君の実力を』

そこで通信が切れる。影虎は一瞬、自分の緊張を和らげるために通信してくれたのかと思っただがすぐに、ハジメの性格を思い出し、その考えを捨てる。だが事実、影虎には先ほどの

緊張は無かった。

呼吸を整え冷静にターゲットである男に近づく。早すぎず、遅すぎないあくまで自然な歩調で。

そして、男とすれ違う一瞬。男も周りの人間も気づかないほどのスピードで、筆の入っているポケットに手を入れる。そして、筆を抜き去ると速やかにそれを自分の着ているパーカーの袖に入れた。

影虎は、そのまま人混みに紛れ込む。後はこのまま仲間と自然に合流し目的の筆を渡せば終わりだ。

合流場所は、数百メートル先のカフェ。しかし、影虎はポケットから携帯端末を取り出し仲間にメッセージを送ると目的地のカフェの前に存在する路地裏に入る。

大通りの人が見えなくなるまで見当りで歩みを止める。

「なあ、いるんだろ？ 殺気でバレバレだぜ」

影虎の一言が夜の闇に溶けた瞬間、影虎の前方、後方、上から無数のクナイが飛んでくる。影虎は、全ての刃全てを回し蹴り一発で弾き落す。

「逃がすかよ！」

そして、地面を大きく踏み込むと大きく跳躍。影虎は右側のビルの壁に向かって拳を突出す。

「見つけた」

影虎の拳が当たった瞬間、そこに人間が浮かび上がる。その人間は影虎の拳を顔面に受け真つ逆さまに床に激突する。

〈隠れ蓑術〉。忍者の使う基本的な忍術の一つである。気配を隠し、身の回りの背景に服の溶け込む術である。

しかし、影虎の驚異的な直感力は先ほどの攻撃で隠れている相手の居場所を察知したのだ。

「なあ、まだ隠れてるつもりか？ 言っておくが、他の二人も分かってるんだぜ。そこそこ」

そう言い、影虎は自分の前後の壁を指さす。すると、指を指した場所の壁がぐにやりと歪み二人の人間が現われる。黒を基調にした服の上から籠手や膝当てをつけている。

顔は深くフードを被り口元を隠しているため分からない。しかし、その衣装に影虎は見覚えがあった。

「そのスタンダードな忍者装束。お前ら、伊賀者か？」

影虎の前後に立つ忍者は何も答えない。その代わり、二人は腕を振るい籠手の中に収納していた刃を出現させる。それが意味することは影虎の明確な殺意。それを、感じた影虎の行動は早かった。

地面を勢いよく蹴り上げ前方の忍者に向かって走り出す。その反応を見た前方の忍者は

構え、後方の忍者は背後から影虎に向かって刃を突き刺す。

その時だった。影虎は、右足を軸にクルリと方向を変える。

後方の忍者は影虎の予想外の行動に一瞬動きが止まる。

それを影虎は見逃さない。自分に突き出されていた腕を絡め取ると背負い投げを行う。しかも、投げる相手をもう一人に当てることで二人同時に倒す。

影虎は、三人の忍者の意識が無い事を確認すると携帯端末を取り出す

「さてとハジメさんに連絡——ッ！」

そこで、影虎はその場から勢いよく飛び退く。同時に影虎の体スレスレにクナイが通過ぎる。

影虎は、即座に刃が来た所を向きなおり構える。頬に一滴の汗が伝う。

「おや、おや。まさか、避けられてしまうとは。私も、腕が鈍りましたかね」

影虎の目の前の壁がグニヤリと歪む。そして、現われるのは一人の忍者。

しかし、その服装は黒いローブに黒いベレー帽。そして丸眼鏡と、一見学者にも見える。

しかし、その瞳に潜む狂気と殺気は、彼が一流の忍者であることをこれでもかと証明する。

影虎は早まる動悸を収めるためにニヤリと笑う。

「アンタ、こいつらの仲間か？」

影虎は、足下に転がっている忍者を踏みつけながら言う。それを見た、丸眼鏡の男はクククと笑う。

「まさか。私をその服部党の猿共と一緒にしないでほしい。私は、百地党中忍、神楽場かぐらば以後、お見知りおきを」

そう言い、神楽場は紳士的な仕草で腰を折る。

「結局、お前も伊賀者なのに変わりねーじゃねーか。で、目的はこれか？」

そう言い、影虎は袖から例の筆を取り出し見せる。

「ええーもちろん。私の主、百地様はその妖具ようぐ〈天狗の風穴筆てんぐのかまきあなふで〉の破壊がご所望ゆえ。ぜひ、渡して貰えると嬉しいのですが？」

妖具。戦国時代、外国から鉄砲やキリスト教と共に持ち込まれた錬金術、魔術などの人外の技術と日本に古くから伝わる陰陽術。そして当時の日本に数多く存在した大名達の野心が混ざり合い作られた二百二十二の物品。

特徴は、一つ、一つが現代の科学力では再現不可能な異能を持っていること。

「全ての忍者の目的は、現存する妖具の回収。破壊じゃないはずだぜ」

「それは貴方達、雑賀衆の考えでしょう。我々の考えは、妖具の回収と破壊なのですよ。さあ、渡して下さい。それとも、ご自分で破壊なさいますか？」

「まさか……と言いたところだけど。欲しけりゃくれてやるよ！」

影虎は、手に持っている〈天狗の風穴筆〉を神楽場に投げる。

神楽場は、〈天狗の風穴筆〉が自分に当る瞬間、腰に付けている刀を素早く抜刀。向ってくる札を切り捨てる。

次の瞬間、神楽場の目の前には影虎の笑みが見える。

影虎は〈天狗の風穴筆〉を投擲した瞬間一緒に動き出していたのだ。影虎のクナイが神楽場の喉を完璧に捉える。しかし、刃が喉に触れる直前――

「なんだ……これ」

影虎のクナイは神楽場の喉元数センチという所でピタリと止まる。

勿論、影虎が手加減したわけでは無い。影虎は神楽場を殺すのに一切迷いは無い。

しかし影虎の意思とは関係無しに、あと少しという所で、体が金縛りにあったように動かない。

焦る影虎の表情に、神楽場の顔が愉快そうに歪む。影虎は顔を怒りに歪ませながら神楽場に声を荒げる。

「何……しゃがった」

「いえ、別に対したことは何もしてませんよ。ただ、忍者らしく忍法を使っただけです。〈忍

法・縫糸〉アナタの体と地面を縫い合わせました」

見ると、影虎の腕や背中と地面の間に細い糸が確かに繋がっていた。

「いつからだ？」

「最初からです。さあ、では〈天狗の風穴筆〉貰いますよ」

「おいおい、さっきそれはお前がたたき切ったじゃねーか」

「私が、気づいて無いとでも？ 先ほどの筆は偽物。本物はここです」

そう言い、神楽場は影虎の袖に指を入れる。すると、そこには本物の〈天狗の風穴筆〉が出てきた。

「ククク。にしても、無様ですね。その髪の色。アナタ、名門石川家の落ちこぼれ。影虎です。ね。ククク弟は優秀だというのに、いやいや、世界とはここまで不平等だといっそ哀れみすら懐きますよ」

神楽場の罵倒に影虎に堪忍袋の緒が切れる。

「てめえ！ 今、何だった！」

神楽場は影虎の突然の雰囲気の変化に一步後に下がる。

影虎は動かない体を無理矢理動かす。影虎の腕や背中からブチブチと何か千切れる音が聞こえる。それと同時に少しずつ影虎の体が前に進む。

その現象に神楽場は驚きを隠せないと言った表情を作る。

「馬鹿な！ 神経と繋いでいるのだぞ！ 無理に剥がせば、激痛が！」

「うるせえ！」

その言葉と同時に、影虎は完全に拘束を解き前に進む。そして驚きで一瞬反応が遅れた神

楽場の隙をつき、その顔面に蹴りを入れる。

蹴られた神楽場は持っていた筆から手を離す。〈天狗の風穴筆〉がクルクルと宙を舞う。影虎は〈天狗の風穴筆〉を空中でキャッチすると、懐から煙玉を破裂させる。当りが黒い煙に包まれている間に影虎はその場を離脱する。



「こちら、影虎。伊賀者の忍者と戦闘の後負傷。移動は困難。妖具を手元にある。回収求む」
影虎はその場を離脱後、仲間のいるカフェでは無く近くのビルの屋上に逃げた。
理由は二つ。

一つ目はあのままカフェに逃げれば、血だらけの少年がカフェに現われたというかなり派手な現象が起きてしまう。それは、影に潜む忍者として避けたかったというのが一つ。
二つ目はもしカフェまでたどりついても神楽場が追ってくれば必然戦闘は避けられない。そうなれば、確実に一般人を巻き込んでしまう。任務最優先が忍者の鉄則とはいえ、それは影虎の倫理観が許さなかった。

影虎の腕と足には先ほどまで着ていたパーカーを切り裂いて作った即席の包帯が撒かれている。しかし、完全な止血とは行かずいまだパーカーを赤く染める。

（あの忍法……神経に直接糸を結ぶって言うってたな。ということは、俺は強引に神経を引き割いてあの術を突破したってことになる……ハハハ、そりゃさつきから手足が動けないわけだ）

影虎は、屋上の壁に背中を預け必死に痛みを耐えていると、影虎の耳にあの人を食ったような話し方をするハジメの声が聞こえる。

『やあやあ。こちら、ハジメ。聞こえてる？』

「聞こえますよ。メッセージとさつきの俺の言葉で大体状況は分かってるでしょう。早く、妖具の回収を」

影虎は、先ほど戦闘をしていた路地裏に入る前に仲間にメッセージを送っていたのだ。

内容は、何者かが自分を狙っていること。そして、もし十分経っても目的のカフェに来ない場合、自分元に来て妖具の回収をして欲しいという内容だ。

『うーん、まあ君の所に行きたいのは山々なんだけどね。こっちも想定外のこと起きてきた。だいたい、戦闘中。因みに、敵は伊賀者』

ハジメの言葉に、影虎は驚く。一蹴、冗談とも思ったがよく耳を澄ませば、確かに微かに戦闘音が聞こえてきた。

（マジかよ。てことは、手負いの状態でアイツを相手にすることになる……いけるか、今の俺に……）

影虎は、奥歯を強く噛みしめる。

無理も無い。状況は最悪。恐らくここが見つかるのは時間の問題。

この後の展開は良くて〈天狗の風穴筆〉を取られる。悪くて、〈天狗の風穴筆〉と一緒に影虎の命も奪われる。どっちにしろ、任務は失敗。影虎の精神は自然と暗くなる。

そんな影虎の気持ちを知ってか知らずか、ハジメは一方的に話し掛ける。

『どうしたんだい？ 初めてのチームでの任務の失敗に絶望でもしたかい？』

「……」

『ハッハー。安心すると良いよ。手は打ってある。少し高く付いたけどね。まあ、彼ならどうにかしてくれるでしょう。じゃ、頑張ってね』

そこで、ハジメの通信が切れた。仲間が来る。その情報は、影虎に一縷の希望を与えると同時に、自分では任務一つ達成出来ないという挫折感が募らせる

しかし、影虎懐いた一縷の希望すらもすぐに潰えることになる。

「ようやく見つけましたよ。落ちこぼれさん」

影虎が声のする方を見る。

空中には神楽場が影虎を見下ろすように立っていた。

「黙れ！ 俺の名前は影虎だ！」

そう言い、影虎は痛む腕を我慢してクナイを投げる。狙いは、神楽場が足下に張り巡らしている例の糸だ。

しかしクナイは神楽場には届かず虚しく落下する。神楽場は余裕の笑みを浮かべながら影虎に話しかける。

「ククク。これは失敬。そして失敬ついでに〈天狗の風穴筆〉はいただく。アナタの命と共に！」

そう言い、神楽場は無数のクナイを取り出すと、それを一斉に放つ。本来の影虎なら避けられる凡庸な攻撃。

しかし、手負いの影虎にはその凡庸の攻撃する死に直結する必殺の一撃だった。

影虎は痛みに耐えるために体を硬直させ瞳を瞑る。その直後だった。突如、闇夜の空を切り裂くように燦々と燃える炎が横一文字に走り、影虎に向かってくるクナイ全てに還した。

「〈忍法・火遁〉……だと。誰だ！」

神楽場は、炎が吹き出た場所を見る。しかし、そこには誰もいない。

影虎は〈隠れ蓑術〉だと理解する。しかし、恐らくその練度は神楽場以上。それは、神楽場自身も分かったのだろう。

自分よりも強者がいるというこの現象。しかも、その存在が今、視認できない。それにより湧き出る恐怖を神楽場を否応なく駆り立てる。

「出てきなさい！ どこにいる！」

顔を顰め当りに喚く神楽場。そんな、神楽場をあざ笑うように辺り一面に声が響く。

『駄目ですよ。忍者がそんなに取り乱したら。忍者は常に冷静たれ。子供でも知ってること

です』

「黙れ、どこにいる！ 姿を見せろ！」

神楽場が声を荒げ叫んだその時だった。どこからともなく鴉の大群が神楽場と影虎を包み込む。

視界すべてが黒く染まる中、影虎はこの現象が誰の手により起こったことか理解し強い屈辱から奥歯を強く噛みしめる。

徐々に鴉たちは影虎の前に集まりそして弾け飛び消える。そして、中から一人の人間が現れる。その身に纏うは忍者装束。その顔の造形は影虎と瓜二。相違点は手に持っている唐傘と雪のように白い髪だった。

「見せろ、と言われたので見せました。これで満足ですか？」

突如現れた忍者は、冷や汗を流し消耗している神楽場に向かって悪意のない言葉を投げますが、神楽場は屈辱に感じたのだらう。顔を歪ませる。

しかし、その人物に先に反応したのは影虎だった。

「なんで、お前がいるんだよ。日鷹！」

ひだか

その表情は鬼の形相。その名を聞き神楽場も目を見開く。

「なるほど、アナタが新進気鋭の天才忍者、石川日鷹ですか。確かに、そう考えれば先ほどの火遁、そして先ほどの幻術。全てが、高水準なもの領ける」

神楽場の言葉にしかし、日鷹は特に反応を見せない。

日鷹は自分の後のいる影虎と話し込む。

「どうしてって、兄さんのところの隊長さんに頼まれたかからだよ。大丈夫？」

「見て分からないのかよ」

「あ、いや僕が心配しているのは妖具のほう。傷とかついてない。少しでも、破損箇所があると任務失敗になっちゃう」

日鷹は手足を血で濡らした影虎のことは一切心配するそぶりを見せず言葉を並べる。

「怪我人を前に言う言葉がそれかよ。相変わらずお前は、イカレてるな」

「忍者が目的のために体を張る。子供でも知ってることだよ」

「それでも、時と場合があるだろ」

影虎は激痛に耐えながら言い返すが、日鷹はそれを一言で一蹴する。

「無いよ、そんな状況は」

「忍者が目的のために体を張る」それは忍者なら幼少の頃より親に教えられる言葉だ。しかし、その幼少の時に教えられたことは大体、形骸化していく。何故なら、人は成長していくにつれ意思を持ち、自らで答えを考えていくからだ。

しかし、目の前の日鷹は違う。幼少のころの教えに一切の疑問を持つこと無く、忠実に守り続ける。

そんな、ある意味純粋な日鷹が影虎は憎悪するほどに嫌いだ。故に、日鷹の言葉に更に言

い返そうとした影虎は口を開く。しかし。そこで途中で辞める。

何故なら無視された腹いせに神楽場がクナイを放ったからだ。影虎は、こちらを向いている日鷹に危険を知らせようとする。しかし、間に合わない。誰もが日鷹の流血を想像する。しかし、実際はそうならなかった。なんと日鷹は跳んでくるクナイを空中で掴んだのだ。神楽場はその異常な光景に目を見開く。日鷹は振り返り、そんな神楽場の表情を見てフツと笑う。

その笑みが神楽場のしゃくに触ったのだろう。神楽場は日鷹にかけた忍法を発動させる。

神楽場の忍法は、指先から出す事ができる特殊な糸を操る〈忍法・操糸〉（忍法・操糸）。その糸を使い神経と地面を縫合したのが影虎も食らった〈忍法・縫糸〉。

しかし今回、日鷹にかけた忍法は違う。日鷹の内部に糸を侵入させ心臓に巻き付き。そして、自分の指に連動し心臓を引きずり出す〈忍法・手繰り糸〉（忍法・手繰り糸）。神楽場は、その日鷹の心臓に巻き付けている糸と接続している右手を強く自らのほうに引く。

しかし、日鷹の体から心臓が出ることは無かった。

「無駄ですよ。アナタの忍法は既に種が割れている。こうやって、自分の心臓に結んでいる糸を掴んでいけば、そこまでの驚異じゃない」

日鷹は、神楽場に直結している糸を強く引く。それにより、逆に神楽場の方が日鷹にたくり寄せられる。

神楽場は、日鷹に近寄るのは不味いと考え糸を切り離す。そして、その場から離れようとするが、既にその判断は遅かった。

神楽場に向かって日鷹は腕を突出す。

「〈忍法・集引〉（忍法・集引）」

その瞬間、神楽場は自分の意思に反して勢いよく日鷹の方に引き寄せられる。そして、その勢いのまま日鷹が突き出していたクナイに腹部を刺される。

「ガハッ！」

神楽場は吐血し、その血が日鷹の顔にかかる。しかし、日鷹は気にしない。腹部に刺さったクナイを上へ動かし勢いよく胸を裂く。神楽場は、体から血を拭きだし絶命した。

「さて兄さん。任務を達成させよう」

しかし、日鷹は虫を殺した後のような調子で言いながら、影虎に手をさし延べる。

日鷹は他人の命に価値を見いだしていない。日鷹にとって大事なことは任務を攻略できるかどうか。そこに自分や他人の命の配慮は無い。それは忍者として正しい。

そして、その正しさはいつも否応なく、影虎を否定する。影虎はいつも、日鷹の目に立つと感情を殺せない未熟さを嘲笑されているように感じる。理知的に動けないことを軽蔑されているように感じる。

しかし、それでも影虎は、差し出された手を握ってしまう。理由は簡単。自分が日鷹よりも弱いから差し出された物を拒めない。

影虎は、日鷹の手を取り立ち上がる。

「助けてくれて……ありがとな」

その瞳には凡そ感謝の念は無く、憎しみと怒りと、諦念感だった。

一章 新たな任務

一話 邂逅

少年はゆっくりと目を開ける。

視界に映るのは、四方をコンクリートに囲まれた部屋。窓は無く、天井は低く、しかも薄暗い。座っていても圧迫感のある空間に少年は以後心地の悪さを感じる。

「あのクソ親父！」

影虎は、この息苦しい空間を知っている。ここは、影虎の実家の地下なのだ。

ここから逃げだそうとするのが両腕を鎖で拘束され、しかもその鎖は地面と繋ぎ止められており立ち上がることは出来ない。

足音が近づいてくることに気づく。数秒後、目の前の階段から着物を着た男が降りてきた。男は、少年を見るなり無感情に言葉を並べる。

「目が覚めたようだな影虎。相変わらず目つきが悪い」

「アンタも同じだろうが、クソ親父。というか、この鎖外しやがれ！」

影虎と言われた少年は父、石川五碌を睨んだ。

「で、なんで俺は実の家族に拘束されてるんだよ」

「お前が何度連絡を入れても返信をしなかったからだろう。それよりも口の利き方に気がつけろ」

五碌は冷たく言い放つ。その言葉を聞き影虎は顔を怒りに歪ませる。

「勝手に家から追放したくせに何言ってるやがる！ いい加減にしろよクソ親父！」

影虎の怒声が地下室に響く。しかし、五碌の心が影虎の怒りをくみ取るとは無かった。

「言いたいことはそれだけか？」

五碌の言葉に更に、影虎は怒りを覚えたが言い返すのを辞めた。

五碌の目を見て悟ったからだ。この男には自分の言葉は何も届かないと。故に影虎は無理矢理自分の怒りを押さえ込み冷静さを取り戻す。

「別にねーよ。それより、さっさと要件を言えよ。何かあってこんな手の込んだことをしたんだろう」

「ああ、そうだ」

五碌は着物の袖から一枚の写真を取り出し、それを影虎の足下に投げる。

その写真には一人の少女が映っていた。黒い髪を背中まで伸ばした赤い瞳の少女だった。目鼻は整っており、服の上からも女性らしい体つきなのが分かる。控えめに言ってもかなり

美少女だった。

しかし、影虎自身この少女に見覚えがない。すると、五碌が口を開く。

「その子の名前は、高坂真華こうさかしんかという。お前には、一週間後その子と恋仲になって貰う」

「はっ……」

影虎は、五碌の突然の言葉に固まった。

しかし、五碌はそんな影虎に対して気にするわけでも無く淡々と説明する。

「成功すれば、それなりにお前の雑賀衆の評価も上がるだろう」

「ちょっと待て！ その前に、色々説明することがあるだろう！ まず、なんで俺がその子と付き合わないといけないんだ！ 大体！ その真華とかいう女は何者なんだ！」

忍者が一般人を利用することはよくある。しかし、自ら近づき、関係を築くというのは異常だ。しかも、恋仲というかなり深い関係。そして、その任務に従事するのは最近やっと忍者らしい任務をこなせるようになった最低編の肩書きでくある下忍の影虎だ。はつきり言っ普通ではない。

しかし、そんな真つ当な質問が返ってこず、自分の身の丈に合わない任務に従事することを要求されるのが忍者だ。ゆえに、影虎の質問に返ってきた答えは一つだった

「教えられない」

「なっ!? いい加減にし……」

「お前こそ、いい加減にしろ。貴様も忍者の端くれなら分かるだろう。情報がいかに大事か。情報を教えることがいかに危険か。しかも教えるのが最近、忍者のイロハを知った貴様だ。ならば、必然開示できる情報も限られる。少し、考えれば分かることだろう」

五碌の言葉に影虎は悔しさがこみ上げる。

五碌の言葉は忍者として正しい。影虎自身、安易に情報を仲間に教えたがゆえに壊滅した忍者チームや忍者組織を多く見てきた。また、それが要因で勝利したこともある。

そこで、ふと影虎の頭にある疑問がよぎる。何故、自分なのかと。今までの話しを聞き総合的に考えてもこの任務の難易度はどう考えても、最低で上忍。欲を言えば上忍のなかでも上澄み中の上澄みでないと務まらないレベル。下忍の影虎では天地がひっくり返っても話が来ることは無い。しかし現実問題、影虎に話しが来た。

影虎は、なんとなく嫌な予感を感じながらも言葉を漏らす。

「なあ……なんで俺なんだ。どう考えたって、適正はアイツのほうが……日鷹のほうが……成功率は高いだろう」

影虎は、喉につっかかる日鷹という人名をなんとか吐き出しながら五碌に質問を投げかける。

当然、答えが返ってこない可能性も分かっている。しかし、それでも、質問したい理由があった。一つは、今まで自分を排他的に扱っていた五碌やその他の存在がもしかしたら自分をどこかで、評価していたかもしれないという淡い期待。もう一つは、さっきから肌にまと

わりつき、喉を渴かすほどの嫌な予感をはっきりと否定したかったからである。

しかし、影虎の思いは簡単に裏切られる。

「日鷹なら死んだよ。三日前に、何者かの手によって。恐らく、外部の忍者の仕業だろう」

影虎の顔から、表情というものが消える。

「……………嘘……………だろ」

何か言おうと、口をパクパクと開閉するが声は出ない。

信じられない、信じたくないという気持ちが湧き出てくるが、五碌の瞳が静かにそれを否定する。真実だと語る。

その瞬間、影虎は、自然と頭を垂れていた。そして、今まで真っ白になっていた胸のウチに味わったことの無い感情の波が押し寄せる。今すぐに暴れ出したのに、別になにもしたくないという矛盾した気持ちがかみ上げる。奥歯を強く噛みしめ怒りの表情を出したいのに、瞳から涙が流れそうになる。

しかし、そんな状態の影虎の意を五碌はくみ取らない。

「丁度日鷹のことが出たから言っておくが、この任務は元々日鷹が受けていた。件の少女、高坂真華と恋仲になり、時に守り、常に幸せを与えていた。だから正確にいうなら、貴様の任務は、石川日鷹となり高坂真華と恋仲という関係を継続させることだ」

「嫌だ」

影虎は小さく、しかしはつきりと呟く。

「貴様の意見は、求めている。やれ」

「断る！」

その瞬間、影虎は体中の筋肉を稼働させ、今まで自分の行動を縛っていた鎖を無理矢理引きちぎる。そして、五碌の隣までくると一言言い放つ。

「日鷹の代わりなんて、ゴメンだ。他を当たれ」

その顔は未だ無表情。ただ、その瞳には泥のように淀んだ暗い光が灯っている。

五碌は、影虎の背中越しに言い放つ。

「後で、正式に指令書を送る」

しかし、影虎はその声に特に反応することなく地下室を後にした。

二話 登場。チームハジメ

影虎が階段を登り切ると、入口に一人の少年が壁に寄りかかりながら立っていた。

「ハジメさん」

「やあ」

影虎の目の前にいる少年こそ、一匹オオカミで活動をしていた影虎を自分のチームに入れた危篤な人物、雑賀ハジメである。

「どうだった？ 久しぶりの親子の団らんは」

ハジメは影虎と両親の角質を知っているがらわざと聞く。影虎もハジメの質問がわざと

で言っていることは分かっているため特に相手すること無く言う。

「別に……普通でしたよ」

そのまま、影虎はハジメの隣を通り過ぎ屋敷を出る。

外に出ると、そこには無機質な真っ白な空が広がっている。

石川家の屋敷は、敵の忍者からの攻撃などに備えて、地下に建てられている。

影虎は地上に唯一通じている、エレベーターに乗ると滑り込むようにハジメが割り込む。影虎は、顔を顰めながらも扉を閉める。狭い空間。地上に向う数秒の間に重たい沈黙が広がる。ハジメはただニコニコと薄っぺらい笑みを浮かべ、影虎は口を閉じ無表情。

影虎はチラリと自分の隣に立つハジメを観察する。というのも、彼がどんな答えにくい質問をしてくるか警戒するためである。

数秒後、二人はダミーとして建てられた一軒家の玄関に立つ。二人がエレベーターから出ると、エレベーターは即座に地下に潜った。

影虎は、狭い空間からの開放感とハジメが特に何も話してこなかったことによる安堵から気が緩む。そこに計ったように目の前に黒い車が止まる。

影虎がハジメの方を睨むと、ハジメはいけしゃあしゃあと言葉を並べる。

「疲れたでしょ。送っていくよ」

「……遠慮します」

「そう言わず。大丈夫、ちゃんと送るからさ。それに、僕は君に聞きたいことがある」

影虎の本心としては車に乗るのは嫌だった。しかし、ここで断ったところで、ハジメが影虎を逃がすとは考えにくく、結局渋々車に乗るのだった。

車が走ること数分。その間も無言な時間は続く。そして景色が、住宅街から繁華街に変わってきた所で沈黙に耐えかねた影虎が口を開く。

「で、聞きたいことって何ですか？」

「おや、君から話しを振ってくれるなんて、意外だよ」

「下手な演技は辞めて下さい。こうやって俺が話しを振らせるために今まで黙っていたんですよ？ アナタから振ったら俺が黙ることをみこして」

「考えすぎだよ。でも……せっかく君が話すって言うんだ。一つ質問。結局の所どうだった？ 大嫌いな双子の弟が死んでさ」

その瞬間、車の中の気温が一度下がったような気がした。

「……別に、どうも思いませんよ。忍者をやったたら死ぬ覚悟ぐらいできているもんでしよう。それをアイツはとっくの昔にすませてたはずです。だから、アイツには無念なんて無い。どころか、任務で死ねたなら本望でしょう。そんな奴が死んだと分かったからって、どうも思いませんよ」

勿論事実では無い。しかし、影虎が感じた激情の本流の名前を影虎自身は知らない。ゆえに、影虎何も思わなかったと結論づけてしまうのだ。

ハジメは、そんな影虎の内心を見透かしたようにあえて、挑発する。

「ふーん……なるほどね……なんというか、君は顔に似合わずドライだね」

「冷静なことですか」

その評価は基本的に戦闘バカという評価しか下されてこなかった影虎としては嬉しい評価だった。しかし、その上がった気持ちには簡単に下がってしまう。

「いや、情熱がかけているという意味でさ。君は、日鷹君のことを憎悪するぐらい嫌いだけど、だけどけして見返そうとはしていない。もし、情熱があれば、もつと違う答えが出るはずだ。勝ち逃げされて悔しいとか、ライバルがいなくなって悲しいとか……死んで嬉しいとか。なのに、君は何も思わないと言った。君、本当はそこまで日鷹君のこと憎んでいないんじゃない？」

その瞬間。影虎は自然に隣に座る一に拳を振るっていた。

「おいおい、凶星かい？」

ハジメは突出された拳を握りながら、ニヤリと笑みを浮べる。

影虎はそこで自分がまたおちよくられていると知り、拳を引っ込める。

「凶星じゃないです」

「フフフ、本当に君は可愛いね。君は」

そこから、数分後。影虎とハジメが降りたのはここら一帯で一番大きな一流ホテルだった。勿論、中にいる客も大企業の社員や金持ちの観光客が多い。そんな中に明らかに二十歳も超えていないハジメと影虎が入れば周りから浮く。しかし従業員は決して二人を呼び止めたり、声をかけたりはしない。

ハジメと影虎はそのまま誰も乗っていないエスカレーターに乗り、各階に止まるボタンの一番上の階を二階押す。そして、扉が開くと目の前に広がるのは階まるごと使った大きな部屋だった。

「いつも思うんですけど、忍者ってもう少し忍びませんか？　こんな派手なところに本拠地建てないような」

「良いじゃん。ちゃんと色々対策してるし」

そう言いハジメは、目の前のソファーに座りくつろぐ。

影虎は以後心地悪そうに食卓の椅子に座る。ここは、ハジメのチームに所属する忍者の本拠地である。影虎たちはここにチームで共同生活を行っている。奥には一人、一人、自室もある。

そして、当たり前だが普通の忍者チームはこんなところにアジトを構えない。

わざわざ一流ホテルに隠し階層を作りそこを本拠地にできているのは全てハジメが忍者組織、雑賀衆のトップ第十三代雑賀孫市の一人息子だからできる離れ業である。余談だが、このホテルも裏では雑賀衆が運営している。

影虎は落ち着こうとキッチンで何か飲み物でも飲もうと立ち上がった時だった奥の扉が開き一人の少女が出てくる。

「お帰りー、リーダー、影虎ー」

影虎は声のする方を向き顔を赤らめる。

きめ細やかな白い肌と小柄な身長。可愛らしい顔立ちに空色の髪。ハジメのチームの紅一点、くノ一の加藤香奈がいた。

「やあー、香奈ちゃん。服ぐらい着たら。トラ君が困ってる」

そう、香奈は今服を着ていない。流石にパンツは吐いているがそれ以外は何も着ていない。「いやあーお風呂入ってたから熱くてえー。あと、服着るはのめんどくさい」

香奈の肌には水滴が付いており、頭にはバスタオルを乗せている。香奈は恥ずかしげも無くハジメの隣に座りテレビを付ける。

影虎は自分の羞恥心に耐えかね、その場を立ち上がると香奈の自室に入りそこら辺に置いてあった服を手に取りリビングに戻る。そして、未だ半裸の香奈の後頭部に持ってきた服を投げる。

「いいから、服を着て下さい！」

「えー」

「えー、じゃないです！」

影虎は、香奈に背を向けながら言う。

「はあーしょうがないなー」

香奈はかったるそうにもぞもぞと服を着る。

「はい、着たからこっちむいて良いよ」

「まったく、このチームはどうしてこう常識がない人が多いんだ」

影虎はそう愚痴をこぼしながら、キツチンに向かう。

「常識っていうけど、女の子の裸を見ただけでそこまで取り乱す影虎も忍者としてどうかと思うけど？ 少なくとも女の子の裸を見て自分が羞恥心を感じているようじゃ先が思いやられるよお」

「取り乱してなんて……ちょっとビックリしただけで」

「そうそう、トラ君は取り乱してないよ。香奈ちゃん。本当に初心だったら、女の子の部屋になんて入れないしね」

ハジメの言葉に再度、影虎は顔を赤らめる。先ほどは、香奈の裸体を見たという羞恥心が勝利入れたが、ハジメの一言で影虎は女子の部屋に入ったということ意識してしまったのだ。それにより手に持っていたジュースを落してしまう。

「あつやべー！」

気づいた時には既に遅く床をジュースで汚してしまう。その反応を見たハジメと香奈は呆れ半分、面白さ半分で眺めている。

すると、この部屋の唯一のエレベーターの扉が開く。先に行っておくがハジメのチームはハジメと影虎、香奈の三人のみである。そして、今その三人はこの部屋にいるため基本的にエレベーターがこの階に止まることは無い。

自然、影虎たちに緊張が走る。静寂に包まれた部屋に、エレベーターの停止音がやけに大

大きく響く。

扉が開いた瞬間。影虎は地面を強く踏みしめ一直線にエレベーターに向かう。しかし、エレベーターの中には誰もいない。

「どこに？」

影虎は当りを見渡す。そんな、影虎に一が声をかける。

「トラ君。足下、足下」

「足下？」

影虎は、足下を見る。そこには、一枚の封筒が置かれていた。裏を見るとそこには、鴉の紋章が書かれていた。それが意味することは、雑賀衆本部から一のチームに忍者としての任務としての書状を意味する。

「どうしたんだい？　トラ君」

「任務みたいです」

影虎は封筒をハジメに渡す。ハジメは受け取った封筒に光を当て中身を透かす。封筒にトラップが仕掛けられていないかを調べるためだ。安全が確認できたため封を切る。

ハジメは、その中身に目を通すとニヤリと口元を歪める。

「トラ君、君に指名だよ」

ハジメのその言葉に影虎は嫌な予感を巡らせる。

「それって……もしかして、日鷹の代わりに」

「真華とかいう少女と付き合えだっけさ」

「お断ります」

即答だった。基本的に、任務に意欲的な姿勢を見せる影虎を知っている香奈は驚いたように瞳を丸くする。

そして、ハジメはニヤニヤと口元を浮べる。

「なるほど。まあ、確かに良いんじゃない？　情熱があって、日鷹君のことを恨んでいない君が受ける理由はない。正直、この任務きな臭いしね」

それを聞いた瞬間、影虎の眉が動く。それを見た、ハジメはさらに畳みかける。

「あー、だけど残念だなー。この任務を達成すれば、君は一流の忍者になれるのに」

そう言いハジメはチラリと影虎を見る。影虎は何か耐えるように体を震わせていた。ハジメは後一押しで落ちる確信し、わざとらしく大ぶりに言葉を並べる。

「あの日鷹くんが結果的にとはいえ失敗した任務だ。これを成功させれば、一気に昇進。みんな、トラ君を見直すだろうなあー。まあ、でもあの日鷹君が失敗した任務だ、対して日鷹君に何も思っていないトラ君が、尻込みをするのも分かる、分かる。仕方無い。これは僕が断っておこう」

そう言い、ハジメがエレベーターに向おうとしたその時だった

「待って下さい！」

影虎はハジメを呼び出す。そして、ひねり出すように言葉を紡ぐ

「その……任務……受けます」

その言葉を聞き、ハジメは満足そうな笑みを浮べた。

三話 任務前日

影虎が任務を受けることになって六日後の早朝。アジトでは影虎と香奈が食卓を挟み向き合って座っている。その表情は、真剣そのものだ。

「はい、じゃあ笑って」

香奈は、影虎に向かって指示を出す。

「に、にいー」

香奈の指示に従い、影虎は頬の筋肉を動かし笑みを作る。しかし、その笑みはぎこちなく、見ようによっては獰猛な獣の威嚇のようにも見える。

香奈は手に持っている写真と影虎の顔を見比べる。

「全然違ーう！」

その言葉と共に香奈の掌底が影虎に向かって飛んでくる。影虎はその掌底を白羽取りで受け取る。

「どこが、違うんですか！」

影虎は、香奈の掌底を跳ね返す。

「何もかも！」

香奈は、そう言いながら影虎にデコピンを食らわした。

そんな、茶番劇を繰り返しているところの部屋と外界を通じるエレベーターからハジメが現われる。その手には、大きな封筒が握られている。

「どうしたんだい？ 朝からそんな暴れて」

「あ、リーダー。それがさあー、ここ数日、色々試したんだけど、全然似なくてさあー」

「似てないって何に？」

「これに」

そう言い、香奈は自分の手に持っている日鷹の写真をハジメに手渡す。その写真には日鷹が爽やかに笑みを浮べていた。

「似てないってどれぐらい？」

「ほら、影虎笑って」

そう言われ影虎は先ほどのように獣のように笑う。それを見た、ハジメは苦笑いを浮べる。

「確かにこれは……酷いね」

そう言われ影虎は唇をとがらせ分かりやすくふて腐れる。

この六日間、影虎はこのアジトで、日鷹になるための特訓を香奈と共に行っていった。

その結果、日鷹の基本情報の暗唱。歩きかたや、呼吸、ちょっとした仕草や癖などはマスターできた。しかし、どうしても表情だけは日鷹そっくりに模倣することは出来なかった。

「まあ任務開始までもう時間は無い。現状、出来ないことはいったん置いて、すぐに出

来るところから始めよう」

「出来ることって？」

香奈の言葉に、ハジメは持っている封筒の中身を食卓に置きながら言う。

「情報整理」



「ここ数日、僕が今回の任務で使えそうな情報をまとめた書類だよ」

ハジメの一言で一度、影虎のトレーニングを切り上げ三人は朝食を食べながら、今回の任務について話し合うこととなった

何故、朝食を食べながらするのかというと、影虎の腹が鳴ったからである。因みに、朝食は影虎の手作りである。

「これが、真華ちゃんかー。可愛いねー」

香奈はベーンエッグを頬張りながら真華の写真を見る。

机には、今回の任務の細かな内容がまとめられた書類以外にも、家族構成、趣味、身体的特徴、帰宅ルートから今までの人間関係など大量の情報がまとめられていた。

「でも、よく集められたねリーダー。こんな短時間で」

「最初から集めた訳じゃ無いよ。ただ、日鷹君のチームが持っていた情報を貰っただけ。けっこう嫌な顔をされたけどね」

そう言いながら、日鷹は紅茶を一口飲む。

「さて、じゃあ改めて今回の任務の情報なんかについて確認しよう。任務の内容はみんなも知ってるの通り、トラ君が任務対象である真華と接触、恋仲になり、あらゆる危険から守る事。備考として、トラ君は日鷹君としてしか対象者の前に現われてはいけない。また、特記事項として日鷹君が死んだこと、トラ君が日鷹君に成り代わっていたことを対象者にバレてはいけない。特記事項に抵触した場合、トラ君は処刑される。任務の期間は、来年の三月三十一日まで。まあ、ようは来年の三月三十一日まで、トラ君は日鷹君としてふるまわなければいけないわけだね」

改めて今回の任務の概要を聞き、影虎は重たい溜息を吐く。今回の任務を引き受ける決心は付いたが、未だ影虎が日鷹君に対する強い劣等感が全て払拭できた訳ではない。

「改めて、聞いてもやっぱりひっかかるねえ。どうして、影虎はこの真華ちゃんとわざわざ恋仲になって守らなければいけないのか。その理由が伝えられて無いところとか」

香奈の言うとおりの真華をどうして守らなければいけないのか、その理由は未だ明かされていない。

「その理由は他の忍者組織に情報がバレないためって……クソ親父が」

「それは半人前の影虎の場合でしょ。アンタよりも、実力が高くて権力が高いリーダーですら教えられないっていうのは……なーんかきな臭い」

香奈は険しい表情を作る。それにつられ影虎の表情も暗くなる。結果、食卓に異様な重たい空気が広がる。

その時だった突然、パンパンと手を叩く音が響く。

「ハイハイ、詮索はするだけ無駄だよ。現場の気持ちと上層部の考えが噛み合わないなんて、対して珍しくないでしょ」

「でもさぁーリーダー。今回ののは……」

香奈はハジメの言葉を聞いて尚も食いだらしない。そんな、彼女の気持ちを变えようとハジメは自分の考察を述べる。

「まあまあ、いったん落ち着いて香奈ちゃん。それに、全く分かってない訳じゃない。例えば、僕たちに教えることによって他の忍者組織に情報が漏れる可能性がある。そんな、殆どゼロに近い確率すら潰す、徹底した情報統制から恐らく、この真華という少女はかなり強力な妖具を保有、もしくははその居場所を知っている可能せいがある。そう考えればこの状況にも、上層部の考えも妥当性があると思わない」

二人は口を紡ぎハジメの考察について考える。ハジメは更に考察を展開する。

「そして、任務期間の三月三十一日という正確な日にちから察するに、この日を過ぎると対象者の持つている、もしくは知っている妖具は何らかの理由で効果を失う。もしくは、僕たちの手に転がり込んでくる可能性が高い。ね、そう考えれば普通じゃないこの任務も普通の任務だと思えてこない？」

その言葉を聞き先ほどまで暗かった影虎の表情は明るくなる。

香奈は一つ溜息を吐くとふっきれたのか

「まあ、もう受けると決めたしねえー。仕方無いか」

と言ひパンを口に運ぶ。これで、この任務に不信任を懐く者はいなくなった。

それを察知したハジメは今回の任務について新たな話題を開く。そして、一時間が過ぎる。「さて、とりあえず今、決めるべきところはこんな物かな。後は、各々明日から始まる任務の準備をするように。という事で解散」

ハジメはそう言うのと、食器を流しに置くとアジトを後にする。それに続くように影虎も席を立とうとするが、その肩を掴む者がいた。

「影虎ーどこに行くの？」

「えっ、いや、ちょっと筋トレを」

「アンタは日鷹になる特訓が終わってないでしょ！」

その言葉と共に影虎は無理矢理、椅子に座らせられる。

香奈は、影虎と自分の食器を流しに置くとエレベーターに向いながら言う。

「影虎は、今日一日。日鷹の表情をマネが出来るまで缶詰め」

そう言い真華はエレベーターに乗り込んだ。



ホテルのエントランスを抜け外に出たところでハジメは呼び止められる。

「リーダー、ちょっと待って」

「やあ、香奈ちゃん。どうしたんだい？」

「いやー、少し私も買い物をしたくて。ついて行って良い？」

「勿論」

ハジメは、瞳を細め怪しく笑いながら香奈の同伴を許可する。

それから、二人は街をブラブラと歩きながら、他愛のない会話を繰り返す。と、普通の者は思うだろうが実際は違う。

今、二人は声では無くまばたき、服のこすれる音などで言葉での会話と全く違う会話を繰り返している。

『で、僕を追いかけた理由は？』

『リーダーの今回の任務について、どう考えてるのか。本音が聞きたくてねー』

『おいおい、本音ならさっきの作戦会議で話したじゃないか？ 不可解な任務なのは確か。だけど、ちゃんと考えれば不可解な所にも理由が見える。けして、恐れるほどの任務じゃないと僕は考えているよ』

二人は、近くの三階だてのホームセンターに寄ると一階の日用品売り場に向う。

『そう……じゃあ、私も一つ今回の任務について考察をしても語ってもいいかな？』

『良いよ？ どんなの』

二人は、お互いを選んでカップなどを見せながら瞳で語る。

『多分、雑賀衆に裏切り物がある。それも上層部に。それは、他の上層部もなんとなく掴んでる。だから、今回の任務にかぎりキッチンと情報を流さない。何故なら、今回の任務に関する妖具が相当ヤバイ奴で、それが裏切り者に知られた場合、最良で街が減る可能性があるから』

『なるほど。確かにその考えもあるねー』

ハジメは、これでもかと言うほど嘘っぽく香奈の考察を肯定する。

『私の知っている雑賀ハジメという男はこんなことも分からないような思慮の浅い男じゃ無いんだよ……ねえ、リーダーはどうしてここまで、今回の任務を受けようと思ってるの？』

香奈は、鬼灯の描かれたカップを持ちハジメに笑みを向ける。しかし、その瞳は真実を語れ、と冷たく要求している。

ハジメは、ここで適当にはぐらかしても更に深い追究に会うとい考え、真実を語ることにした。

『香奈ちゃんは、やっぱり鋭いね。そうだよ、僕はなんとしても今回の任務を受けたいと思ってる。例え、任務の裏側にどんなドス黒い考えがあったとしてもね』

『理由は、影虎のため？』

『まあね。トラ君には強くなって欲しいんだよ。僕の夢のためにね。そして、強くなるため』

には今回の任務は外せない」

影虎は今までののらりくらりとした態度を潜ませ、真剣に自分の思いを香奈にぶつける。そして、その本音は香奈に届いたのだろうか

「はぁー、妬けるなぁー」

香奈は自分の正直な気持ちを口に出すと先ほど持っていたマグカップをハジメに手渡す。「あれ？ 香奈ちゃん。このマグカップはどうするの？」

「リーダーが買ってよー。あ、あと次は駅前に来たケーキ屋に行くからそこもお願いねー」
「あれー、僕おごる感じー」

「本当は受けたく無いけど、その気持ちを抑えてリーダーの考えに乗るんだからそれぐらいしてよねー」

ハジメは、とことこと店を出る香奈の後ろ姿を見ながら思った。自分の仲間は思慮深く、聡い。そして、自分でも扱いにくい強かさを持った誇れる仲間だと。そして、そんな仲間達と一緒にばきっと今回の任務も成功出来ると。

二章 四話 任務開始

空が白む時間。いつも通り、影虎は壁を背にして寝ていた体を起こす。それから、日課の柔軟、筋トレを行い眠っている体を完全に覚醒させる。

最後に、外に出てビルの屋上から屋上に飛び乗る、影虎式ランニングを行う。帰ってくる手早くシャワーを浴びハジメ達の朝食を作る。

影虎は本来、朝食どころか三日間は何も食べなくても良いのだが、ハジメからチームの中で一番早く起きることと、潜入任務のための訓練、と言われ作るようになったのだ。

朝食の目玉焼きを作り終わり付け合わせのサラダを作っていると

「おはよう。トラ君」

エレベーターの扉が開きハジメが現われる。

「あれ？ ハジメさん、今日は早いですね。いつもだったらまだ寝てるのに」

「うん、ちょっとこれを取りに下にね。ほら、ここ宅配こないから」

そう言い、ハジメは手に持っている袋を影虎に見せる。

「なるほど。それで、それは？」

「フフフ、良く聞いてくれた。じゃーん。これ、変装用髪色材。髪に塗ると簡単に色を変えられる優れたもの。中々、手に入らない上物だよ」

「はぁー、で……それを誰に使うんですか？」

「決まってるじゃん。君にだよ」

「えっ？」

「ほらトラ君、顔の作りは日鷹君と同じだけど髪の色は違うじゃ無い」

「あっ」

影虎は自分の髪を見る。影虎の髪は漆黒の黒に対して日鷹は綺麗な白髪だった。確かに、

このままでは一発で日鷹に影虎が成り代わっていると分かってしまう。

「ということ、トラ君。こっちおいで」

ハジメは柔やかな笑みを見せながら手招きをする。

「い、嫌です」

しかし、影虎はハジメの言葉を拒否する。

「えっ？ 嫌って君、何を今更。分かっているでしょ。こうしないと今回の任務そもそもスタート地点にすら立てないんだよ」

「わ、分かっていますけど……それでも、嫌です！」

影虎は、キツチンを飛び越え逃走を図る。

「逃がさないよ」

その後をハジメが追う。

「まったく、いつも従順なのに、なんでこんな時だけでも良い所で自我を発揮するかな」
「この髪は、ただでさえアイツと顔が似ている俺の唯一のアイデンティティーなんです。なのに、それすらも奪われたら……」

「どんだけ、嫌いなんだよ。日鷹君のこと」

縦横無尽に部屋を移動する影虎に対して、ハジメは的確に影虎の思考を読み先回りする。

「さあ。こんな無法なことは辞めて大人しく、その髪真っ白に染めようか」

「クソォー」

影虎は奥歯を噛みしめる。眼球を忙しく動かし逃げ道を摸索するが、どのルートを通ってもハジメに捕まる未来が見え絶望する。

だが、諦める訳にはいかない。この髪を失っては、影虎の中の何かが壊れてしまう予感があるのだ。

影虎は、ふうーと息を吐く。そして、大きく飛び跳ねると足の裏を壁に付ける。次の瞬間ロケットのように真っ直ぐに突き進む。

「嘘！」

ハジメは、影虎を止めようとするが間に合わない。影虎はハジメを突破したことに内心ガツポーズを取る。

その時だった影虎の目の前の扉が開き、影虎の進行方向に香奈が現われる。

「香奈さん！」

「へっ？」

影虎はどうか進行方向を変えようと体を捻る。しかし、間に合わず影虎はとっさに香奈を包みこむ。

目を開けた影虎の目の前には自分を睨む香奈の顔があった。

「かーげーとーらー。朝っぱらから、私を押し倒してどういうつもり？」

「えっ、いや。そのー」

激突する瞬間、影虎は香奈を包み混むように抱き締め香奈のダメージを最小限に抑えた

のだ。結果、影虎は今香奈を押し倒す形になっている。

影虎はすぐに立ち上がろうとしたときだった後からハジメの言葉が響く。

「ナイス香奈ちゃん。そのままトラ君を掴めて」

「はぁー、了解」

そう言い、香奈は服の中からロープを取り出す。

「えっ、ちょ、香奈さん！」

そのまま、影虎はあっという間に香奈によって拘束される。

「で、なんで朝から逃げてたの？ 影虎？」

香奈によって縛られた影虎は更に椅子に縛られ尚も暴れる影虎を見下ろすようにして香奈がハジメに問いかける。

「いやー影虎が日鷹君の変装するのを嫌がって」

「なるほどね。影虎、もう勘弁しな」

「分かっていますよ。でも、それでも」

未だ納得しない影虎に香奈はおもむろに服を脱ごうとする。

「ちょ、ちょっと！ 何してるんですか！ 香奈さん！」

「あんまり、聞き分けがないようだからねー。影虎、もしあんたがこれ以上抵抗するならば、服を脱ぐよ。それで、全部服を脱いだら今度は、アンタの唇を奪う」

香奈の突然の脅迫。影虎は、香奈の言葉を想像してしまい羞恥心が影虎は顔を赤く染める。

「そ、そんなことして、香奈さんは恥ずかしくないんですか！」

「別にいい。アンタも知ってるでしょ。くノ一が幼少からどんな訓練をどここされるか」

「うっ……分かりました。染めます！ 染めますから！ 服を来て下さい！ あ、後、その代わり、目隠しさせて下さい。少しでも現実逃避したいです」

影虎を椅子に縛ったまま洗面所に移動した三人。

ハジメと香奈は早速、染髪材を影虎の髪にかけながらなじませる。その間、終始影虎は体を動かそうとする。

「影虎動かない」

「だって、くすぐったいんです。あまり人に触られた経験もないし」
数分後。

「よし、こんな物かな。トラ君。目隠し取るよ」

「……はい」

目隠しを取られた影虎はゆっくりと瞳を開ける。そして、目の前の鏡に映る自分の姿を視認した瞬間

「あー！ー！ー！！」

絶叫した。そして、それが終わると、その場に崩れ落ちる。

そんな、影虎に優しくハジメが手を置く。

「まあまあ落ち着いて。お風呂入って髪を洗えばすぐに落ちるやつだから」
「……分かりました」

影虎は、今にも死に表情になりながらユラユラと洗面所を出るのだった。

「大丈夫かな？ 影虎」

「まあ、こればかりは彼次第かな」

それから、手早く影虎は任務の準備をする。制服に袖を通し、鞆に教科書を詰める。

「これが……制服」

影虎は人生で初めて着るブレザー制服が落ち着かないのか、何度も制服を見渡したりその場でジャンプしたりする。

因みに影虎に制服は特注品であり、防刃、防弾素材であり普通の制服よりも軽く動きやすいように作られている。

「似合ってるよ。トラ君。後は、これ」

ハジメは影虎に小さな機械を二つ渡す。

「一つは耳にもう一つは……ネクタイにでも付けおいて。自分じゃ対応出来ないような事が起きたらこっちで指示出すから」

影虎はハジメから手渡された二つの機械を言われた通りに取り付ける。

「うん。準備完了。じゃ、行っておいで」

「ハジメさん達はこないんですか？」

「うん、後で合流するよ。少し、やるべきことがあるからね」

「分かりました。なら、行ってきます」

影虎は仲間達に別れの言葉を言い、アジトを出ると、最寄りの駅に向う。

影虎の足ならば、建物の屋根を飛び乗りながら移動した方が早いのだが、日鷹が電車で通学していたので致し方ない。

駅のホームは通勤通学ラッシュということもあり多くの人間が電車を待っていた。大量の人間が各々別々の目的地に向う為に規則正しく並んでいる。

その光景は、任務の対象者と自分に襲いかかってくる敵しか見てこなかった影虎には奇妙に見えた。

(……落ち着かない……待つというこの現状も、人の多さも)

影虎は、自然と震える右手を左手に押さえ目の前に現われた電車に乗った。



「うー、吐きそう」

影虎は、幽鬼のような顔でフラフラと目的地である関原高校に向う。

(あんな、細い所に大量の人間。あんな場所、暗殺し放題じゃないか。恐ろしい。他の人間は、何か訓練を受けているのか。どっちにしろ今後、電車と駅は使わない方法での通学をハ

ジメさんに打診しよう)

そんなことを考えながら指定された通学路を歩いていると、少しずつ影虎と同じ制服を着た少年、少女が増えていく。

突然、影虎の背中に軽い衝撃が走る。

「ッ！」

影虎はビクリと体を上下に震わす。

(殺気は無かった！　なんだ、敵、死ぬ——)

「よっ！　おはよう。日鷹！」

影虎の頭が軽いパニック状況に陥っていると、そんな明るい声と共に肩に腕を回される。

影虎の顔の隣には髪をオールバックにした少年が屈託のない笑みを浮かべている。

「あ、ああ、おはよう」

影虎はぎこちない、笑みを浮かべながら挨拶を返す

「何だよ！　元気ねーな！　もしかて、まだ体調悪いのか？　それとも、久しぶりにあった

隣のクラスの親友。高山浩介たかやまこうすけを忘れたか？」

「い、いや、わ、忘れるわけ無いだろう」

影虎は、オールバックの少年もとい、高山の自分に向ける敵意でも殺意でも無い感情に戸惑いを感じながらもぎこちない笑みを感じながら返す。

「まあ、そんなら良いけどよ。あ、今度ゲーセン行こうぜ！　言い穴場、見つけたんだわー」

「わ、分かった」

「おうーじゃあなー、俺日直だから先行くわ」

そう言い、高山は学校に向かって走っていった。

「あんな、人間がいるのか」

影虎はそんな高山の少年の小さくなっていく背中を見ながらポツリとつぶやく。

自分よりも明らかに弱いのに、敵意や悪意や殺意を自分に向けない人間というのをこの日、初めて見た影虎の心は心地良いざわつきを感じる。

(変だな。まだ、任務も終わっていないのに嬉しいと感じるなんて)

影虎は、小さく息を吐き心を落ち着かせる。しかし、その心は簡単に波を感じる。なぜなら

「日鷹おはよう」

「石川先輩、おはようございます」

「石川！　久しぶり！　前の連勝試合、マジで助かったわ！」

「石川先輩に彼女がいるのは分かってます！　でも、これ受けとって下さい！」

などなどなど、学校に近づけば近づくほど、多くの学生に挨拶と共に正の感情をぶつけられる。その度に影虎の感情は大きく揺さぶられた。

結果、学校に着く頃には影虎には今までに感じたことの無い疲労が蓄積されていた。

(何なんだ。この学校は……俺を見れば嬉しそうに声をかけてきて。まさか……こうやって俺を疲れさせて、その隙に俺をやる作戦なんじゃ……)

そんな、有り得ない考察をしながら教室の扉を開く。

いっせいに向けられる視線に影虎はつい体を膠着してしまう。次の瞬間、影虎に向かってクラスメートの大半が集まる。

「久しぶり！ 日鷹！」

「季節外れのインフルエンザだって！ ドジな奴！」

「はい、日鷹君。これ休んでいた時のノート」

影虎は、次々と流れてくるクラスメート達の情報に目を回す。

「おい、おめえーら！ その変にしてやれよ。日鷹の彼女さんが通るんだからよ」

聞き覚えのある声に振り向くとそこには、今朝あった高山ともう一人見覚えのある女子がいた。腰まで伸ばした黒い髪と、赤い瞳が特徴的な少女がいた。

影虎の心臓が早鐘を打つ。何故なら、その少女が今回の任務の根幹とも言える少女、高坂こうさか

真華しんかだったからだ。

真華は日鷹の顔をジッと見つめる。影虎の手のひらに汗がにじみ出る。

(バレたか。俺が、日鷹だつてことが……いや、まさか、まだ何も俺は話してない。バレる要素なんてどこにも……)

恐らく、現実では一秒にも満たない時間。しかし、影虎には数十秒にも、数分にも感じる。

そして、真華は瞳に涙を浮べる。

「へっ？」

影虎が疑問に浮かぶのも束の間、真華は勢いよく影虎の頭を包み込み混み自分の胸に押しあてた。

「もおー心配したんだよー！ 急に連絡が取れないと思ったら季節外れのインフルで、携帯握れないぐらい弱ってるって親御さんに聞いてー。私、わたしー」

真華はそう言い、再度影虎の頭を強く抱く。そんな、状況をクラスメートは微笑ましい視線をむける。恐らく、これがこのクラスの常識なのだろう。

影虎は、手足をバタバタしながらぐもった声で真華に謝罪の言葉を述べる。

「す、ご、ごめん。謝るから、顔を」

「あ！ ああ！ ゴメン。私、つい嬉しくて」

そう言い、真華が手を離れた隙に影虎はすぐに離れその場から走りさる。

影虎は、廊下を全速力で走り抜け一番近い男子トイレに駆け込む。そして、手洗い場の前に立つや否や、今まで我慢していた鼻血を出す。数秒後、影虎は手洗い場を真っ赤にした。

(なんなんだ！ アレ。柔らかかった、めっちゃ良い匂いがした！ アレが、女性のおっぱ

……)

そこで、影虎は再度勢いよく鼻血を出し、再度手洗い場を赤く染めるのだった。

影虎は流水で血を洗い流しでついでに顔も綺麗にする。すると、影虎の耳にはめている通信機器にノイズが走る。

『やあやあ、トラ君。朝っぱらからお盛んだねえー』

通信機からハジメが聞こえた。

「ハジメさん。見てたんですか？」

『まあーねえー。因みに香奈ちゃんは呆れを通りこして笑い転げているよ』

「……面目ないです」

『謝る必要は無いよ。正直、僕たちも、対象者があそこまで激情家だとは思わなかったしね。まあ、とりあえ教室に戻りな。そろそろ授業が始まる』

「分かりました」

そう言い、影虎はトイレを後にした。

影虎がトイレを出て教室を後にすると、クラスメート達は心配そうに影虎に話し掛ける。

勿論、大勢の人に心配されるという経験も初めての影虎の頭はパニック寸前に陥りながらも何とか対処する。

と、そこで学校のチャイムが鳴り響く。本来なら、生徒達に時間を知らせる為ののだが、影虎には敵襲を教える音に聞こえた。

影虎の体は自然と臨戦態勢に入る。すぐにこの場から任務対象者である真華を抱えて逃げようとした時だった

『ストロップ!!』

影虎の耳にはめている通信機からハジメの声が制止のこれが響く。影虎は動かそうとした体を急に止めた為、バランスを崩し前に倒れる。

それを見たクラスメート達が駆け寄る。

影虎は、地面に倒れながら小声でハジメと会話をする。

「いきなり、何するんですか。ハジメさん」

『良いから、今は僕の指示通り話して。はい、復唱。いや、大丈夫。少し転んだだけ』

「いや、大丈夫。少し、転んだだけ」

その言葉に納得したのかクラスメート達は心配そうな顔をしつつ、自分達の席に座る。

影虎も、ハジメの指示で日鷹の席に着く。少しして、担任の教師が入りホームルームが始まる。

その間、影虎はハジメに学校の基本的なことを教わる。

香奈もハジメも小学校までは一般の小学校。そこを卒業すると、忍者になるための養成学校に入っており気づかなかったが、影虎は学校というのに行ったことがない。ゆえに学校の常識を知らないのである。

「分かりました。とりあえず、チャイムは敵襲音じゃないんですね」

『そう、それと授業が始まったら、前の黒板をちゃんとノートに写す。とりあえず、それだけしとけば乗り切れるから』

「了解」

そんなやり取りをしている間にホームルームが終わり、一時間目の授業が始める。科目は数学だ。

他のクラスメートがやっているように、影虎もノートを映す。しかし案の定、何を言っているのか分からない。

それもそのはず、学校に行ったことが無いということはすなわち勉強をしたことがないということだ。

数学なら、足す、引く、割る、かける、までは分かるが今行われている素因数分解などはさっぱりだ。

黒板の数字を見たり、教科書を捲ったりするが全くの理解不能である。

しかし、忘れてはいけないのは影虎は今、影虎では無く日鷹なのである。そして、日鷹は成績優秀ということもあり教師陣からも非常に信頼が厚い。よって

「では、この問題を日鷹君。答えてみてくれ」と、よく教師のあてられるのだ。

しかし、影虎は首をかしげるだけである。教師が何故、日鷹の名前を呼んだのか分からないのだ。

「日鷹くん。聞えているかね」

そこで、影虎の通信機からハジメが声を出す。

『トラ君。立って』

「あ、はい」

「どうしたんだね。日鷹君。いつもだったらすぐ答えるのに。まあ良い。この問題を解いて下さい。休み明けでも、君なら解けるだろう」

そう言い教師が黒板の問題に指を指すが当然、影虎は分からない。何か答えようと必死に頭を働かす。

その時だった、自分の裾を引っぱられるのを感じる。目線をずらすと、隣の席に座っている真華がノートに書かれた数字をペンで指している。影虎は、藁にもすがる思いでその数字を答える。

「さ、三、です」

「うん、正解だ」

クラスから感嘆の声が出る。影虎が席に突くと隣に座る真華が小声で影虎に話し掛ける。

「大丈夫？ 日鷹。まだ、調子悪い。保険室行く？」

影虎は保険室というものを知らない為、どう答えようか迷っていると通信機から指示が出る。

「いいや、大丈夫だ。ちょっと、休んで分からなかっただけだ」

「あ、そっか。じゃあ、今日の放課後ノート貸すね」

「あ、ありがとう。助かる、よ」

その後の授業でも、影虎は眉間に皺を寄せながら授業を受ける。しかし、ことあるごとに教師に当てられその度に、真華がサポートをしてくれた。

そして、あつという間に午前最後の授業を閉めるチャイムが鳴る。

今までよりもリラックスした教室の雰囲気影虎が慌てっているとハジメから補足が入る。

『昼休みのチャイムだよ。今までの休み時間と違って、少し長い』

「長いつて何かするんですか？」

『お弁当を食べたりするよ』

「持ってきてないですよ。弁当なんて」

『そこはまあ大丈夫。学校でも食料は調達出来る。お金は鞆に入れてあるから、安心して良いよ。それと、しばらく通信できないから。気をつけてね』

そこで通信が切れる。影虎は、鞆をさぐると忍具教科書の他に、入れた覚えの無い財布が入っていた。影虎はおそろおそろ開けてみると、中から一万五千円が入っていた。

(こ、これは……お札……初めてみた)

基本的に、お金は一円も持たない、何も買わない生活してきた影虎からすれば、お札というのは殆ど幻のような物体である。

「お、日鷹も売店か？ なら、一緒にこうぜ」

声のする方を見ると、そこには隣のクラスの高山と任務対象者である真華がいた。二人とも、財布を持っている。

真華とは一緒にいた方が良く考えた影虎は、コクリと頷く。

高山が言うには、弁当が無い人間は一階にある売店か食堂というところで食事を取るところを影虎は知った。そして、その二つは非常に混むらしくモタモタしていると何も買えなくなるらしい。ゆえに、三人は小走りで行ったが突いた頃には売店には多の生徒でごったがえしていた。

「あちゃー遅かったかー」

「これじゃ、今日はコッペパンかもねえー」

高山と真華が残念そうに肩を落す。そんな二人、というよりも主に真華の暗い表情を見て影虎はある事を思い出す。

(そういえば、良い彼氏というのは、恋仲の女性の望みを叶える存在のことを言うと、香奈さんが言っていたな)

影虎は目の前の群衆を観察し終えると高山と真華に声をかける。

「おま……じゃなくて、二人は何が食べたいんだ。俺が買ってくる」

「良いのか？」

「かま……別に大丈夫だ」

「そうか。なら、俺焼きそばパンと、カツサンド。真華は何にする？」

「えっとーじゃあ、メロンパン」

二人は、影虎に小銭を渡す。

「分かった。買ってくる」

影虎は、その場で軽くジャンプをすると地面を強く踏み込み一気に目の前の群衆に向かって行く。そして、一番後の生徒の肩に手をかけると一気に上に跳ぶ。

影虎の驚異的な跳躍力を見た生徒達は驚きの声を上げる。

そんな、生徒達に影虎は一言を投げる。

「すまん、どいてくれ！」

その言葉に生徒達は影虎が着地するであろう場所を空ける。

そして、その確保された空間に綺麗に着地した影虎は何もなかったように淡々と注文する。

「メロンパンと、焼きそばパンと、カツサンド……あと、フィッシュサンドをお願いします」

「あ、うん分かったわ」

影虎は袋に詰められたパンを持ち生徒の波をかき分け出て行く。

「買ってきた」

そう言い、影虎はパンの入った袋を突出す。

高山と香奈は、口をあんどりと開け固まっている。

「あっ」

その表情を見た影虎は気づく。自分がとんでもない過ちを犯してしまったことに。

(やべー。やり過ぎたー。絶対何か言われるよな……どうする。とりあえず、二人を気絶させて記憶を)

影虎の体が若干、下に下がる。そして

「日鷹凄い！ アクシヨンゲームのキャラみたい！」

「それ分かる！ お前！ 運動神経良いとは思ってたけどあそこまでとわなー」

日鷹が事前に運動神経が良いキャラを演じていたからか、それとも単に二人がお気楽なのかは分からないが少ないが今、二人の記憶をどうこうする必要は無いと考えた影虎は適当に話しをそらしながら移動する。



「うめー。やっぱパンは焼きそばパンに限るなあ！」

高山が青空の下でそう叫ぶ。ここは、学校の屋上。珍しく関原高校は屋上が開放されており、多くの生徒が憩いの場として使っている。

影虎は、特に好きでも無いフィッシュサンドをかじりながら高山と真華の話しに適当に相づちをうつが、その内容は全く分かっていない。その為

「なあ、日鷹はどう思う？」

「え？ あ、ああ……そうだな」

いきなり話しを振られると返すことが出来ない。

(こんな俺でも分かる。これは、不味い。二人の反応を見るに、全く日鷹を演じられていない……ど、どうする……)

影虎は内心冷や汗を流す。

その時だった、影虎の肌は針で刺されたような感覚に襲われる。

自然、影虎は残りのパンを全て口に放り込むとその場から立ち上がる。

「ん？ どうしたんだ日鷹？ トイレか？」

「あ、ああ。そんな所だ」

影虎は鋭くそう言うと言ったと屋上を後にする。

五話 敵対者

影虎が感じた針を刺される感覚に襲われるときは、いつだって殺気によるものだ。つまり、あの朗らかな空間の中にいた誰かが殺意を発したということになる。

影虎は迷うこと無く廊下を走る。そして、ある女子生徒二人を見つける。一人はポニテ。もう一人は三つ編みだった。

「なあ、アンタら。何者だ？」

女子生徒二人がいぶかしむような顔を見せる。

「何？ あなた、確か……日鷹くんよね」

影虎は、腰からクナイを取り出しそれを躊躇無く投擲する。

二人の女子生徒は影虎から繰り出されたクナイを軽々と避ける。その動きは、一般人の動きとはかけ離れていた。

影虎は目の前の二人を敵と断定する。

女子生徒二人も、影虎の敵意が伝わったのだろう。一瞬にして臨戦態勢に入った……と見せかけ、全身をバネのように使い脱兎のごとくその場から逃げる。

その動きに拳を突かれた影虎は一瞬、反応が遅れる。

幸い、ここは特別教室が密集したエリアであり昼休みの今は誰もいない。ゆえに、影虎は壁や、天井などを縦横無尽に走り周り女子生徒二人に化けている忍者を追いかける。しかし未だ追いつけない。

二人の忍者は示し合わせたように三つ編みの生徒がトイレの中に入りもう一人が、その場で影虎を待ち構えるように構える。

「一人でも、確実に逃がそうって魂胆かよ！」

影虎は迷わず扉の前に立っているポニテの女子校生に突っ込み攻撃を仕掛ける。しかし、ヒラリと交わされてしまう。

ポニテの女子校生は、未だ構えること無く余裕たっぷりに言う。

「ねえ、見逃してくれる？ 別に私達の任務アナタを殺すことじゃ無いの」

「じゃあ、なんで殺気を出した？」

「それは、有名人であるアナタがいたから少し威嚇をしただけよ。アナタなら、分かるでしょ。石川日鷹」

影虎は、顔を歪ませる。

「分かれねーな！」

影虎は、地面を強く踏み込み突っ込み再度ポニテの少女に突っ込む。敵のは一言、「そう」と答えると指を絡ませ印を結ぶ。

「〈忍法・火遁〉」

ポニテの少女は、口から炎を放出する。その炎が、影虎を焼こうと迫る。

しかし、影虎は方向転換したりスピードを緩めたりはしない。右足を軸に、凄まじいスピードの回し蹴りで眼前に迫る炎を切り裂いた。

そして、あと一歩で目の前にいるポニテの少女を捕まえられるところで、ポニテの醜女はまたもやヒラリと後に交わり、もう仲間が入っていた部屋に入る。

影虎も躊躇なくその部屋に入る。二人の少女が逃げ込んだ場所女子トイレだった。そして、その最奥には先ほどの少女が二人立っていた。

（自分を囮に逃げる作戦じゃ無いのか？）

そこで、影虎は足下が異様な冷たさを感じ、見るとトイレの床が水浸しになっていることに気づく。みると、蛇口から大量の水が勢いよく流れていた。

敵のポニテの少女が口を開く。

「ねえ、本当に私達を見逃してくれないの？」

「見逃さすか。尋問して目的を吐かしてやる」

「そうなら、仕方無いわね」

そういうと、髪の毛長くノ一がスカートのポケットからスタンガンを取り出すと電源をいれたまま水の中に落とす。影虎は敵の狙いが分かりその場を跳ぶ。しかし、間に合わず

「グアアーーーーー！！！」

影虎の体に激痛が駆け回る。

その隙に、二人の少女はトイレに備えつけられている窓か逃げようとする。

影虎は、今にも途切れそうな意識を必死に繋ぎ止めながら、制服の中に仕込んでいた鎖突き分銅を取り出し、それを投擲する。

「逃がすか！」

鎖突き分銅がポニテの少女の足に巻き付ける。

それにより、影虎の体に駆け回る電気が鎖を通りポニテの少女の体に流れる。トイレに高い悲鳴が響き渡る。

もう一人の三つ編みの少女は、一瞬逃げるのを躊躇するそぶりを見せたがすぐにトイレから脱出する。

水浸しの床に倒れたポニテの少女は最後の執念で近く落ちていたスタンガンの電源を切り意識を失う。

影虎もその場に倒れる。瞳を閉じそうになったその時だったこのトイレに近づいてくる足音に気づく。

この現場を見られれば最悪任務が失敗になる要因になってしまうと考えて影虎は、フラフラになりながら立ち上がり、自分の目の前で倒れているポニテの少女をトイレの個室に放り込むと自分はトイレから出る。

「あ、日鷹。こんなところに……いたん……だ」

その時だった今、一番聞きたくない少女の声が影虎の鼓膜を震わせる。

影虎はゆっくりと、声のする方を見るとそこには真華が驚いたような顔をこちらに向けていた。

「日鷹！ 大丈夫！」

真華が影虎に近づき今にも倒れそうな体を支える。

「制服もびっしりだし。というか、なんか焦げ臭い。とりあえず人を」

その言葉を聞いた瞬間、影虎の意識が少し回復する。そして、自分の体を支える真華の腕を掴む。

「俺は……大丈夫だ。少し、バケツを持った生徒とぶつかっただけだ」

「嘘。だって、こんな焼けど」

真華は、自分を掴む影虎の手を見ながら見る。

影虎はこれ以上追求されたら言い逃れ出来ないかと直感で理解する。ゆえに、どうにか納得する言い訳は無いか必死に頭を回転する。

その時だった、影虎の頭にあるシーン蘇る。そのシーンはこの任務に挑む前に香奈が参考程度に見せた恋愛学園ドラマ。その主人公がヒロインに告白するシーンだった。

影虎は今、自分の頭に流れるシーンをなぞるように体を動かす。最後の力を振り絞り、自力で立つと勢いよく真華を壁際に追い詰め、強く壁を叩く。俗に言う壁ドンをしたのだ。

いきなりのことで真華は驚くが、影虎は錦衣すること無く言い訳を述べる。

「これは、熱湯を持った生徒とぶつかっただけだ。この焼けどは、その時についたものだ。信じてくれ！」

そう言い、影虎はジッと真華の瞳を見据える。

真華は、いきなりの恋人の熱烈のアプローチによる胸の高鳴りで顔を赤くする。

「もう分かったから！ だから、離れて。恥ずかしい！」

そう言い、影虎を突き放す。影虎はとりあえず、ごまかせたと安心した瞬間力が抜けその場に倒れる。

自分を心配する真華の声を聞きながら、影虎の意識は闇に沈んだ。



影虎の瞳に映ったのは見慣れない天井。横を見渡せば、四方をカーテンで囲まれていた。次に、手を見るとそこには包帯が巻かれていた。

影虎は直近の記憶を遡る。慣れない授業、屋上で食べた昼食、そして突然感じた殺気を頼りにどかの忍者組織に所属しているくノ一を追いかけ……そして――

「ああー……！……！」

影虎は混濁していた記憶が鮮明に戻ると共に飛び起きる。理由は、真華を丸めこむ為に使った手口を思い出したからだ。

突然同時に四方を囲っていたカーテンが開く。

「五月蠅い！ 保険室では静かになって起きたのね。日鷹君」

影虎が視線を移動するとそこには白衣を着用し眼鏡をかけた若い女性がいた。

「アナタは？」

「あら？ 私を知らないってアナタ基本、保険室利用しないものね。私は、この学校の養護教諭よ」

「擁護……教諭」

勿論、影虎は擁護教諭の意味も保険室のことも知らない。しかし、なんとなく目の前の女性の雰囲気から自分を害する存在では無いと判断し、すこしだけ警戒を解く。

「あの、俺はどうしてここに？」

「あー、覚えてない？ やっぱ頭打ってたかー。君をここに君を連れてきた子が言うには、何か君熱湯を持った生徒にぶつかって熱湯を被ったんだって。その時、多分バケツで頭も打ったんじゃない？ どう？ 何か思い出した？」

「あ……はい」

（なんとか……ごまかせた……のか？）

影虎は少しだけ胸をなで下ろす。

「あの、それで何時ですか？」

「えっと、十七時ね」

「十七時……って授業終わってる！」

影虎はベットから飛び降りると保険室を出て行く。

「あ、ちよっと！ もし、酷いようなら病院に行くのよー！」

影虎はそんな言葉を聞き逃し教室に向う。

自分の知らない忍者がこの学校に潜入している。それは、つまり真華に危険が潜んでいる可能性があるということだ。そして今、自分が倒れているということは誰も真華を守る人間がないということだ。

影虎の頭に、嫌な予想が鮮明に導き出される。

影虎は教室の扉を勢い良く開く。

「真華！」

しかし、教室には誰もいない。ただ夕日に照らされた机が規則正しく並んでいるだけだ。(もう帰った……となると今は通学路のどこか。近くに潜伏している忍者に連絡を)

影虎は携帯を取り出した所で声をかけられる。

「あれ？ 日鷹。起きたんだ。迎えに行こうと思ったんだけど」

声のする方を振り向くとそこには、真華がキョトンとした顔を見ていた。

影虎はホッと息を吐くとすぐに、気持ちを切替える。

「あ、ああ。まあな。それより、こんな時間まで学校に残ってどうしたんだ？」

「えっ？ 忘れたの？ 今朝、休んでた分のノート貸真はすていったじゃん。だから、ずっと待ってたんだよ」

「そ、そうだったな。えっと帰るか」

ということ、影虎と真華は肩を並びて学校を出る。

「なんか久しぶりだねーこうやって帰るの」

「そ、そうだな。十日間はあつてないからな」

帰る道中の会話は、端から見ればそこまで対したことでは無いごくありふれた恋人の会話。会つてない、十日の間あったことや、次の休日についての予定。二人が好きで見えていたドラマの内容や、過去のデートのことなどなど。

影虎はその会話に相づちを打つがその実、全く分かっていない。表面上は笑みを作るが、内心どこか空虚さを覚える。

しかし何故、空虚さを覚えるのかは分からない。もし、懐いている気持ちが憎しみや嫌悪感なら理由は「日鷹に関わることだから」で納得できる。しかし、今懐いている感情はそれではない。今まで感じたことのない未知の感情。それに対する影虎の感想は一つだった。(……気持ち悪い……)

影虎は、この感情を押し殺し忘れようとした時だった

「そっちにいったら駄目だよ」

真華が一言影虎に声をかける。その言葉を聞いた影虎はハッと我に返る。

「ど、したの？ いきなり。帰り道、こっちじゃなかったけ？」

「あ、いや。ううん。あつてる。ただ、さっきのは、なんとなく出た言葉だったから」

影虎は、何故かそんな真華の言葉に酷く、興味を懐きつい言葉に出してしまう。

「な、なあ。変なことを聞くようだけど。その……どうしてそんな言葉がでたのか……聞かせてくれないか？」

「良いけど。本当になんとなくだよ。ただ、あの時だけは一瞬、日鷹が間違った道に進みそうだったから。つい声かけちゃった」

「……そうか……そうか」

何故か影虎は、そのあやふやな真華の言葉に嬉しさを感じ、自分でも驚くほど自然と笑みがこぼれる。

「やっぱり……私の気のせいか……」

「なんか言ったか？」

「ううん。何でも無い。あ、こちら辺で大丈夫」

そう言い、真華はどこにでもある一軒家の前で止まる。

「そうだ、これ休んでたぶんのノート。チャンと勉強しないと駄目だよ」

真華はそう言うと、数冊のノートを影虎に手渡す。

「じゃあ、また明日ね」

「ああ、また、明日」

そう言い、影虎はアジトに戻るのだった。

六話 蠢く影

アジトに帰り着いた影虎は即座にソファーに倒れ込む。

「おっ！ 珍しい、影虎がソファーを使うなんて」

数分後、アジトに香奈とハジメが帰ってくる。

「お帰り……なさい」

「どうやら、だいぶお疲れみたいだね。トラ君。どうだった、初めてだらけの学校は？」

「疲れました……精神的に」

「へえー、精神的に……ね。どうして？」

「……見てたんだから分かりますね」

「事実は分かるよ。でも君がどう感じたかまでは僕は分からないからね。それに、君には報告の義務がある」

「……なんていうか……あんなに殺意以外の感情を向けられたの初めてで、どうすれば良いか分からなくて……」

「怖いかい？ そうやって、今まで向けられたことの無い感情を向けられるのは？」

「ッ！ 怖くは無いです！ 忍者が、その程度で怖がるわけないでしょ」

「フフフフ。そうかい、それなら安心だ」

そう言いハジメは、ニヤリと笑みを浮かべながらキッチンに向う。

「初日を無事に過ごせたお祝いだ。今日は僕が何か作ろう」

影虎はまた、自分はハジメの手のひらの上で踊らされているのだとなんとなく察する。それに対して全く思わないことが無いわけでは無いが、いくら考えてもハジメの手のひらから抜け出すことは出来ないという結論に至りすぐさま考えるのを辞める。

その代わり、影虎は次に生かせるものが無いかと今日のことを振り返る。

思い返せば、今日は自分を日鷹と呼ぶものは多かったが嫌な気分にならなかったことに気づく。いつもの影虎ならすぐに今日呼ばれたぶんだけ日鷹に憎しみを募らせるか、もしくは特に考えず任務だからで耐えたと思えることを放棄するだろう。

しかし、この時の影虎は紳士に自分と向き合おうとした。

明確な理由は分からない。ただ可能性があるとするれば、このことを考えている時一緒に帰り道で真華に言われた一言が頭にちらついたのでからかも知れ無い。

(そういえば……何か忘れていたような……。そういえば、俺が彼女と一緒に帰るのがあんな時間になったのは——……ッ！)

「アーーーーー！！！」

影虎はソフアーから飛びのく。

急に叫びだす影虎にハジメと香奈は驚く。

「どうしたの影虎？ 急に叫びだして」

「くノ一！」

「はあ？」

影虎はすぐにエレベーターに飛び乗る。ハジメと香奈は、いぶかしみながらも影虎の尋常じゃない狼狽えように何かを感じとり後を追う。

影虎はエレベーターの隠しボタンを押す。すると、エレベーターの壁にひとりを通れる隠し通路が現われる。

影虎は、即座にその通路に体を寝かすと凄まじいスピードで滑っていく。

影虎の後を滑るハジメが声をかける。

「トラ君。どうしたんだい？ 急に緊急用の隠し通路まで使って」

「くノ一です」

「はっ？」

「あ、すいません。えっと、俺、二人と連絡が取れなかった時間帯、学校に潜入していた忍者を撃退したんです」

「はあーーーー！！！」

それから、影虎はその時のことを二人に説明する。因みに、説明し終えたと同時に隠し通路を滑り終わり地下の駐車場にたどり着いた。

「あんた、このバカ！ 捕まえた忍者を忘れて帰ってくるってそんなのあり得る！ 普通！」

「本当にすいません」

「まあまあ、今回は仕方無いつて香奈ちゃん。初めての任務でトラ君自身も色々あったんだから。それにトラ君は基本、殺し一本でやってきたんだから。ここは多目に見よう」

「影虎今度したら許さないから」

香奈の厚めの殺意を向けられ影虎は肩をふるわせながら

「はい」

と小さく返事をするのだった。

香奈も影虎にたいして厳しい態度を取るが内心、ハジメどのような仕方無いと思っている部分もある。

理由は影虎が今まで所属していた部隊に関係している、影虎が、ハジメのチームに所属するよりも前に所属していた部隊は〈暗部〉。主な仕事は、敵の忍者の撃退や裏切り者の殺害。ゆえに敵の拘束は不得意であり、生け捕りにした忍者の後始末など殆ど知らないのだ。

影虎達は、地下の駐車場に止まっているハジメのポルシェに乗り込む。因みに、この車には色々な改造が施されており、普段は一般人には視認することが出来ない。

その機能をフルに使い、人目につかないことを言い良いことにハジメは法定速度を無視し車を走らせる。

高速に移り変わる景色を横目に助手席に座る香奈がハジメに声をかける。

「ねえ、ライダー。勢いよく車を発進させたのは良いけどもうこんな時間だし。影虎が生け捕りにしたくノ一もう逃げたんじゃないの？」

「確かに、トラ君が生け捕りにしたくノ一はもういないかもしれないね。でも、そのくノ一とトラ君が戦ったならその痕跡を消す部隊が動いていると思わない？」

ハジメの意を理解した香奈が言葉をならべる。

「なるほど。つまり、その痕跡を消しにきた部隊を逆に捉えるってわけね」

「そう言うこと」

そして、ほどなくして関原高校についた三人は学校に潜入する。

校舎の中は月光に照らされており不気味ながらも幻想的な雰囲気を作りだしていた。

「ここが、学校かぁー。フッフ懐かしさを覚えるね」

「ハジメさんは、学校に行ったことあるんですよね」

「うん、あるよ。香奈ちゃんと、一緒に夜の学校を探索したこともあるよね」

「あーあったねえー。先生に見つかってもの凄く怒られた奴」

そんな昔話に華を咲かしながら三人は影虎が電気ショックをうけたトイレに向う。

「ここです」

影虎はそう言いトイレの扉を少し空けピタリと止める。

「どうしたんだい？　トラ君」

「ハジメさん。香奈さん、構えて下さい。多分、中で人が死んでいます」

「ッー」

「血の匂いがします」

影虎の嗅覚が察知したのは、強烈な死臭。恐らく、中で死んだ人数は一人、二人では無いだろう。

「分かった。良いよ、準備は出来た」

その言葉に、影虎はコクリと頷くと勢いよく扉を空ける。それとほぼ、同時だった。影虎の隙間をすり抜けるようにしてハジメがトイレの中に入る。そして、絶句する。

「これは……すごいね」

ハジメは、そう言い小さく笑う。トイレには、五人の遺体がならべられていた。その中には、影虎が撃退したくノ一もいる。

影虎は、身近にいた死体を無造作に触る。

「死んでから、そこまで立って無いですね」

「そうだね。死にたてはやはや。一、二時間ってところかな。後、殺したのは同一犯かな。」

刃の切り口が全て同じだ」

ハジメの言葉に、影虎は他の死体を見渡す。確かに、ここにある死体はどれも、肩から胸にかけて斜めに切られている。刃物の扱いに慣れた人物だとみるべきだろう。

「けど、なんで死体が？ 失敗した仲間の始末にきて共倒れ？」

「いや多分違うよ。この死体の持つている刃に血は付いてもの。恐らく第三者。ここからは、僕の推論だけどトラ君が倒したっていうくノ一は目を覚ました。ただ、人の目が突く昼間に逃げるのは得策じゃ無いと考えて夜に仲間が回収に来るのを待った。で、仲間が来たのは良いけれど、そこで第三者が登場。全員、殺されたってところかな。トラ君、とりあえず写真撮って本部に連絡。流石に、これの片付けをしにとね」

そこで、壁にもたれかかるように死んだ一人の忍者の持つている通信機に電源が入る。

『こちらB班。A班、連絡が無いがどうした？ 何かあったのか……A班！ 聞いているのか？ 今か！ そっちに行く。持ちこたえろ！』

そこで通信は途切れる。それを聞いた、影虎達の空気が凍る。

「……ハジメさん。こいつらの仲間が来たとして、この状況を見て俺たちは無実だって信じてくださいかね？」

「いや、無理じゃないかなー。流石に……逃げよう！」

その言葉に、影虎達はトイレから出る。そして、一番近くの窓から影虎が脱出しようとしたところで香奈から制止の声がかかる。

「待って、影虎。不用意に出ないほうが良いよ。この校舎、もう囲まれている」

「それは、本当かい？」

「うん、私ここに来るまでに忍法を仕掛けたから」

香奈は、右目を押さえながら言う。

「さすが、香奈ちゃん抜かりが無いね」

香奈の忍法は〈忍法・百目〉。壁や地面に特定の印を描くことで、その印が描かれた所から見える景色を自分の瞳に投影出来る忍法である。

「それで、敵の配置は？」

「全部の出入り口に二人。各階に二人。こっちに近づいてくるのが三人」

「それは、大所帯なこと。どっちに逃げれば良い？」

「あっち」

香奈の指示で、影虎達は廊下を走る。幸い、香奈の忍法で敵の居場所は筒抜けなため逃げただけならそこまで難しく無い。

三人は、なんとか学校を出るとハジメの車が止めてある駐車場に訪れる。

ハジメの車に手をかけたその時だった

「そこまでだ」

突如、影虎の首に刃物が押し当てられる

影虎はゆっくりと手を上げる。ハジメや香奈も同じように刃を当てられ手を上げている。

「どうやら、僕たちはおびき寄せられたみたいだね。で、なんで分かったのか教えて欲しいんだけど」

「すると、影虎の首に刃を当てている忍者が答える」

「こちら辺に潜伏している仲間から通信があつてな。いつもは見ない車が来た、とな。もしやと思ひ張り込んでいた。こちらからも、質問だ。俺の仲間を殺したのはお前らか？」

「いや違うよ。僕は君たちとは違う目的であの場を訪れたのさ」

ハジメはいつもの調子で言葉をならべる。そこに焦りなどは一切感じられない。

「そうか。分かった。なら、お前とその女だけは解放しよう。ただし、そこのお前だけは駄目だ」

そう言い、影虎を襲う忍者集団のリーダーらしき男は影虎の方を見る。

「おや、なんで彼だけ」

「簡単な話だ。今回殺された俺の仲間。その中のくノ一の最後の通信が、石川日鷹にやられたからだ。そこまで、言えば分かるだろう」

「ッ！ 俺は……」

影虎は自分が日鷹では無い事を明かそうとするが、ハジメの無言の圧で止められる。

ハジメが影虎の正体を明かすのを止めた理由は、ここで影虎が日鷹ではないと分かれば今の任務に支障をきたす場合がある。

「なるほど。だから事情を聞きたい、と。悪いけどそれは出来ない相談だね」

「ならば、どうする。ここで、首をはねられるか？」

「それもゴメンだ。だから、君には危機的状況に陥って貰う」

その言葉と共に、ハジメは目にも止まらない早さで懐から拳銃を抜き香奈の首に刃を当てている忍者の腕を打ち抜く。

それと、ほぼ同時だった。影虎は勢いよく膝を折りしゃがむと、敵の足を払いバランスを崩させる。そして、流れるように敵の忍者を組み伏せるのだった。

見ると、香奈も影虎のように敵の忍者を拘束していた。

そして、ハジメは刀を向けられながらも、敵の忍者に銃口を向けている。

「これで、形成逆転。君は、危機的状況だ。君の腕なら僕を殺すことは出来るだろう。だけど、その間に仲間は確実に死ぬ」

「……貴様！」

「おっと、勘違いして欲しくないんだけど、別に僕たちだって君と争いたい訳じゃ無い。どうだろう？ ここは、共同戦線と行こうじゃないか」

「何？ そんなことをして、何になる？」

ハジメの思わない提案に敵の忍者はいぶかしむように瞳を細める。

「まあまあ話を聞いてくれよ。まず、君の仲間のくノ一を傷つけたことは謝ろう。すまなかった。でも任務の途中、他の忍者組織の忍者が急に現われあまつさえ殺気を向けられたら、少し手荒いことをしなきゃいけない。それぐらい君たちだった理解しているだろう」

「……」

ハジメの言葉に、敵の忍者は黙って聞く。恐らく、ハジメの言葉に嘘がないか冷静に吟味しているのだろう。

「そして、あの現場。あれは、僕たちがついた頃にはあーなっていた。分かるかい？ 僕達が行う任務場所、あの数の忍者を難なく屠ることが出来る存在が近くにいます。僕たちだって少しは戦力が欲しいのさ」

影虎は、ハジメを見ていつも思う。この人の人心掌握術は、化け物のレベルだと。

もし、この言葉を先ほどの全員が首に刀を当てた状況で言ってもただの、言い訳にしか聞えないだろう。

しかし、相手よりも圧倒的に有利な状況で述べることで真実味を持たせる。しかも、同時に相手に要求を言うことで飲まさざるを得ない状況を作ること、相手の思考を狭める。

「自分で言うのもなんだけど、どうだろう。そこまで悪い要求じゃないと思えるけど？」

「……分かった。だから、俺の仲間を解放してくれ」

「勿論」

その言葉に、影虎と香奈は敵の忍者から離れる。

「共同戦線というのは本当だな」

「嘘じゃないよ。さっきも言ってけどこっちだって利のある提案なんだから。で、共同戦線を張るにあたって質問なんだけど。どうして君たちはあの学校に？」

「お前は、仙人せんじんという存在を知っているか？」

「噂程度には、ね」

仙人というのは忍者界限でたまに名前が上がる謎の人物である。容姿、目的、一切不明。ただ、何の脈絡も無く妖具を集めてはそれを一般人に渡す迷惑な存在ということだけは分かっている。

「その仙人が俺らの持っていた〈妖具〉を盗んだ。そして、あの学校に潜入した可能性があった。だから、俺の部下をあの学校に潜入させていたのさ」

「なるほど。その仙人が盗んだっていう〈妖具〉はどんなの？」

「そこまで、教えると思うか？」

「まあ、教えてくれないよね。良いよ、まあ、促成の共同戦線だし。お互いの情報共有はこんなものですよ。じゃあ、まあお互い任務が達成できるように頑張ろう」

ハジメは、そう言い手を差し出すが敵の忍者は、その手を握らず目の前から消えた。

「振られちゃった」

ハジメはそう言いヘラヘラと笑った。

アジトに戻る途中。影虎は、ハジメに先ほどの共同戦線について聞く。

「ハジメさん。さっきの共同戦線は本当に受けるんですか？」

「まさか。あれはあの場を着る抜ける為の方便だよ。多分、相手もそれぐらい分かっているん

じゃないのか？」

「じゃあーなんであいつらはハジメさんの提案を？」

「方便と分かっているにしても望みがあると思ったからじゃない。実際、彼には僕たちがかんりの実力者に見えたはずだ。そんな、実力者から提案を飲まないなんて選択を普通忍者は取れない。トラ君だって分かっているでしょ。忍者の第一目標は何があっても任務を遂行させることだからね」

「なるほど」

影虎はあの短い会話の裏にそこまでの複雑な読み合いが隠されていたことに感嘆の声をもらす。

「それに彼らもたらしてくれた情報は、僕たちの任務に大きな前進をもたらせた」

「大きな前進ですか？」

「そう。例えば、高坂真華の妖具を狙っている敵の一人は仙人だということさ」

ハジメの突然の推論に影虎は驚きを隠せないでいる。

「仙人……なんでそうなるんですか？」

「じゃあ逆にきくけど、どうして仙人が関原高校にわざわざ潜入したと思う？」

「それは……アレ？」

影虎は答えようとして頭を捻る。影虎も仙人については知っている。妖具を一般人に渡す謎多き存在にして、全ての忍者を敵に回しているにもかかわらず、全く尻尾をださない存在。そんな存在がはたして、簡単に敵に見破られる場所に潜伏するだろうか？

「何か目的があつて……あの学校に潜伏した」

「恐らくね。そして、その目的が高坂真華の保有もしくは居場所を知っている妖具だと思っている。気をつけて、トラ君。多分、今回の任務は最初、予定していた以上に難易度が高いかもしれない」

影虎はハジメのその言葉を聞き、ゴクリと醵を飲み込んだ。

三章 失敗

七話 影虎の過去

「日鷹、前も話したけどさ。明日は、デートだからね」

「えっ?!」

影虎がこの任務について十二日後の金曜日。下校中のことだった。真華の突然の申し出に、影虎は瞳をパチクリとしばたかせて驚く。

「えって。影虎忘れたの？ もぉー」

真華は頬を膨らませる。

真華の態度に直感的に不味いと感じて影虎はすぐに弁明する。

「わ、忘れてない。その、だ、大丈夫。ち、チャンと覚えてる。いきなり、言われたから驚いただけだ……」

そんな影虎の態度にクスクスと真華は笑う。

「何そんなテンパっちゃってるの？ まあーだけど、忘れてないならいいや。じゃあ、明日関原駅に十時集合ね」

「わ、分かった」

影虎はいつも通り、真華の家の前で別れる。

(デートって……あのデートだよな……)

真華と影虎分かれた影虎はデートのことで、頭がいっぱいになる。しかし、それはデートが楽しみだからでは無い。

日鷹になりきってデートをやり遂げることが出来る自分を描けないからだ。

影虎は、アジトに戻ると食卓に座り頭を抱える。見ると、ハジメが帰ってきた。

ハジメは、顔を歪ませながら悩んでいる影虎に声をかける。

「おや？ どうしたんだい？ トラ君。そんな難しい顔をして」

「……ハジメさん。実は、明日デートをすることになりました。それで、明日どうすればいいか分からなくて」

「なるほどね。確かにトラ君、休みを貰っても基本的に修行しかないもんね。仕方無い、明日は、全面的にバックアップをしよう。幸い、こっちには日鷹君が今まで高坂真華とどういうデートをしたかの情報を持つてるし。それを、元にならある程度デートプランは作れるでしょ」

「すいません。ハジメさん達は、仙人のこともあるのに」

「良いよ。元々、僕達の任務はこっちだし」

最近、影虎が学校の常識などを覚えたこともありハジメ達のバックアップは不要になりつつあった。

その空いた時間を使い、ハジメと香奈は仙人がどこに潜んでいるか探索を行っている。

ハジメの考えでは、自ら捜すようなことはせず仙人が手を出してきた所を逆に撃退、捕獲する算段だった。

しかし、例の共同戦線の一件から数日後、甲賀の忍びから手を貸せという通達がきたのだ。

あの時、ハジメから共同戦線を言い出した為断ることもできず、しぶしぶハジメと香奈は甲賀の忍者と共に仙人探しを行っているのだ。

「でも、アイツらまた何か言いませんか？」

「そこは大丈夫でしょ。こっちはこっちで任務があるんだ。言えば黙るさ。彼らも、僕らと無用な争いはしたくないだろうしね」

「なるほど。あれ、そういえば香奈さんは？」

「まだ彼らというよ。香奈ちゃんの忍法はこういう任務には持って来いだからね」

その時だったアジトの窓からコツコツという音が聞える。見ると一羽の鴉が窓を突いている。

影虎は窓を開き、鴉を腕に乗せ室内に入れる。その鴉の足には紙が巻き付いている。これ

は、電波が通じない場所にいる場合や危機的状況に陥ったときに近くの動物に暗示をかけて仲間に情報を渡す方法である。

自然、影虎とハジメの間に緊張が走る。影虎は勢いよく紙を広げる。そこには、赤い液体で記号が三つ書かれていた。

影虎もハジメもそれを見た瞬間、すぐさまアジトの緊急用入口を使う。

「ハジメさん、あの赤い液体って血、ですよね」

「そして、あの文章。忍者文字助けて。どうやら香奈ちゃんがピンチみたいだ！」

ハジメは奥歯を噛みしめながら吐き捨てた。

◇◇◇

影虎とハジメは手紙を持ってきた鴉の案内で隣町の住宅街を訪れる。そこに存在する小さなアパートと一室の扉を影虎とハジメは勢いよく開ける。

中にいた五人の男女が影虎たちの方を向く。その中には、香奈もいた。

「香奈さん！」

「あ、リーダーに影虎。来てくれたんだ」

香奈は二ヘラと笑う。その腕には包帯が巻かれている。しかも、その包帯も赤く染まっており傷の深さを感じられる。

それを、見た瞬間ハジメは瞳を開けズカズカとは正宗に近づくと、躊躇いなくその頬を殴る。

周りの忍者がハジメに敵意を向ける。しかし、そんなことを気にせず再度拳を振り上げる。その拳をハジメが止める。

「ハジメさん。それぐらいで辞めましょう。それ以上すると、他の人たちが黙ってません」

そう言い、影虎は甲賀の忍者を鋭く睨み威圧する。

その影虎の威圧感に気圧され甲賀の忍者達は若干体を怯ませる。しかし、それでもアパートの一室は一触即発といった危険空気が漂う。

その空気を止めたのは以外にも殴られた正宗だった。

「お前ら辞めろ！ これは、強力者を傷つけた俺に対する罰だ。一発は受入れる」

正宗のその言葉に、甲賀の忍びは敵意を納める。それにより影虎も威圧を止める。

「トラ君。もう大丈夫だから手、離して良いよ」

影虎はその言葉を聞き、手を離す。

ハジメは、ゆっくりと息を吐くと話しを切り出す。

「で、どうしてこんな状況になったのさ。君の部下はもったいなかっただろう」

ハジメの言葉に甲賀の忍者は皆、苦虫を噛みつぶしたように顔を顰めて言う。

「……他の奴らは死んだ。予想外だった。まさか、仙人にあれほどの仲間がいるとは」

正宗の言葉で影虎とハジメは状況を察さした。恐らく、彼らは仙人に近づき過ぎたのだ。

ゆえに、返り討ちにあったのだろう。

目の前にいる正宗は決して無能ではない。影虎達の任務初日の夜。即座に部下に何かあったと感じ取り的確に部下を配置した指揮能力。そして、一度は、影虎達を追詰めた読みの鋭さは間違いない一流の忍者と言っているだろう。

それに付き従う部下も当然優秀だ。そんな彼らが、ここまでの壊滅的な被害を受けた。そんな揺るぎようが無い現実とは自然と影虎達の意識を一変させる。

「正宗、君の仲間はこれで全員かい？」

「ああ。他の奴らは全員死んだ」

「分かった。今生きている全員は雑賀衆のアジトに匿おう」

「ッ！ 良いのか？ 他の忍者を招いて」

「勿論、相応の対価は支払って貰う。ただ、ここで仲間が死ぬのを待つよりはマシでしょ」
正宗の仲間の中には明らかに重傷の者もいた、このまま放っておけば数時間後には骸になるだろう。

正宗に躊躇するそぶりは一切無かった。

「分かった。頼む」

そんなやり取りを見ながら影虎は未だ全神経を敏感にさせ警戒する。そして、そんな影虎の神経に殺意という波動を感じ取る。

瞬間、影虎は地面を勢いよく蹴っていた。そして、目にも止まらない速さで甲賀の忍者の腹部を手刀で貫く。

突然のことに、ざわめきが走る。

「お前！ 俺の仲間を！」

正宗が今にもつかみかかる勢いで影虎に怒声を浴びせる。しかし、影虎は気にせず自分が殺した忍者の顔に触る。

「お前の仲間っていうのは、こういう顔をしているのか」

そう言い、影虎は殺した忍者の顔を剥いて見せる。剥いだ顔の下にはもう一つ顔が現われる。

「変装……だと」

正宗が驚愕したように声を出す。

「トラ君。この中に、他に変装した者はいるかい？」

「いえ、ただ。今すぐにここを出た方が良いです。敵が集まっています」

「分かった。さ、動ける人は、動けない人を連れてここから出るよ」

ハジメの言葉に甲賀の忍び達は素早く逃げる準備を済ませると、アパートの窓から出ていく。

「おい、お前はでないのか？ 日鷹？」

そう言われた影虎は冷たく言葉を返す。

「誰かが 殿しんがりを勤めないと全員死ぬだろう。あと、俺の名前は日高じゃねー。影虎だ。ハジメさん達に何かあったら殺すぞ」

「あ、ああ、肝に銘じよう。影虎」

正宗はそう言い、アパートを出た。

時間は夕暮れを過ぎであり殆どの人間が帰宅を終わらせたこともあり、住宅街には殆ど人は出歩いていなかった。その為、ハジメ達は人目を気にすること無く移動することが出来た。

「ハジメ。あの影虎とかいう男は何者なんだ？」

移動の中、正宗は影虎について聞く。二人とも、人を背負っているにも関わらず凄まじいスピードで道を走っている。

「僕の誇れる部下だよ」

「それは、分かっている。そうではなく、あの男の正体だ。あの異常な索敵能力。それに、人を素手で貫く人間、いや忍者離れた怪力。普通じゃないぞ」

基本的に忍者というのは速さに重点を置く。そのため、体重は昔から米俵一個分。現代で約六十キロが最適と言われている。

そのため筋肉は必要最低限しか付けず忍法でも使わない限り素手で人を貫くなんて芸当は出来ない。ゆえに、それが出来る影虎に疑問を持ったのだろう。

ハジメは一瞬どこまで離せば良いかを考えた後、瞳に悲しみを孕ませ言葉を吐く。

「そうだね、まあ彼が怪力なのはある種の呪いかもね。彼は忍法を使えないんだよ」

「ッ！ それは本当か？」

「嘘だったらどんなに良かったか。ただ、その代わり彼には類い希な怪力と人外離れた身体能力を産まれながらに有した。ただ、そんな彼を彼の家族は受け入れなかった」

ハジメは端的に影虎の生い立ちを話す。

物心つく前には、彼は家族の意向で〈暗部〉という裏切り者の抹殺と他組織の忍者との戦闘のみを行う雑賀衆の中でも最も血なまぐさい組織に所属させられたこと。

〈暗部〉の修行の一環ということで、物心ついた頃から十五さいまで同じ〈暗部〉の忍者に朝から夜まで命を狙われ続ける生活を送ったこと。

そして十六歳になり〈暗部〉の幹部を一人殺し、幹部の座に突きやっつと一般的な忍者らしい生活を送れるようになったことを話した。

それを聞いた、正宗は顔を顰め嫌悪感を表す。

「ハジメ。助けられて、こういうことを言うのもアレだが貴様の組織はクズだな。その昔話、どう考えても影虎を合法的に殺すためだろう」

「そうだよ。流石に僕もこのときは憤ったね。でも、これで君の疑問も解消されたでしょ」

正宗は何も答えなかった。



影虎は自分しかいない静寂に包まれたアパートで立ち尽くす。影虎の肌にはチクチクと殺意に波動を感じる。

(こっやっって一人っていると、昔を思い出すな)

寝ても覚めても敵意と悪意と殺意が纏わり付き、目の前に映るものは全て敵というある種絶望的状况。

だが、そんな状況を影虎は懐かしく思い、皮肉にも安心してしまうのだ。

「入ってこいよ。俺を倒さないと、お前らが殺したい敵にはたどり着けないぜ」

その瞬間アパートの扉が勢いよく開き、無数のクナイが飛んでくる。

「畳替えし！」

影虎は勢いよく畳みを叩き起き上がらせと盾のように使いクナイを受け止める。

即座に影虎は畳みから離れる。一拍遅れ、畳みが刀で真つ二つに切り裂かれる。続いて、刀を持った刺客は刀を一直線に突出す。

影虎はあえて近づき、刺客と肉薄すると顔面を掴み床にめり込ませる。

影虎は扉に向かって言い放つ。

「全員で来い。じゃねーと、俺には勝てないぞ」

次の瞬間、影虎はアパートの壁を壊し外に出る。影虎は空中で回転し着地する。しかし、壁を壊した音で近隣の住民が騒ぎ出す。

(チッ。やっぱ挑発するのは、辞めた方が良かったか?)

影虎はアパートから見下ろす忍者に言い放つ。

「こっちだ、突いてこい！」

影虎はすぐに近くの住宅の家に登り、ハジメ達とは逆方向に走る。

チラリと後を見ると、七人の刺客が影虎を追っている。その服装は、体を覆う外套に無機質な仮面を被っている。

彼らは、一糸乱れぬ動きでクナイを投げる。しか影虎は全て避けると、立ち止り迎え撃つ。

刺客達の動きを即座に読み取り、一人一人的確に攻撃する。

しかく刺客達は、何も無かったように再度追撃をする。

影虎は多少驚きながらも再度走り出す。

数分後、影虎は河川敷でその歩みを止める。それにより、刺客達も歩みを止めた。

影虎は腰のホルダーから二つのレバーの突いた円柱を取り出す。手榴弾である。

しかし、刺客達に焦るそぶりは無い。いつせいに指を絡ませ印を結ぶ。影虎は、なんとなく直感でその場を跳ぶ。

直後、影虎の足下に無数の糸が張り巡らされる。影虎はその糸に見覚えがあった。

(これは、操糸！　なんで、こいつらが)

その忍法は、伊賀の神楽場という男が使った忍法である。この忍法を使えるとなると、彼

ら刺客達は伊賀の者という事になる。

(まあ殺して、顔を見れば分かるか)

影虎は、川に足をつくると一直線に刺客達に肉薄する。そして、次々と蹴りを放ち刺客達を川に落す。

刺客達はすぐに、立ち上がるが既に先ほどいた所に影虎の姿は無かった。

刺客達は、当りを見渡す。

「こつちだ、バカ！」

その声に刺客達は上を見るとそこには影虎が勢いよく落下していた。

影虎は、刺客達の中央に着地すると安全ピンを抜き手榴弾から手を離す。直後、手榴弾は川の中で爆発し影虎もろとも刺客達を吹き飛ばした。

影虎は、むくりとその場立ち上がる。

「元々、威力を抑えて水の中で爆発させて……この威力。作ときミスったか？」

影虎は痛む体を我慢しながらヨロヨロと刺客達に近づく。

実は、影虎はこの刺客達に奇妙な感覚を覚えていた。

影虎は今まで多くの他組織の忍者と命のやり取りを行っていた。ゆえに、一度刃を交えた忍者の技や戦い方を決して忘れない。

今回の刺客である。先ほど、放った忍法は間違いない伊賀の忍者が使う〈忍法・操糸〉。

しかし、今までの連携は〈風魔〉というまた違う忍者組織の戦い方なのだ。

影虎は近くに倒れていた刺客の仮面を剥ぎ取る。そして、驚愕する。

「……死んでる」

勿論、先ほどの爆発で死んだとも考えたが、それにしても死体の腐敗が早いと感じた。

「どういうことだ？ 傀儡？ いや、あの殺気は本物だった。じゃあいったい……えっ？」

影虎の胸に鋭い痛みが走る。影虎は自分の胸を見ると、そこに鋭い刃物が貫通していた。

影虎の喉から熱い物がこみ上げる。

(刺された？ 気づかなかった！ 殺気はなかった！ いつの間にか誰がどうやって！)

影虎の頭が突然の出来事に混乱する。しかし、影虎に頭脳とは裏腹に体は自然と動く。

刃を強く握り抜けないようにすると振り返りざまに回し蹴りを放つ。

その蹴りは、敵にとつて予想外だったのだろう。かかとが、顔面にめり込む感触が伝わる。

しかし、影虎の攻撃はそこまでだった。刀に刺されたダメージが思いのほか大きく影虎はよろけてしまう。

それを敵は見逃さない。体制の崩れた影虎を優しく川に突き落とす。影虎はそのままゴロゴロと転がり川に落され流されていった。



しばらく、影虎は意識を失い川の流れにそって流されるが、途中で意識を覚醒させる。そ

して、残った力を振り絞り岸にしがみつき川から脱出する。

そして、岸に横になる。先ほどまで水の中に入っていたこともあり寒さで影虎の体は震える。

影虎は、チラリと空を見る。空は皮肉にも、最後に日鷹にあった時と同じく星が良く見える夜空だった。

それを思い出した瞬間、影虎の中で日鷹に対する憎悪にも似た何か燃え上がり、最後の力を振り絞り携帯端末のボタンを押す。

八話 デートと因縁

影虎は瞳を開ける。視界に映るのは見覚えのある天井。

「ここは……アジト」

影虎はゆっくりと体を起こす。直後、影虎の体に激痛が走る。

「痛った！」

影虎の声がアジト中に響く。そのより、影虎の部屋にハジメと香奈が急いで現われる。

「影虎！」

「トラ君！」

「ハジメさんに香奈さん。おはよう、ございます」

影虎はできる限りの笑みを作る。そんな影虎の態度に二人は、へなへなどその場に腰を下ろす。

「良かったー！」

「あの、俺どうなったんですか？」

「覚えてないのかい？ 君、携帯端末で僕たちを呼んだんだよ」

「ああーそうなんですか。あの、甲賀のやつらは」

「全員、アジトに匿わせたよ。しばらくは、安全でしょ。甲賀の本部も近いうちに来るっていうし。もしかしたら、今回の仙人の件は甲賀と雑賀の共同任務になるかもね。まあ、僕たちに話しが来る可能性は低いけど」

「そうですか」

影虎は、自身で買ってでた役割をキッチンと全うできたことに満ち足りた充足感を得る。そこで、ふと影虎は自分の窓から見える空の景色を見る。空は快晴であり、太陽は天辺に昇ろうとしていた。そこで、影虎の体に電流が流れる。

「ああ！ ハジメさん、今何時ですか！」

「十時半だよ」

それを聞き、影虎は勢いよくベッドから出ようとするが体が思うように動かず、ベッドから転げ落ちる。

「トラ君！ 何してるの？」

「デートですよ！ すっぱかしたら、やばいじゃないですか！」

「いや、落着いてトラ君。そっちはもう手を打ってある」

そう言いハジメは影虎にスマホを見せる。そこには、今日は法事があっていけないという旨の文が書かれていた。

「ね、だから、今日はゆっくりと休みなよ」

「……分かりました」

影虎は少し不満そうな顔をするが、しぶしぶ承諾する。

「じゃ、休みついでに例の戦闘について聞いてもいいかな？ 僕の見立てだと、戦闘におい

て君がそこまでの重傷を負うなんて普通じゃ無いとかんがてるんだけど。何があったの？」

影虎はハジメと香奈に昨日の敵について話す。全てを聞き終わったハジメは整理するよう口を開く。

「……なるほどね。腐敗した死体……か。それってこの写真の中にいる？」

そう言いハジメは五枚の写真を見せる。その中には昨夜、影虎が仮面を剥ぎ取り確認した顔もあった。

「これはいました。ただ、他は……あの昨日の刺客は回収出来たんですか？」

「いや、出来なかったよ。この写真は今朝ゴミ捨て場で見つかった死体の写真だよ。流石に奇妙だったから他の忍者がこの死体について調べたんだよ。ただ、全員忍者ではなかったから、このままただの殺人事件として僕たちは介入しない予定だったんだけど……トラ君の証言が本当なら、そうもいなくなりそうだね」

「マジですか」

影虎はそこまで聞き一度話しを整理する。

昨日影虎が撃退した刺客は倒した後、調べると死体だった。しかも、その死体は今朝、ゴミ捨て場で発見。しかも、全員忍者では無く一般人。

「仙人の忍法？」

「その線が一番濃厚だろうね。もしくは、甲賀から奪った〈妖具〉という線かな」

死者蘇生の〈妖具〉。少し信じられないが、可能性としてゼロでは無い。

ハジメと香奈は席を立つ。

「僕たちは、少し出てくるよ。トラ君のさっきの話しを伝えてくるよ」

「影虎は寝てるように」

そう言い、二人はアジトを後にする。

十分後、影虎はベッドで横になるのが落着かずゆっくりと体を起こす。

忍法を受け継げなかったがゆえに得た驚異的な身体能力と怪力の他にじつは影虎は回復能力も人並み以上であり今回の傷も痛みこそすれ、見た目よりも酷くはないのである。

「暇だ」

影虎はアジトの中を行ったり来たりする。そして、徐にパーカーを着ると財布と携帯端末を持ち、外に出るのだった。



(何をしているんだ……俺は)

気がつくくと、影虎はデートの待ち合わせだった関原駅の前に来ていた。駅には、多くの人
がおり影虎の表情はゲンナリと暗い者になる。

(帰ろう。こんなところ、香奈さんに見られたら何を言われるか分からないし)

影虎はトボトボと駅から離れていく。その時だった

「あれ？ 日鷹！ 日鷹！」

影虎の体が自然と反応する。

チラリと声の方を見ると、そこには買い物袋を持った真華がいた。

影虎は気づかれないようにフードをかぶりその場から離れようとする。しかし、その程度
では、真華の目はごまかせなかった。

「日鷹！」

真華は一直線に影虎のところに向うと、その手を掴む。

「なんで、ここにいるの？」

「い、いや、俺は日鷹じゃ」

「もおー、下手な嘘は突かないの」

そう言い真華は影虎のフードを取る。そこで真華は自分が勘違いしていたことに気づく。

「あっ！ ごめんなさい！ 私、知り合いと勘違いして、失礼なことを」

「いや、別に大丈夫だ」

「……」

二人の間に、気まずい空気が漂う。

「あの、変なことを聞くようであれなんですけど……もしかして、影虎さんですか？ 日鷹
のお兄さんの」

「あ、ああ、そうだ、です」

「やっぱり！ 凄い！ 本当に似てる。髪以外は」

「あ……まあ、双子だからな」

影虎は久しぶりに感じる日鷹の嫌悪をできるだけ顔に出さず当り触りの無い答えを返す。

「あれ？ けど今日は法事……あっすいません！ なんか！ 影虎さんは、その」

真華の急なよそよそしい態度に影虎は違和感を覚える。

「ちょっと待て！ 真華、さんは、俺のことをアイツにどう聞いているんだ？」

「えっと……訳あって日鷹の家族とは住んでいない……ですよね。お家の都合とかしきた
りで」

(……間違っではないか……実際は住んでないし。けど、アイツ俺のこと話したのか……な
んで?)

「あの、影虎さん？ なんか私、気に障ることを言いましたか？」

「……いや、別に。気にする必要はない。別に、家族と住んでないのは俺にとっては普通のことだからな。それよりも、今日はアイツと何か約束があった、んですか？」

「あの、言いにくいんだったら敬語じゃなくて大丈夫ですよ」

「あ……そうか。で、今日は？」

「ああ今日、日鷹とデートだったんですけど……なんか法事があるみたいで。急遽おじやんのところに行くことになったみたいで。それで、私とのデートは流れたので、妬げ買いです」
そう言い真華は寂しく笑いながら、買い物袋を見せる。

影虎は真華の表情にどことなく罪悪感を感じる。

「すまない」

「えっ？　なんで、影虎さんが謝るんですか？」

「あっ！　いや、その、弟の不貞は兄が尻拭いをするものだからな」

影虎は瞳を泳がせながら言う。

それを見た真華はクスクスと笑う。

「うっ、何かおかしかったか？」

「あ、いえ、そうじゃなくて。本当に、日鷹の言うとおりに影虎さんって優しいんだと思って」
そう言い真華は笑みを浮べる。

(どんな風にアイツは俺のことを伝えているんだッ！)

日鷹は影虎をいつも下に見ておりバカにしている。もしくは、影虎のことなんて何も思っていない、このどちらかだと影虎自身考えており、まさか日鷹の口から優しい人物だと伝えられているとは思ひもしなかったのだ。

勿論、嘘の可能性もあるのだが……。

「じゃあーお言葉に甘えて、少し付き合っただけで貰えませんか？」

「勿論」

近くのロッカーに真華の荷物を保管した後、二人は近くの商店街にたどりついた。

「ここです」

その小さな店に二人は入る。瞬間、影虎の耳に爆音が鳴り響き思わず耳をふさぐ。

「ウツ！　ここは？」

「あれ？　ゲームセンター初めてですか？　影虎さん」

「ゲームセンター……ここが」

影虎は当りを見渡す。そこには、多くのゲーム機が所狭しと並んでいる。影虎はゲームセンターがどういふ場所かは知っているが、入るのは勿論ゲーム自体したことが無い。

「あの、他の所に行きますか？」

「いや大丈夫だ。それで、どのゲームをするんだ？」

「あ、えっとそれなら、これを！」

そう言い、真華が指を指したのは向ってくるゾンビを打ち抜くシューティングゲームだった。

「実は、私こういうシューティングゲームが好きなんですよ」

真華は恥ずかしそうに言う。勿論、影虎は任務の前に真華のことは調べているので、シューティングゲームやアクションゲームが好きなのもそれを恥ずかしいと感じ、親しい人には特に隠していることも知っている。

(俺には、バレても問題ないってことか)

影虎は少し寂しい気持ちになるが、それが何故かは分からない。

「影虎さんもしましょう!」

入口で立ち尽くす影虎に真華が手を振って呼ぶ。

お金を入れた真華は、備え付けの銃を持つ。

「あれ? 影虎さんはしないんですか?」

「あ、いや……やったことが無くて」

「あ、そうだったんですね。だったら、そう言って下さい」

そう言い、真華は影虎の後に回ると影虎の手にそうように手を握る。当然、影虎は背中に感じる真華の胸と小さな手の感触に顔を赤くする。

「まず、銃はこうやって握って来るゾンビを狙って撃ち抜くんです」

そう言い、真華は影虎の指を通してタイミングトリガーを引く。弾があたったゾンビは倒れ画面上に数字が現われる。

「おぉー」

影虎は初めてのシューティングゲームの敵を打ち抜く爽快感につい声を漏らしてしまう。その反応が面白いのか、真華はクスクスと笑う。

数分後。影虎はあっという間に上達していく。

「すごい短い時間でここまで上達するなんて。じゃあ、そろそろ対戦しませんか?」

「もちろんだ」

二人は小銭を入れ一斉に銃を抜くと、次々と近づいてくるゾンビを撃ち殺しスコアが伸ばしていく。

二人は一度も攻撃を受けることも無く次々とステージをクリアしていく。その神業じみた所行に次々とギアラー達が集まってくる。

「やりますね、影虎さん。正直、私とここまで渡り合えるなんて想像もしていませんでしたよ」

「それはこっちのセリフだ! まさか、俺と真っ向からぶつかってここまでヒリヒリするのは真華が初めてだ!」

しかし、この熾烈な戦いは唐突に終わりを迎える。

勝負を分けたのは、このゲームを熟知度だった。

影虎は眼前に現われるゾンビボスの耐久地に苦戦を強いられる。

(ちっ、このボス強い! 何か無いのか?)

影虎はこのままではじり貧だと感じ周りを見渡す。そして画面端にbomb^{ボム}と書かれた木の箱を見付ける。

影虎は一かバチか、それを打ち抜く。直後、影虎の予想通り爆破が起き影虎のアバターもダメージを受けたが、敵のゾンビも倒れる。

影虎は内心でガッツポーズをする。その時だった、倒したはずのゾンビの中から新たなゾンビが現われる。

影虎は、驚いたのも束の間影虎のアバターはなすすべなく倒される。画面にはおどろおどろしい赤文字でゲームオーバーと表示される。

呆然とする影虎の横でゲームクリアの音が鳴り響いた。

「ドンマイです。あの爆弾は、初心者殺しのギミックなんですよ」

「くっそ。まさか死んだ矢先に変形するなんて」

「ゲームのボスに二段階目は常識ですよ、影虎さん。まあ、元気だして下さい。次は勝てます。それより、他のゲームもしませんか？」

そう言い真華は他のゲームを指さす。影虎は自然と笑みを零しながら答える。

「勿論」

それからは、夕暮れになるまでゲームセンターで遊んだ。カーレースゲームはハジメのドライブテクニクを見ていたこともあり超人的な運転技術を影虎が見せた。

ダンスゲームや他の音ゲーは、基本的に音楽を聞かない影虎はリズムを全く取れず真華が圧勝する。

他にも、クレーンゲームで一喜一憂したり、始めてのブリクラでドキドキしたり。影虎の顔に終始笑顔が絶えない。恐らく、影虎の人生の中で最も歳相応な時間であっただろう。

「んー！ 久し振りに、楽しかった！」

黄昏時、真華は伸びをしながらそう言う。

「いつもは、楽しくないのか？」

「えっ？ あ、いえ、いつも楽しいですよ。大好きな人がいて、友達がいて、そうそう、最近仲良くなった人もいるんですよ……だけどたまに……凄く、不安っていうんでしょうか？ そういうのに、駆られるんです。こんなに幸せで良いのかな、とか。今の私は、本当の私じゃないんじゃないか、とか。そんなことありませんか？」

真華のある種贅沢な悩みを聞き、影虎の心は急速に冷めていく。

「……思わないな。まあ、俺には大好きな奴も、仲のいい奴もいないからな」

産まれた時から両親に捨てられ、物心ついた頃には、血を浴び、泥をすすって生きてきた影虎には目の前の動く存在全てが敵に見える。そんな影虎のなかでは、自分にとって危険度の低い人間はいても、仲の良い人間というのは存在しないのである。

もし仮に、明日ハジメや香奈が影虎を襲ったとしても、影虎は何の疑問も持たず首を跳ねるだろう。

そんな影虎の孤独を感じたのか、真華は言葉を投げる。

「仲がいい人がいないって日鷹とは、仲が良くないんですか？」

「良くないよ。俺のことをアイツから、どう聞いてるかは知らないが全部嘘だぜ。アイツは出来損ないの俺のことをなんとも思ってた……俺は、自分よりも優秀で、何もかも持っているアイツが大嫌いで、それで……酷く……妬ましく思ってるんだから」

「じゃあー。どうして、影虎さんはそんな悲しそうな顔をしてるんですか？」

「えっ？ 悲しい顔？」

「影虎さん。本当は、日鷹のことが好き何じゃないですか？」

「はっ……はぁー！！！」

「だって、さっきだって日鷹を貶すとき悲しい顔をしてたし。日鷹が優しい人だって伝えたときは、凄く嬉しそうな顔をしてましたよ」

真華の言葉を聞き、影虎は頭をハンマーで殴られたような衝撃を受ける。

「そ、そんなこと……」

「それに、日鷹も影虎さんの話しをする時は、凄く誇らしそうに語ってましたよ。僕の兄さんは、凄い努力家だって。周りの大人は、それを分かってくないって。フフフフ、いつもはクールで紳士的なのに影虎さんの話題になると、子供みたいな顔して。ねえ、影虎さん。今度、日鷹と会って話してみたらどうですか？きつと、お互い勘違いしてるだけです」

「勘違い」

思えば、影虎は日鷹の優秀さを人づてに聞くことはあったが、日鷹と顔を合せてじっくりと会話をすることはあまりなかったし、ましてや日鷹から一方的に何か言われたことも無い。

ただ影虎が一方的に日鷹に敵意を懐き嫉妬の炎を燃やしていただけなのだ。だがその感情が一時とはいえ真華の言葉で消える。それにより空白になった心で影虎は日鷹のことをそつと考える。そして湧き出た感情は苦く、切ない、後悔という感情だった。

（ああ、そうか。全部勘違いだったのか。俺がただ、思いこんでただけで……日鷹が俺に懐いていた感情も、俺が日鷹に懐いて感情も……全部……。どうして、もっと早く気づかなかったのかなー）

影虎は自分の視界が明るくなったような気がした。

「出来るかな……今までまともに話したことも無いのに」

「出来ますよ。私だって、最近出会ったばかりの男子と仲良くなれたんですから」

「そうか……そういえば、その男子生徒ってどんな奴なんだ？」

「ああ、高山浩介っていうんでうすか」

「えっ？」

影虎は真華の言葉に耳を疑ったときだった。

その時だった。影虎の体に強烈な殺意の波動が突き刺さる。影虎の思考は一瞬にして切り替わる。

(なんだ、この強烈な殺意！……どこから……ッ！……そっちか！)

影虎は真華の手を引き自分のほうに引き寄せる。直後、無数のクナイがどこからとも無く現われては、真華が先ほどいたところに突き刺さる。

「影虎さん？ あれ？ これってどういう状況？」

真華が混乱している間、地面に突き刺されたクナイはひとりでに動き出し真華に向って跳んでくる。影虎は、真華を抱えると、走り出す。

後を見ればクナイは真華を凄まじいスピードで追いかける。そして、それを見て真華は更に混乱の絶叫を上げる。

影虎は小さく舌打ちをする。そして、

「ごめん」

一言そう謝ると影虎は真華の腹を殴り意識を刈り取る。これ以上、真華に命の危機を実感させるのは得策では無いと考えたのだ。

影虎は、一般人の人目を気にすることなく人外離れた速さで走り抜ける。

勿論、黄昏時ということもあり通行人もいる。騒ぎになることはなかった。なぜなら、騒ぎになる前に影虎を追いかけるクナイが、通行の体を貫通し命を刈り取りながら進んでいくからだ。

(人混みに逃げると。大惨事だな。ここはッ！)

影虎は近くの塀に足をかけ、屋根に登る。そこから、屋根から屋根に飛び乗りながら逃げる。懐から煙玉を取り出し破裂させる。しかし、クナイはそんなことは意にかいさず向ってくる。

(遠くで操っているというよりは、自動追跡って感じか。遠くで操ってたら煙幕張ったのにここまで簡単に突破できないもんな)

影虎は屋根の上を移動しながら、携帯端末を操作する。

『ハイハイ、こちらリーダー。どうしたの、トラ君。きみから連絡なんて？ 何か買ってきて欲しいものもあるのかい？』

「違います。どちらかというと、助けて欲しいんです！」

影虎の予想外な言葉に携帯端末から感じるハジメの雰囲気が変わる。影虎は今までの経緯を手短に話す。

『なるほどね。分かった。今、送ったポイントに向って。そこまで来れば助けてあげられる。それまでは、必死に逃げて』

そこで通信が途切れる。影虎は、携帯端末に送られた場所を確認する。

「くっそ、逆方向！」

影虎はクルリと方向転換をすると、自らクナイに向って走る。影虎はクナイの起動を読み取りギリギリで回避する。しかし、真華を庇いながらだったため数本捌ききれず傷を負う。

それから数分後。影虎は目的の場所にたどり突いた。そこは、くしくも昨夜影虎が例の刺客を倒した河川敷だった。恐らく、他の忍者がここら一带を封鎖したのだろう。一般人は見

当たらない。

影虎はその場に倒れる。

影虎の体は、血だらけだった。腕や足、頬にはいくつもの切り傷や刺し傷がある。しかも昨夜刺された傷も開き満身創痍といった感じた。

それと相反するように担いでいた真華には返り血一つ突いていない。

「あとは、頼みましたよ、ハジメさん」

影虎は地面に倒れながらポツリとつぶやく。通れた影虎に向っていつせいにクナイが向ってくる。

その時だった微かな破裂音が影虎の鼓膜を震わす。直後、影虎を襲っていたクナイが破壊される。

影虎はその現象を見ると、ニヤリと笑い意識を失う。

◇◇◇

影虎が倒れている地点から数百メートル離れた河川敷にかけられた橋。その橋の一角にライフルを構えるハジメの姿があった。

影虎は次々とトリガーを引き、クナイを破壊していく。

「こんなもんなかな。さて、影虎君達を回収しないと」

その時だったハジメの手の甲に青白い紋章が現われる。ハジメは、経験則からすぐさまイフルを構え直す。

直後、影虎のそばに破壊されたクナイその破片達が宙に浮き、いつせいにハジメに襲いかかる。

「嘘でしょ！」

ハジメはいくつか打ち落とすが、全て打ち落とすのは無理と判断し乗ってきた車の後ろに隠れる。向ってきたクナイの残骸は車に突き刺さり一瞬動きを止める。しかし、すぐさま車から離れると一塊になり襲いかかる。

「あーもう！ しつこい！」

ハジメは、懐から手榴弾を取り出すとピンを抜き飛んでくるクナイの残骸に向って投げる。手榴弾はすぐに爆破し、クナイの残骸はさらに細かな刃となり地面に落ちる。

しかし、ハジメはこれで一件落着ではないことを悟る。その証拠にハジメの手の甲にあらわれた紋章は消えていない。

(恐らく、この紋章があるから僕は狙われている。なら)

ハジメは自分の手の甲をクナイで突き刺す。しかし、地面に落ちた刃はまたひとりでに浮き上がりハジメを取り囲む。そして回転しながらハジメの体を切り裂いていく。

幸い刃自体は細かい為一度や二度切り裂かれた程度ではハジメが命を落すことはない。

しかし、細かい刃は避けるのが難しく当りどころが悪ければ失血死もあり得る。決して、樂觀できる状態ではない。

影虎は刃の嵐に身を裂かれながら打開策が無いかを当りを見渡す。そして気づく。真華の服の背面にもハジメと同じ紋章が浮き上がっていることを。

ハジメは、体を切り裂かれながらも片手でライフル銃を持つと何のためらいも無く引き金を引く。

弾丸は、一直線に進み真華の服だけを切り裂いた。

直後ハジメを切り裂いていた刃の嵐は一斉に地面に墜ちる。

「ふうー、なんとかなった」

ハジメはその場で安堵の息を吐いたその時だった、すぐさま銃を自分の背面に向けて放つ。

直後、空間がグニヤリと歪み今までいなかった橋に一人の人間が現われる。突然、現われたソレは全身をフード付きの外套で多っている。

「ホーホッホッホッ。まさか、わしの〈隠れ装束〉を見破るとはな。殺気もなにも無かったはずじゃが？ お主は何か風通の人が持っていない感覚でも持っておるのかの？」

いきなり現われたソレは、嘎れた老人の声と少年の声を同時に発したような異質な声でハジメに話し掛ける。

ハジメは目の前のソレがただ者では無いと理解しつつわざと明るく話かける。

「まさか。僕にトラ君のような人並み外れた殺気を読む力は無いよ。ただのカンさ。例えば僕だったら、ここで後から一息ついている敵をぶっさすかもつていう、ただも悪ガキのカンさ。さて、単刀直入聞く。君は仙人かい？」

「はて？ 何の事やら？ 気になるなら、この外套を向いて調べれば良い。まあ、僕はここでおいとまさせてもらかの。今回の目的は観察じゃし」

そう言いつた瞬間、ソレの周りに木の葉が舞い消えていった。

その鮮やかな逃げ足にハジメは核心する。彼こそが仙人だと。

九話

「凄いでジャブだ」

「そりゃ君、朝と同じ状況だからね。いや、傷が増えたぶん前よりも酷いかもね」

影虎は視線を横にすると、そこにはハジメが椅子の背もたれにもたれかかっていた。因みに、その後では静かに怒りの炎を燃やす香奈がいる。

影虎はそれに気づき視線をずらす。

「で、どうだったトラ君。初めてのデートは？」

「っうー！」

ハジメはそんな影虎の心境を知ってあえて、火に油を注ぐような発言をする。

「な、なんのことですか？」

「いや、今更とぼけてもしかたないでしょ。君、僕に助けを求めたとき全部吐いてるんだから」

「そうでした」

「で、楽しかった？」

「……楽しかったです。その……初めてゲーセンにも言って……」

影虎は照れ臭そうに頬をかきながら言う。その答えに満足したのか、ハジメは小さく笑う。

「そう。なら、いいや。お咎め無し！ 良いよね、香奈ちゃん」

「リーダーがそう言うなら良いよ。私は」

香奈は唇を尖らせていう。

「えっ、お咎めって俺何かされる予定だったんですか？」

「そりゃトラ君。君下手したら、日鷹君がトラ君だってバレる可能性があったんだよ」

「あっ……すいません」

それを聞き、香奈はハアと呆れの溜息を吐く。

「まあ、影虎君は暫くの体を癒やすことに集中してくれよ。学校も休むように」

「あっ、良いんですか？ 任務の方は」

「一時中断。それに普通に考えて、その包帯グルグルで学校に行く方が怪しまれるでしょ。

それに今回のことを受けて本格的に仙人を討伐する作戦が雑賀と甲賀で行われる。僕と香奈ちゃんもそっちの作戦にかり出されるからね。どっちにしろ、暫くはこっちの任務は停止だよ」

「あの、それだった……」

ハジメの話しを聞き、影虎は今回のデートで自分が気づいたことを話す。

それを聞きハジメは驚愕の表情を浮べると、悔しそうに額に拳を当てる。

「なるほどね。確かに、それは盲点だったね。高坂真華のことは調べていたけど、日鷹君の交友関係はちゃんと洗って無かった。いや、この段階で掴めただけ良いと思うべきかな。となると、作戦を大きく変えないと」

ハジメは上に進言する内容の中で組み立てていると、影虎が意見する。

「あ、あの！ 仙人を捕まえる役……俺にやらせてくれませんか？」

その予想外の影虎の発言にハジメは瞳を細めて笑みを作る。

「驚いたね。まさか、トラ君から任務について進言があるなんて」

今までの影虎は今回の任務を除いて、ただ与えられた任務を与えられた任務を与えられた通りにこなすだけだった。そこに、人間の意思はなくあるのはどこまでも張り詰めた殺意だけだった。

そんな影虎が人間らしい意思に乗っ取り発現するという成長を素直にハジメは喜ぶ。

「良いけど。理由を聞かせてくれないかい？」

「えっとそれは……仙人は俺に変装がバレてないと思うし……だったら、それを逆に逆手にとって」

「ああ違う違う。そういう合理的な理由を僕は求めてない」

ハジメは椅子から立つと、人差し指で影虎の胸を突きニヤリと笑みを見せる。

「僕が知りたいのは、どうしてやりたいか。その理由さ。言っごらん」

ハジメの質問に影虎は一瞬、口を噤む。影虎にとって、任務のことで自分の心情を言葉にして相手に伝えるというのは初めての経験である。

故にどう言葉を紡げば良いか分からない。暫く考えた後、影虎はゆっくりと言葉をならべる。

「俺、今日……真華と帰り道に話したんです。それで……俺は……もしかしたら日鷹のことがそこまで好きなんじゃ無いかって言われて……もしかしたらそうかもって、自分の勘違いなんじゃないのかって思っ……そしたら、今まで学校のクラスメイト達を俺が恐れていたのも……全部勘違いなのかもって思っ……」

影虎は自分の心に溢れる感情を言葉にしようと必死に頭を回す。しかし、ついに脳が容量を超え影虎は自分の激情をそのままに言葉に乗せる。

「あー、もう何とかいうか、とにかく俺は真華に凄く恩みたいなきことを感じるし！他の学校の奴らも大事だと思っ……だから！俺がそう思っ……奴らに危害を加える存在を絶対に許さない！」

勿論、本来ならこんな私情にまみれた理由で作戦を変えることなんて無い。しかし、ハジメは影虎の包み隠さない本心に納得にしたのか、ニヤリと笑う。

「いいねえー。やっと少しは人間らしくなれたんだね」

「はい？」

「こっちの話しさ。じゃ、早速本部に戻ろうかな？ 作戦の変更を進言しないと」

そう言いハジメはニヤニヤと笑みを浮かべながら、アジトを後にした。

「影虎、今度外に出たら許さないからね」

そう言い香奈はハジメの後をついていく。



ハジメがエレベーターに乗り込みドアを閉めようとすると、香奈も乗り込む。

「あれ？ 香奈ちゃんは休んで良かったのに」

「まあ、それでも良かったんだけどね……影虎が思い通りに強くなれて嬉しいのは分かるけど、その顔で作戦変更の提案したら絶対通らないよ」

香奈はニマニマと笑みを浮かべているハジメに苦言を呈する。

「おっとそれはいけない」

そう言いハジメは軽く地面の頬を叩く。

「ねえ、リーダー。今回の任務受ける必要あった？」

「おや、どうしたんだいきなり？」

「いや、結果論なのは分かるんだけどさ。今回の任務、最初の想定よりも難易度は拡大に上がったじゃん。危険なことも沢山あった。影虎も大けがをした。それで得た物が、影虎が自

立心に目覚めただけ。なんか、釣り合いが取れて無いと思って」

香奈はエレベーターの壁に背中を預けて愚痴を言う。

「まあ、確かに目に見える変化はそれだけかもね。だけど、目に見えないところでトラ君は大きく変わったよ」

「例えば？」

「トラ君のアイデンティティーの変化とかね。ほらトラ君さっき、自分は日鷹君のことが好きかも知れないって言ってたじゃん。今まで、自分は日鷹君のことが憎くて嫌い、それ意外の答えは全く受け付けなかったのに」

事実、ハジメは影虎が日鷹の死を知った日。目の前で「本当はそこまで日鷹君のこと憎んでいないんじゃない？」と言ったところ凄まじい拳が飛んできた。

香奈も似たような事例を知っているし、影虎の日鷹嫌いが筋金いりなのも知っている。

「確かにそうだけど。けど、それがアイデンティティーの変化になるの？」

「なるさ。なんたつたてトラ君にとって日鷹君を憎む行為そのものがアイデンティティーだったんだから」

「そう……なの」

「多分ね。影虎君にとって他者との関係性は敵だけだ。そう認識が狂うほどの来る日も来る日も行われる殺戮の日々。そんな環境で己の価値を見いだすことは出来ない。なんたつて殺されるってことは、他者に己の存在を全否定されることだからね。」

そんな中、自分と同じ血を引いているにも関わらず自分とは正反対の日鷹という存在を知る。たぶん最初はちよつとした妬みの感情だったんだよ。だけど、周りが日鷹君に対して尊敬の感情を懐くことを認識したことで、トラ君は気づく。皆が敬う存在に対して自分は違う感情を懐いている。この感情を強くすれば、自分は他とは違う存在になれる。無価値ではなくなるんじゃないのか、とね」

「そしてちよつとの妬みをあそこまでの憎悪に変えた……」

そこまで聞き香奈は初めて理解する。石川影虎という少年がどれだけ壊れていたのか。健全では無かったのか。

「だから、この任務を影虎に受けさせた。強制的に敵以外の新たな人間関係を構築せざるを得ないこの任務をうけることで、自分が否定され続けるだけの人間じゃないことを教えるために」

「そつ。僕は知ってもらいたかったのさ。トラ君には。この世は敵だけじゃなくて友達やクラスメート、教師と生徒、そして恋人。多種多様な人間関係があること。そして、憎んでもいない日鷹君を憎むことだけがトラ君の価値ではないことをね。まあ、こんなに早く成長をとげるとは思わなかったけれどね。やっぱり愛かね」

「そうなんじゃない？ 実際、人間って誰かに愛されるだけで自分は生きてて良いってホツとするからね」

「おや？ 経験ありかい？」

「さあね」

そこでエレベーターの開閉と共に音扉が開く。

「ま、なんでいいや。サクッと頭の堅いお偉いさんを説き伏せようか」

「そうだね、リーダー」

そう言い二人は再度作戦本部に舞い戻るのだった。

十話 仙人

影虎が真華とデートをした日から二日間。影虎は学校を休み傷の回復に専念した。そして三日目。影虎は久しぶりに学校に訪れる。

「おはよう。日鷹」

「ああ、おはよう。真華」

自分に殺意以外の感情を向ける真華やクラスメートにもう影虎は戸惑ったりしない。

「おはよう」

できるだけ力を抜き挨拶を交わす。

その変化にいち早く気づいたのは、やはり真華だった。

「なんか？ 変わったね、日鷹」

「何が？」

「いや、なんか最近の日鷹ちょっと挙動不審だったというか」

「そ、そうか？ ハハハ」

(危ねー。もしかして、俺が日鷹じゃないってバレるのって時間の問題だったんじゃない……)

影虎は内心冷や汗をかく。

そこからは特に問題が起きることはなく平穏な学校生活が繰り広げられていた。

そしてあつと言うも間に放課後。

「日鷹、帰ろう」

帰りのホームルームも終わり、真華は影虎に声をかける。影虎は一緒に帰りたいと衝動にかられるがそれをグツとこらえる。

「ご、ごめん。今回は、少し用事があるんだ。先に帰ってくれ」

「えっ……あ、うん分かった」

真華は一瞬驚くがすぐに納得し友達と教室に戻る。

影虎は教室を出ると生徒が校門に向かって歩くのに対して、影虎反対方向に歩く。ポケットにしまっていた通信機を耳にはめる。

「学校が終わりました」

『お疲れ様、トラ君。こっちも諸々の準備は終わっていたよ』

通信機から発せられるのはハジメの声だった。

「知ってます。順調みたいですね」

これから行われるのは忍者界限を騒がし続けていた仙人の捕獲作戦である。その準備の

ためにこの学校には多くの忍者が生徒、もしくは教師として侵入していた。

「後は俺が仙人の化けの皮を剥がすだけ」

『あまり根を詰めすぎないようにね。もし、失敗しても僕がフォローしてあげる』

「お願いします」

そこで通信が切れた。影虎は大きく息を吸いゆっくりと吐く。自らの緊張を和らげる。そして影虎が訪れたのは校舎裏だった。

校舎裏にしては日当たりが良く手入された木々が程よく植えられているため、生徒達の中では隠れた憩いのスポットになっている。

そんな場所に一人の男子生徒が立っていた。その男子生徒は、影虎を見るなり声をかける。

「あ、日鷹！　なんだよ、俺をこんなところに呼び出して。もしかして愛の告白か？」

「そんなわけ無いだろう。高山」

影虎は、日鷹の親友である高山に軽口を返す。

「ちえー、で。なんで俺をここに呼んだんだ？」

「なあ、正直に答えてくれ。大前は、仙人なのか？」

影虎の言葉に一瞬時が止まったような感覚に襲われる。

「仙人？　なんのことだ？　何かゲームのハンドルネームみたいなものか？」

高山は知らないといわんばかりにペラペラと言葉を並べる。影虎の心はその言葉を聞く度に鈍い痛みが走る。

「高山。俺はお前のことを調べた。そして、分かった。高山浩介という男子生徒はそもそも存在していない。お前は、転校生だ。日鷹が十日間学校を休んだ間に来たな。だから、本来ならお前と日鷹に面識はない。なのに、お前はこう言ったんだ。初対面の俺に。親友ってな」

「……」

高山は口を紡ぎ、顔を下げる。影虎はそんな高山を糾弾する。

「お前は分かっていたんだ。俺が日鷹じゃないことも。俺が完璧に日鷹の交友関係を把握していないことも」

影虎の推理を聞き、しかしそれでも高山は醜いのがれをする。

「ちよっと待ってくれ。良く分かんねーけどよ。仮に俺が仙人？　だったとして、お前が、日鷹じゃないって俺はどうやって知るんだよ」

高山の指摘は的を射ていた。日鷹の死亡というのは、雑賀衆によって全力で隠されていた。それこそ急遽、影虎という影武者を建てるほどに必死に。ゆえに日鷹の死を知っているのは、雑賀衆の人間ともう一人……

「いや、お前は知っていないとおかしい。なぜなら、お前は日鷹を殺した張本人だからだ」
そこまで聞き高山の表情は一変する。困惑の表情から、狂気的な笑みに

「あーあ。バレてしまったか。もう少し、騙せると思ったんじゃないのー」
その言葉と共に、高山の体がゴコゴコと変形する。

影虎がわざわざ高山の前で正体を見破ったとアピールするには理由がある。仙人が他

の忍者組織から奪った妖具の中には自らの姿形を細胞レベルで変えられる妖具（へのっぺらぼうの鏡）というものがある。その妖具を使われたままでは、いくら尋問しようと確たる証拠は手に入らない。別人だと言い逃れをさせられる可能性がある。

ゆえに影虎達は（へのっぺらぼうの鏡）の効力を無効にする必要があった。そして、その無効にする条件は、（へのっぺらぼうの鏡）の所有者の正体を見破ること。

影虎は臨戦態勢に入ると共に近くに隠れているハジメ達、仙人を捕獲する忍者に合図を送る。

その瞬間近くの木々や、壁、地面から鮮血が吹き出る。

「えっ？」

影虎はその異常な光景に瞳を丸くし驚く。その時、影虎の肌が無数の殺気を察知し、その場を跳ぶ。直後、無数のクナイが影虎のいた場所に突き刺さる。

四方から無数の忍者が現われ高山を守るように取り囲む。その忍者は今回の仙人捕獲作戦と一緒に仲間忍者だった。

「クツクツ。やはり、今の忍者はまがい物。こうも、他人を信じるととわなあ」

高山の姿が老人のような姿が小さな老人の姿に変わる。白く長い髭に、髪の毛一本も生えていない頭皮。その身は袈裟に包まれている。

「お前、何をしやがった！」

「ふむ。まあ、儂の正体を見破ったのじゃ。褒美として教えてやろう」

そう言い高山、もとい仙人は懐から短刀を取り出す。本来、鴈の部分には獣の毛でグルグル巻きにされており刃は赤黒い。影虎は、その短刀を見た瞬間、鳥肌を立たせる。

「なんだ……それは」

「ほお、これを見ただけで危険度が分かるとはお主、存外優秀なんじゃな。これは、（禁死の刀）と呼ぶ。これで命を奪われた者は刀の所有者の命令に服従する動く屍となる。これが、かなり便利のお。生者なら死ぬ改造をしても動く。こんな風にな」

その瞬間、仙人を守っていた忍者が印を結び、自らの指から糸を出す。本来なら、伊賀の忍者しか使えない（忍法・操糸）である。

影虎は糸をギリギリで躲す。

（改造で他の流派の忍法を使えるようにする。外道が！でも、これで合点がいった）

影虎が思い出したのは、デート前の夜に戦った仮面と外套を付けた者たちのことである。彼らも（忍法・操糸）と風魔の連携術を使っているがその正体はただの一般人だった。そして、そんな彼らの動きを止める方法は

（手榴弾！）

影虎は制服の裏に隠していた手榴弾を取り出すとそれを投げる。しかし、屍の忍者と仙人は爆破する前に爆風と炎が届かないところまで避ける。

影虎は舌打ちをすると屍の忍者達が接近戦を仕掛ける。影虎は絶妙な連携を行う屍の忍者の攻撃に防戦一方となる。

その様子を仙人はケタケタと笑みを浮べる。そして、もっと自分好みの状況にする為に影虎に話し掛ける。

「なかなかやるのオー日鷹もどき。だが、護衛がこんなところ油を売っていいのか？」

影虎は、屍の忍者の蹴りを受け止めながら仙人の言葉の意味を読み解き焦る。

「まさか！」

影虎の脳裏に浮かぶのは血だまりに浮かぶ真華の姿。

「クソが！」

影虎は受け止めていた蹴り足を掴むと自分に近づいてくる屍の忍者に向かって投げる。そして、耳にはめている通信機に言葉を投げる。

「ハジメさん！」

『その焦りよう。君の方も何かあったみたいだね』

「ええ、俺と一緒に仙人を捕獲するはずだった忍者の半分は死亡。半分は仙人の仲間になっていました」

『あ、そっちも。実はこっちもなんだよね。半分の忍者が反旗を翻してきた』

影虎の耳にはハジメの声と共に微かに戦闘音が聞える。ハジメの方もかなり不味い状況なのは想像に難くない。

本来はここで助けを願うのは悪手だということは理解している。しかし、それでも影虎は真華を助けたいという衝動にかられる。

「それですいませんけど、こっち人を回させませんか？　もしかしたら、真華が危険かもしれない」

『……オーケー分かった。一分持たせて。すぐ、向うから』

そこで、通信が切れる。と同時に、影虎に敵のクナイが刺さる。影虎はそのクナイを引き抜くと近づいてくる屍の忍者の額に突き刺す。

「永遠に動くな！」

そのままその屍の忍者を真っ二つに切り裂く。しかし、切り裂かれた忍者は意にも介さず、影虎の首に手を伸ばす。影虎は伸びた腕を掴むと、そのまま内側にへし折る。

(くっそ……キリが無い)

もう一度手榴弾を投げても目の前の屍の忍法は簡単に避けてしまい無駄うちになってしまう。それを影虎も理解しているため手榴弾は使わない。しかし、使わないとこの状況は打破できない。まさに、千日手である。しかも、こうしてる間にも真華の身に危険が及んでいるかもしれない。そんな焦りが余計に影虎の判断を鈍らせる。

その時だったどこからとも無く発砲音が響く。そして次の瞬間、屍の忍者の手が宙を飛ぶ。急な状況の変化に、屍の忍者の動きが止まる。それを待ってましたといわんばかりに次々と発砲音が響き、その度に屍の忍者の手足が飛ぶ。自然、屍の忍者は地面に倒れ込むしかない。

「おっ待たせー！！！！」

その言葉と共に上空からライフル銃を構えたハジメが影虎の前に着地する。

「ハジメさん！」

「はいはい、嬉しいのは分かるけど早く高坂真華のところに行っておいで」

「お願いします。屍の忍者は手榴弾で対処できます」

影虎はそう言い残し、その場を後にする。

「さて、また会ったね」

その言葉と共にハジメは、弾丸を仙人に放った。

十一話

影虎は全速力で真華のところに向う。

(もう家に帰っているならいいけど……もし、息抜きだとか考えていたら)

影虎の脳裏に一つの場所が思い浮かぶのはデートでいったゲームセンターだった。

道路から塀に。塀から、屋根に飛び乗り最短距離で駅前のゲームセンターに向う。その時だった、影虎の足に何かが引っかかる。影虎は即座に自分が何かのトラップを作動させたと察する。

瞬間、影虎背後から数人の殺気を感じ横に飛ぶ。瞬間、影虎いた場所に三人の忍者が現われる。

一人は片腕が無く、一人は頭が無く、一人は上半身が無い。言わずもがな、屍になった忍者である。

影虎は、即座に手榴弾を投げる。爆破する寸前、上半身が無い屍の忍者が上空に高く蹴り上げる。

その隙に影虎はその場から逃走する。

(追っては三人。相手をしている余裕はない。仲間を呼んで……いや駄目だな。恐らく、コイツらは捕獲作戦の忍者と戦闘をしていて、俺がトラップを踏んでからすっ飛んできた……という事は他の忍者達は三体の屍の忍者を取り逃がすほど疲弊している可能性が高い……逃げ切れるか……)

影虎は、走りながら思考を巡らす。このままでは、恐らく自分がやられる可能性が高い。ゆえに影虎は、自分を追ってくる屍の忍者。その中でも頭の無い忍者に特攻を仕掛ける。

屍の忍者はその予想外の攻撃に一瞬防御が遅れる。それにより、影虎に片腕を切り落とされる。

影虎は目的が達成し即座にまたゲームセンターに向う。

(これで全員、印を結べない。俺を止めるには接近戦しか無いが……そもそも俺には追いつけない！)

忍者が忍法を使うには、決められた通りに指を絡める印を結ばなければいけない。そして、忍法を使われれば影虎に勝機は無かっただろう。

影虎自身もそれを理解しているがゆえに、敵の腕を切り落とすことで忍法を使えないようにしたのだ。

数分後。影虎の視界にゲームセンターの屋根が見える。建物の屋根から地面に着地すると、ゲームセンターの窓を突き破り店の中に入る。

「えっ！ 日鷹！」

扉をつくやぶる姿を見た真華は驚いたように瞳を丸くする。

影虎はその声を聞き即座に真華の元までくるとその腕を掴み強引に引っばる。

「真華！ 良かった。はあはあここは危険だ！」

「えっ？ どういうこと？」

真華は当然混乱の表情を浮べる。

「今は、説明している暇はない！」

「え、いや……でも」

「危ない！」

影虎は殺気を感じ真華を押し倒す。直後、ゲームセンターに悲鳴が響く。それとほぼ同じ瞬間に破壊音が発せられる。影虎を追ってきた、屍の忍者がクナイや手裏剣で攻撃を仕掛けてきたのだろう。

「えっ？ どういうこと？」

真華はあまりの非現実的でそれでいて恐ろしい現実にも泣き出しそうだった。影虎は、その表情を見て怒りがほとばしる。

しかし、今はそれをグツとこらえ真華の体を担ぎ上げる。

「日鷹？」

「目は瞑ってた方が良い」

影虎は力強く地面を蹴り上がるとゲームの競台を足場に天井スレスレまで跳ぶ。そして、懐から手榴弾を取り出し、頭のない屍忍者を押し倒し、その力で体に手榴弾を埋め込む。影虎は再度、地面を蹴りあげ店を脱出。直後、三体の屍の忍者は爆散する。

「爆、はつした。ね、ねえ、日鷹、アレどういうこと！」

真華は涙を流しながら説明を求めるが影虎はその足を止めることはしない。未だにここ安全では無い事を肌で感じているからだ。そのため、影虎が返した答えは一つだった。

「舌噛むから、口閉じて」

影虎はそう言い、空高く跳躍した。



「はあはあはあ」

ここは、ゲームセンターから数キロ離れたビルの屋上。流石の影虎も真華を担いだまま数キロ建物の屋根という屋根を飛び移りながらの移動は体力的に辛く、天井に腰を下ろしている。

そして真華は影虎の近くで座り込み震えている。

「どうということ……あれはなんなの……」

一般人の真華にとってはこれまでの数十分はまさに恐怖の連続だったのだろう。

「し、真華、大丈夫か？」

「来ないで！」

影虎が真華に手を伸ばした瞬間、真華から拒絶の言葉を言われ動けなくなる。真華の瞳に宿るのは影虎にたいする恐れと拒絶。

影虎の人生の中で誰かを慰める経験など無い。必然、影虎の頭はパニックになる。

「ねえ、アナタは何者なの?! 日鷹じゃないよね! どうして、私はこんな目に遭わせるの! ねえ!」

真華は影虎に自分の激情をぶつけるように、影虎に質問する。しかし勿論、影虎にそれらの質問に答えることは出来ない。ただ影虎に許された言葉は一つだった。

「ごめん」

その答えが、さらに真華の心に火をつける。

「アナタは、悪魔よ! 今すぐ、私の前から消えて!」

「それは」

それは出来ない、そう影虎が言うよりも早く、どこからともなく声が響く。

「駄目だよ。真華。そんなことを言ったら。兄さんは兄さんなりに頑張ってるんだから」

自然、影虎は真華を守るようにクナイを構える。屋上とビルの中を繋ぐ扉がゆっくりと開かれる。

「なんで」

「お前がいるんだ」

影虎と真華は、扉から出てきた人物を見て衝撃を受ける。なぜなら、現われたのは

「日鷹」

死んだはずの石川日鷹だったからである。

「やあ、兄さん。それに、真華も久し振り」

日鷹は、柔らかい笑みを作りながら影虎と真華に声をかける。

日鷹の死を知っている影虎は混乱で体が動けなくなる。しかし、日鷹が死んでいることを知らない真華は直感的に目の前の日鷹こそが本物の日鷹だと悟ったのだろう。何の警戒もなしに目の前の日鷹に抱きつく。

「日鷹! 日鷹日鷹日鷹日鷹日鷹!」

「いきなり危ないよ。真華」

お互い笑みを浮べる真華と日鷹。その姿はまさに幸せの絶頂といったようだった。そんな二人に影虎の言葉が響く訳がない。

「真華そいつから離れろ! そいつから離れろ! そいつは偽物だ!」

「何言ってるの! 偽者はアナタでしょ! アナタこそ! 早く私の前から消えてよ!」

影虎は真華の拒絶の言葉を聞き、今にも消えて無くなりたいたいと、今すぐここから飛び降り

てしまいたいという衝動に駆られる。

しかし、真華を守るといふ忍者としての使命がギリギリそれを食止める。

激情をぶつける真華に日鷹は優しく諭す。

「だから、駄目だって、そんなことを言ったら。ここ数十日真華が平穩に生きてこられたのは影虎兄さんのおかげなんだから」

日鷹の言葉に真華は驚く。

「えっ？ 影虎……さん？ どういうこと？」

影虎は直感的に、このまま日鷹を好き勝手話すべきではないと思った影虎は地面を強く蹴り上げ全身しようとする。しかし

「なっ！」

影虎の右腕はもの凄いい力で押さえつけられ動けなくなる。

「どうということって、そのままの意味だよ、真華。君がここ数十日、今まで僕だと思っていた存在は僕の姿をした兄さんだったんだよ」

「なんで……なんで、そんなことを？」

「それは君のためさ。真華のせいで死んだ僕の代わりに兄さんが僕の代わりをすることになった」

日鷹の言葉に更に真華は混乱する。しかし、真華は信じられない言葉を聞き思わず聞き返してしまう。

「私のせいで……って、だって、日鷹は……生きて……」

「生きてる……ねえ。これを見ても生きてるって言えるかい？」

そう言い日鷹は服のボタンを外し自分の体を見せる。日鷹の体は首から下は骨のみであり、腹に筋肉も、内臓も皮すらない。

その異様な姿に真華は膝をつき胃の中を吐き出す。

そんな、真華の耳元に日鷹は優しく言葉をかける。

「痛かったよ。任務で好きでもない君と付き合ったがばかりに、僕は何物かに拉致され来る日も来る日も拷問の日々。やっと死ねたと思った時にはこんな体で生き返らせられて。真華、君に想像出来るかい？ 臓器を抜かれる痛みがこうしている今も続く僕の気持ちか？ 骨が外気に触れる不快感か？ 異形の姿で、生き返らせられる気落ちか？」

「あ、あぁー」

真華は日鷹の言葉に金切り声を発する。

「真華！ ソイツの声に耳を貸すな！ ソイツはもう人間じゃねー！ お前の知っている日鷹じゃない！」

「五月蠅いよ。兄さん」

そう言い、日鷹が人差し指を横に走らせる。その時、影虎の体は凄まじい力で後ろに引っぱられる。影虎は屋上に備えつけられた手すりにギリギリで捕まるがそれが限界でありとても声を発する暇はない。

で終わりだ」

そう言い、日鷹は懐からクナイを取り出し勢いよく投げる。しかし、そのクナイが影虎に刺さらず、影虎の後方を飛び続ける。直後、影虎の体は自分の後を跳んで言ったクナイに引き寄せられる。

「ふざけんな！」

影虎は全身に力を入れ今いる立ち位置に踏みと止まろうとする。そんな、影虎の目の前に来た日鷹は軽く影虎の額を押す。

それにより、影虎の体は少し後に傾き。直後、凄まじい力で後方に飛ばされた。

四章 決戦

十二話 裏切り者

「出しやがれ！」

影虎は目の前に木製の檻を殴りながら怒気に満ちた声を発する。しかし、目の前の檻は何か忍法がかけられているのだろう。影虎の拳が当たる前に弾かれる。

「くっそ。やっぱ、駄目か」

影虎は壁に背をつけ座る。その拳は血で染まっていた。

影虎は、この牢屋に入れられる前のことを反芻する。自分に何か出来なかったのか……と。



日鷹により戦線を離脱させられた後。影虎は。数十キロ離れた小高い丘で何とか止まるこ
とが出来た。すぐに日鷹の元に戻ろうとしたところで異変が起きる。

関原市の地面が星形に光る。そして、今の真華の姿である巨大な木を中心に市全体が、大きなドーム状の大きな透明な壁に包まれる。

「これは、結界……」

結界とは、世界に存在する微細な霊的エネルギー〈法力〉を祝詞や札、儀式などで集め対象を守る、もしくは閉じ込めるバリアのことである。

影虎も以前、数年前目にしたことがある。影虎がまだ暗部におり、血で血を洗う生活を行っていた時のことだ。雑賀衆を裏切った上忍を始末する依頼の時だった。その上忍を逃がさない為に結界は作られた。

しかし、今日の前に展開されている結界はその時の物の非ではない。

「キチンと作動したようだな」

「親父！」

影虎は振り向く。後にはいつの間にか影虎の実父である五碌がいつも通り気難しい顔で結界に覆われている街を見下ろしている。その後には、何十人もの忍者が引き連れている。

「なんだ、生きていたのか影虎」

五碌は無感情に影虎に言い放つ。影虎はその声に苛立ちの感情を燃やすも、それをグッと我慢する。

「ああ、生きるよ！ それよりも、アレはなんだ！ あの結界は、いったい」

「見ての通り。貴様の任務対象であった高坂真華の中に眠る妖具が覚醒した時に備えてこしらえていた結界だ。三日は持つ。」

「三日ってことは三日過ぎれば、何か手を打つという事か」

「ああ。三日後。甲賀の忍者百人と雑賀衆の忍者百人がここに集結する。そして、ここにいる三十人。計、二百三十人であの街ごと高坂真華を殺す。ついでに、結界の中にいる仙人も殺せる。一石二鳥だ」

五碌は淡々と語るその作戦に影虎は驚愕と怒りの感情を放出する。

「待て！ 街ごとって！ あの街に何人いると思ってやがる！ それに、あの中には日鷹も」

日鷹という言葉に多少、五碌は反応するがそれだけだった。

「あの結界内にいる人間はせいぜい数万だろう。日本が減ぶよりマシだ。まあ、高坂真華の持っている妖具が入手できないは惜しいがやもえん」

五碌の言葉が誰に対して言っている訳ではないことを影虎は悟る。この男はただ、これから起る事実を確認しているだけなのだ。

「影虎、お前も加われ」

「はっ？」

「二度も言わせるな。元々、お前に今回の任務が達成出来るとは思っていない。だから、別に責任を取れとは言わない。ただ、最低限のケジメはつけろ」

五碌の言葉、一つ一つが影虎の神経を逆なでする。自然、影虎は奥歯を強く噛みしめる。

「ふざけるなよ……アンタ……それで、俺がハイそうですかかって言うと思ってるのか？人をバカにするのも大概にしろ！」

影虎は五碌に背を向ける。

「どこに行く？」

「俺が真華を助ける」

「お前じゃ、あの結界の破壊は無理だ」

「やってみないと分からないだろ！ 止めるなら、アンタをぶん殴っても止める」

「そうか、捕まえろ」

五碌の言葉に五碌の後にいた三十人の忍者が一齐に影虎に向う。

数十分後。影虎は二十人を倒したが、さすがに熟練の忍者に多勢に無勢。取り押さえられしてしまう。

「連れて行け」

五碌の言葉により、影虎は忍者達が作った簡易拠点の檻に入れられる

振り返り影虎は結論を出す。

(無理だな。どんな状況だろうときっと俺はした。それに、あの男のことだ。どうせ例の作戦に俺が入ったとしても末端で真華のところには生かせないだろう)

影虎は檻に備えつけられた小窓を見る。空には月が見える。檻に入れられて今日で二日。もう時間が無い。しかし檻にはいぜん傷一つ付けられない。影虎の心に焦りだけが募る。

「やあやあ。元気かい？ トラ君」

影虎が前を見るとそこには、ニヤニヤと相変わらず薄っぺらい笑みを作るハジメがいた。

「ハジメさん」

「やあ、どうだい檻の中の気分は」

「幼少のころよりマシです」

「それは良かった」

「で、なんで来たんですか？ ハジメさん」

正直、今の影虎の心境的にハジメと悠長に話す気にはなれなかった。そんな気持ちを恐らく知ってだろう、ハジメは影虎の前に顔を近づけ回りくどい質問を投げかける。

「その質問に答えるかどうかは君次第だ。ねえ、トラ君。君は今どんな気持ちだい？ 任務は失敗。恩を感じていた高坂真華は妖具の力に飲み込まれた。しかも、死亡したと思っていた日鷹君は敵として生きていた。端的に言って絶望的状况だ。しかも、そんな絶望的状况を君は乗り越えること出来ずに終わらせられる。答えてくれよ。君はどんな気持ちだい」

ハジメは柔やかな笑みを作るがその瞳は値踏みをするように鋭い。

影虎は悟る。ここで発現を誤れば自分はせっかくの機会を失い檻の中で自体が終息するのを待つばかりとなる。

影虎は考える。今までだったら、様々な感情に吞まれ処理出来ず「別に何も思わない」と答えていただろう。

しかし、それでは駄目なのだ。今なら、下校の途中、真華が「そっちにいったら駄目だよ」と声をかけた意味も分かる。自分の感情を理解せず、切り捨て、ただ殺意と悪意と敵意に反応し力を振るう存在を人間とは言わない。

きつと真華は人間じゃなかった影虎をなんとなく察していたのだろう。だから、あの時声をかけ、影虎に人間になるきつかけを与えたのだ。

「真華は助けたい。何があっても絶対に。日鷹はぶん殴る。それで話しをする。なんで、あんなことをしたのかを。それで和解する。それが、俺の望みです」

影虎の答えを聞き、ハジメはとびっきりの笑みうかべる。

「百点満点だ！ おめでどう。君は人間になった！」

「ありがとうございます。で、俺の質問は」

「ああ、決まっているだろう。君を助けるためさ」

ハジメはポケットから鍵を取り出すと檻の入口を開く。

「さあ、行こう！ トラ君！ 君の望みを叶えに！」

檻から逃げ出した影虎とハジメは、忍者に見つからないようにこそそ隠れながら仮拠点を移動する。

移動しながらハジメは現状の忍者達の動向を説明する。

「例の作戦は今夜零時直帰しに始まる」

「零時……あの男。俺に分かりにくく教えたな。で、今何時なんですか？」

「十一時三十分」

「っ！ ちょっと、ヤバイじゃないですか！ もうあと三十分しか！」

「そう焦らないで。ちゃんと考えはある。その為にわざわざ、敵がうようよいるここを駆けずり回ってるんだから」

そしてハジメと影虎がたどり突いたのは他のテントより一回り大きなテントだった。恐らく今回の作戦の指令を行うテントだということは影虎もすぐ分かった。

「ハジメさん。なんでここに？」

「そりゃ勿論。作戦を手っ取り早くめちゃくちゃにするには司令塔を潰すのが一番だからね」

ハジメはそう言うと言々と堂々とテントに入る。影虎もその後をついていく。

「やあ、皆さん。作戦の調子はどうだい？」

いきなりの侵入者にテントの忍者が驚いたようにざわめく。

「なんだ？ 貴様は？ 今は大事な作戦前だぞ。何を考えている。といういか！ お前牢にいた者じゃないか！」

テントの中にいた忍者の一人が叫ぶ。しかし、影虎は特に気にするでもなく自分の要求を述べる。

「ハイハイ。少し黙って。僕たちは要求をしにきたんだ」

「要求だと？」

「そう。僕たち二人の要求は一つ。今から行われる作戦の中止だ」

ハジメの言葉が終わると同時に、テントの中にいる忍者が同時に臨戦になる。

自然と影虎も臨戦態勢になるがハジメが手で制止する。

「なるほど僕の要求は呑みこめないと。仕方無い、やれ」

その時だったテントの中の忍者の半分がもう半分の忍者を襲う。数秒後、テントの中にある意識のある忍者が約半数に減る。

その現状に驚愕する影虎を余所にハジメは、テントの奥に入っていく。

「さ、これで形勢逆転だ。中止を願いましたようか。石川五碌殿」

テントの最奥。そこには、五碌が椅子に座っていた。その足下には忍者の死体が転がっている。

「抱き込んだのか。ここにいた作戦指揮官だった忍者の半分を」

「ええ。仙人の手法を真似してみました。さ、作戦の中止を。ついでにアナタには檻に入らせて貰う」

「檻か。何故、私が入らないといけない」

「この状況を作った一端はアナタにあるからだ」

影虎は懐から拳銃を取り出すと五碌に近づきながら言葉を並べる。

「最初に疑問を持ったのはトラ君の任務についてだ。誰が、どう考えても最近やっと忍者のイロハを知ったトラ君が受ける任務にしては難易度が高すぎる。リターンとリスクがつりあっていないことが一つ。二つ目はアナタしか日鷹の死体を仙人に渡すことは出来ない。最後に、そもそも準備が良すぎる。仙人の作戦をあらかじめ、ある程度知っていないとあんな巨大な結界は作れっこない」

日鷹は五碌の前まで来ると銃口を五碌の額に押し当てる。

「詰みだ」

しかし、五碌は動じない。ただ、無感情に話す。

「そうか、バレたか。流石、孫市様のご子息だ。良いだろうここは一度引こう。檻にいれるなり何なりすると良い」

その言葉にテントの中にいた忍者が五碌の腕を拘束し外に連れ出す。

テントを出る前、五碌が影虎の隣を通り過ぎるとき影虎は言葉を投げかける。

「なあ、今の本当か？ ハジメさんの言ったことは全部真実なのか？」

「察しが悪いな。真実だ」

それを聞き影虎は怒りで拳を強く握る。

「なんで、そんなことを」

「お前を殺す為だ。その為にお前に日鷹の任務を引き継がせた。日鷹の死体を仙人に渡した。まあ、日鷹が生き返るとは本気で思っていた訳ではないがな」

「あんた、なんでそこまで俺を殺したがる！ 俺が何かしたか?！」

「お前は忍法が使えない。忍法を使えない忍者を私は許さない。それだけのことだ」

その五碌の言葉に影虎は戦慄する。今まで何百、何千という殺意を向けられたことがある。しかし今、目の前にいる石川五碌には凡そ、その殺意というのがもっと言えば感情という者が感じられない。

五碌にとって影虎を殺すというのは、息をするのと同じぐらい当たり前のことなのだ。

影虎はそれを悟った瞬間、諦めにも似た感情が心を支配する。

(この男に怒りとか殺意とかを向けるだけ、無駄だ)

「連れて行って」

ハジメの言葉により五碌はテントから出される。

「大丈夫かい？ 君にしては冷静だったけど?」

ハジメは影虎を心配し声をかける。

「別に今更、あの男に何か言われたからって何も思いませんよ。ただ、一つ聞いて良

いですか？」

「なんだい？」

「アレが忍者にとって正しい姿なんですかね？」

五碌は人間としては最低だが、忍者としては最高の存在だろう。忍法が使えない影虎を殺すというのも、劣等遺伝子を途絶えさせ優秀な遺伝子を未来に繋げるといふ為だと考えればあながち間違っていない。恐らく日鷹の死体を仙人に渡したのも、優秀な遺伝子を後生に残すという意味合いもあったのだろう。

そういう作戦も倫理観などを排除すれば忍者的には正しい。

そんなことをハジメは理解して即答する。

「間違ってるよ。いくら忍者の未来のためだとか、忍者的に正しいからとか擁護したところで忍者もしよせんは人間だ。人間が人間を、それも実の子をたいした理由もなく殺して良い理由はないし。合理的だからと言って大量虐殺する作戦を実行していい訳がない」

ハジメの言葉に、日鷹の揺らいでいた何かが収まる。

すると、テントの中にいた一人の忍者が二人の間に割って入る。

「少し良いか？」

忍者は覆面をとる。その忍者はハジメと共同戦線を引いていた甲賀の忍者、正宗だった。

「最終確認だ。これから、お前ら二人がああ結界の中に入り目標である高坂真華の妖具の暴走を止める。期限は今夜三時まで」

「それが無理だった場合は当初の予定どおり作戦を進めれば良い。君たちだって半分は、五碌の作戦に賛成なんだろう。ただ、他にも試すべきことはあるんじゃないかと思っているだけ」

「人間が悪いな。俺たちだって好き好んでいたいわけじゃない」

「分かっているさ。大丈夫僕たち二人でどうにかする。それよりも、僕が頼んだもの用意してくれた」

「ああ」

そう言い正宗テントの中に隠していた大きな鞆を取り出す。中には、多種多様な武器が入っていた。

ハジメはその中でも、ライフル銃を手にとると残りを影虎に渡す。

「いいんですか？ これって」

「良いんだよ。これらは君が持つべきだ」

ハジメに言われ影虎は武器の入った鞆を持つ。最後に影虎は一枚の紙と共に小さなひょうたんを正宗から渡される。

「使い方はその紙に書いてある」

影虎は正宗から渡された紙を一読すると

「ありがとう」

と一言伝える。

それを見たハジメは高らかに宣言した。

「さ、今度こそ高坂真華を助けに行こう」

「はい」

二人は仮拠点をあとにした。

十三話 過去を憂う者。現代を生きる者

影虎とハジメは関原街に向って走る。その、服装は二人とも忍者装束とそれぞれ武器を携帯している。

「そういえば街一つ閉鎖しているような状況ですけど、メディアとか大丈夫なんですか？」

「そこらへんは忍者の情報統制でテロってことで処理されてるよ。だから、結界から約十キロの範囲は人が避難してる」

「つまり、多少は暴れても大丈夫だと」

「そういうこと」

そんなことを話していると、二人の目の前に結界がそびえ立つ。影虎はそっと結界に手を伸ばす。すると、すんなり結界の中に腕が通る。

「割と簡単に中に入れるんですね」

「この結界は中にいる存在を外に出さない為のものだからね。入るのは簡単だよ。ただ、出るのは難しい」

「ということは、俺たちが入ったらもう出れない」

「いや、高坂真華を元に戻して、仙人と日鷹を無力化できれば外から結界を解くことは出来るよ」

「逆に言えば失敗すれば俺たちは」

「例の作戦に巻き込まれて死ぬ。まあその前に、僕たちは殺されているだろうけど。怖じけづいたかい？」

「まさか。命をかけることは慣れてます」

「君らしい回答だ。じゃ、いこうか」

二人は同時に結果の中に入る。

結界の中の街の様子は荒廃の一言だった。道路のあちこちに車が乗り捨てられており、あちこちで火事が起きている。

しかし、そんな荒廃加減とは裏腹に、街は静寂に包まれていた。しかし、影虎の肌はピリピリと痛みを感じる。自然、影虎は当りを警戒する。

その時だった影虎は此方に向ってくる殺意を感じ、近くのハジメの腕を引きその場を離れる。直後、影虎達がいたところに何かが衝突し粉塵が舞う。

「何だ……いきなり」

影虎が臨戦態勢に入ると、目の前の粉塵が横薙ぎに払われ中から人のようなものが現われる。右半身は普通な男性の体だが、左半身は赤黒い肌と頑強な筋肉に覆われている。特に

左腕は、大きく発達し鋭利な爪が生えている。

「なんだ……アレは？」

「アレは、高坂真華の持っている妖具の邪気に当たれたものだよ」

「た、たす、助けてえー！」

発する言葉と裏腹に、化け物は影虎達に襲いかかる。

影虎は、懐からクナイを取り出すとそれを投擲する。男性の化け物は左腕でガードする。勿論、クナイは左腕に刺さるが、すぐにその傷は塞がれている。

「マジか！」

影虎は、生け捕りは無理だと判断。少し可愛そうと思いつつも目の前の化け物を殺すことを決意したその時だった。

一発の銃声が響く。直後、男性の化け物はその場に倒れる。

「死んだ……のか？」

「いや寝てるだけだよ」

ハジメは拳銃に弾丸を込めながら影虎に近づく。

「怪我は無い？」

「はい。あの、ハジメさんこれはいったい？」

「さっきも言った通り、高坂真華の持つ妖具〈鬼の心臓〉の邪気に当たられ変化した元、人間だよ」

ハジメは真華の妖具。その脳力について説明する。

「本来〈鬼の心臓〉は持ち主に不死の体と人外離れた身体能力を得られる代物なんだよ。

ただ、持ち主の精神が極端に崩れると〈鬼の心臓〉はその力を所有者じゃなくて、周りに振り向く」

「それが、この化け物」

「そう。文字どおり人外の身体能力と不死の体を持った〈鬼の心臓〉を持った存在を守る死兵だよ。トラ君。間違ってもこれの攻撃を受けないようにね。受けたら君も化け物になるよ」

「了解です」

二人はその後化け物達に襲われながら真華が変化した例の巨大な木に向って走る。

その道中、何度か例の化け物に襲われたが、幸い元がただの人間ということで動きが単調であったこと。完全に化け物になったわけでは無くまだ人間の部分が残っており、人間の部分を攻撃すれば気絶させることは容易ということもありそこまで苦労すること無く街を移動することが出来る。

二人は、ビル街を走っているとハジメが突然歩みを止める。

「ハジメさん？」

「トラ君。こっからは別行動だ」

「えっいきなり！」

急なハジメの提案に驚く影虎の反応を見てハジメはニヤリと笑う。

「なんだい、僕がいないと心細いかい？」

「ッ！ そんな訳ないでしょ！」

それを聞き影虎は先ほどの挑発の笑みとは違う穏やかな笑みを浮かべながらいう。

「だよ。じゃ、お互い生きて会おう」

そう言い、ハジメは影虎と離れどこかに消える。

影虎はその後ろ姿が見えなくなるまで眺めると再度、走り出す。



ハジメは無人のビルの屋上を飛び乗りながら移動する。そして、お目当てのビルまでたどり着くと即座に物陰に身を隠す。

そして、そつと下を見る。そこには、五十人以上の人物がゾロゾロと隊列を組んで移動していた。

しかし、その隊列の殆どが仙人の妖具により無理矢理動かされた死体だった。

「まるで百鬼夜行だ」

ハジメはポツリと漏らすと自分の肩にかけているバックをそつと下ろしチャックを開く。その中に入っていたのはよく手入れされた火縄銃だった。しかし、その大きさは通常の三倍はあった。

ハジメは静かに構えると狙いを定める。狙いは、隊列の中心にいる仙人である。

影虎は躊躇なく引き金を引く。直後、銃声とは違うバチバチと弾ける音が一瞬鳴ると、まばゆい光が当りを包み混む。

その光が止んだ瞬間当りに肉が焦げる嫌な匂いと熱気があたりに立ちこめる。

「終わったかな」

そう言いハジメが後を向いた瞬間、ハジメの背中に複数の影が映る。生き残りの屍の忍者である。

「なんてね」

ハジメはそれを予測していたのだろう。即座に振り向き先ほどの銃を構え即座に引き金を引く。先ほどと同じく当り一面を光が包み混む。次の瞬間ハジメに影を落していた屍の忍者の下半身が消し飛んでいた。屍の忍者は力無く落下する。一人を除いて。

落下する屍の忍者を足場に一人の人物がハジメを飛び越えビルの屋上に着地する。

「あれ？ ちゃんと殺したと思うんだけど？ 外れたかな？」

「いやあー確かに、お主の一撃は儂の体に直撃した。ただ、儂に致命傷を与えることは出来ていない。それだけのことよ」

ハジメの強力な攻撃を受け尚も生還した仙人はゆっくりと振り向きながら言葉を放つ。

その言葉の端々に嫌みを感じとったハジメはあえて笑り返す。

「そうかい。なら次は、塵一つ残さず消してあげるよ」

ハジメは最速で銃を構える。

しかし、それ以上に仙人の動きは速かった。

「〈忍法・土遁〉」

仙人が手のひらをビルの屋上に付ける。直後、ビルは轟音を立てて倒壊していく。足場を崩されたハジメは落下する瓦礫を乗り継ぎながら地面に着地する。

「ホッホッホ。どうじゃ、立地的な優位を崩された気分は」

仙人は足下に風を纏いゆっくりと降下して現われる。

「別にどうも。立地的優位は無くても勝つからさ！」

そう言いハジメはライフルを構え得ると、連続して引き金を引く。銃口からは、弾丸とは違う光球が放たれる。

しかし仙人に全く当たらない。仙人はハジメの攻撃を避けながら話しをする。

「ふむ。その銃。矢張り〈八咫鳥〉か。という事は、貴様、雑賀の人間か」

「あれ、言って無かったけ？ 僕の名前は雑賀ハジメ。雑賀衆の次期当主さ」

現代では巨大忍者組織の一角として甲賀や伊賀と名を連ねる雑賀衆。しかし、元々は戦国時代に活躍した傭兵集団である。隠密や諜報よりも銃を敵に放つ野戦が得意としていた。

その血を受け継いでいるせいか、実はハジメの忍術の技量はそこまで高くない。

そして、それは戦国時代の雑賀衆を知っている仙人は即座に見抜いた。故に、自分の勝利の確信を込めて醜悪に笑う。

「孫市の子孫か。それは腕が鳴るわい！」

仙人は、指を絡ませ印を結ぶ。

「〈忍法・火遁〉」

仙人は大きく息を吸い勢いよく吐く。その息と共に、口から炎の渦をハジメに吐き出す。

影虎は近くの瓦礫に身を隠すことでその炎をやり過ぐす。即座に、木陰から銃口を出すと引き金を引く。光球が仙人に向って跳ぶが仙人は印を結び自らを鼠にかえ軽やかに避けてみせる。

ハジメは突然仙人が消えたと思いいりを見渡す。

「こっちじゃ」

ハジメが振り向くとそこには鼠から人間に戻った仙人がいた。影虎は〈八咫鳥〉を構えるが――

「遅い！」

仙人に懐に入られる。仙人の掌底がハジメの腹にめり込む。ハジメたまらず口から吐瀉物をまき散らしながら瓦礫にぶつかる。

仙人はさらに掌底を繰り返すがハジメはギリギリで右に転がるように回避する。

「ふむ、現代の忍者にしては中々やるのお」

仙人は笑みを向けながら地面にへばりつくハジメに向って話し掛ける。その、態度はまさに余裕そのものだった。

ハジメはそんな仙人の挑発に笑みをかえず。

「それはどうも。まさか、伝説の忍者、果心居士かしんこじに褒められるなんて光栄だね」

ハジメの言葉に仙人もとい果心居士は眉を動かし反応する。

「おや、まさか自分の正体がバレてあせっているのかい？」

果心居士。その名を知らない忍者はいないほどの伝説的な忍者である。戦国時代に活躍し、数多の忍法を会得した忍者。と、同時に謎が多くあらゆる秘伝書に名は書かれるがいつ死んだか、どんな任務をしたのか全くの不明という、ある意味異色の忍者でもある。

「ふむ……なぜ、儂が果心居士だと分かった？」

「たいしたことじゃないさ。今までのアナタの発言と、アナタの風貌、使った忍法を総合的に組み合せたら、そうなんじゃないかと思っていただけさ」

「なるほど。いや、実際たいしたものじゃぞ。儂の正体を見破ったのは戦国の世を覗いて、一人しかいない。そうじゃ興が乗った。一つ、願いを叶えてやろう。殺さないで、でも仲間にして、でも良いぞ」

「なら、一つ質問に答えてよ」

ハジメは〈八咫鳥〉を杖のようにしてヨロヨロと立ち上がる。

「どうして、こんなことをするの？」

「こんなこと、とは？」

「全てさ。忍者組織から妖具を奪い、多くの人を犠牲にしてこの状態を作った。その動機を僕は知りたいのさ」

「ふむ、動機……か。孫市の孫。貴様は今の忍者を、そして今の人間をどう思う？」

「質問してるのは、こっちなんだけど？」

「良いから答えろ。どう思う？」

ハジメは暫く考えた後ポツリと答える。

「別にどうも。それなりに不満はあるし。不条理だと思っけど、だけど、少なくともこんなことをしようとは思わないよ」

ハジメの答えを聞き、果心居士は大きく溜息を吐きポツリと零す。

「少しは見込みがあると思っていたが……所詮、お主も今の人間なのだな」

その表情は落胆と哀れみの感情が見て取れた。

「動機じゃったな。儂が望むのは時代の回帰じゃ。今の忍者は戦国の世に比べれば皆ぬるい。すぐに人を信じる。忍術の腕も忍法の腕も儂からみれば皆三流。そして、現代の人間には戦国の世のような熱さがない。命の危機に陥ればすぐに許しをこう。不満があっても自らが納得することで解決した気にいる。戦おうとせん。嘆かわしい。」

「だから、時代を回帰させる」

「ああ、そうだ。皆が熱を持ち、自らの野望のために死力を尽くす。そして、我ら忍者は自らが見定めた主君の為に自らを捨てて任務に没頭する。あの群雄割拠な時代！」

自らの野望を唱える果心居士の瞳は、少年のように輝いた。その姿が、ハジメには酷く醜悪に見える。

「果心居士。言っておくけど、そんなことをしたところで意味は無いよ。君がどんな作戦を考え、実行したところで、それで今の現代社会が破壊されるなんてことは決してない」

「いや出来る。この結界を破壊し、手始めにこちら一帯を化け物の巣窟にする。そうなれば、脆い今の社会は崩れる。そこにすかさず、儂が保有していた妖具を渡した者達が組織を引き連れ、自らの野望の為に動き出す。日本は混乱に陥り、そして妖具を保有した者を頂点した幾つもの組織が作られ日本を分割する。これで第二の戦国時代の幕開けよ！」

果心居士の野望、そして作戦を聞きハジメは、呆れずにはいらなかった。なぜなら、果心居士が望む未来には決して訪れない。そんなことは現代に生きていれば誰でも分かることだからだ。

例えば、現代の科学兵器や銃火器を武装した軍隊の破壊力は恐らく、果心居士が妖具を渡した人物達が作った組織を壊滅させるからだ。今の時代、どんなに超常的な力を持った人間が一人いたところで数の暴力には勝てない。

それだけではない。今の日本は戦国の時代と違い海外とのつながりがある。もし、日本の政治が機能しなくなっても世界が黙っていない。

その他にも、果心居士の野望が叶わない理由は数えたらきりが無いほどある。

つまり、果心居士のやっていることは突き詰めていけば壮大な徒勞でしかないのだ。

ハジメは、最大限の侮蔑を込めて一言漏らす。

「なるほど。さすが戦国時代の人間。今の時代を生きていないんだね」

「なに？」

果心居士は顔を歪ませる。ハジメは、そんな果心居士の表情を見ていつも薄っぺらい笑みを浮かべる。

「別に気にする必要はないさ。淡い幻想を懐いたまま死んでいけ」

その直後、果心居士の背後のビルが倒壊する。果心居士はギリギリで交わす。避けた先にはハジメの銃口があった。

〈八咫鳥〉の銃口から光りの熱線が勢いよく跳ぶ。果心居士はそれを気紙一重で交わす。しかし、熱戦は不自然に曲がり後から果心居士の心臓を打ち抜く。

果心居士は膝を止める。その頭上に二つの光球が墜ちていき、粉塵と共に果心居士の体を蒸発させる。

本来ならこれで決着。しかし、ハジメは全く銃口を下ろさない。そして、その行動は正しかった。

「忘れておったわい。〈忍法・操投〉そうとう 投擲武器の動きや方向を変える技。孫市は、自らの忍法を拡大解釈し弾丸を操る忍法に変えたんじゃないったのおー」

果心居士は身に纏う煙から出てきながら言う。

「今では〈忍法・操弾〉っていうんだよっ！」

直後、次々と光弾が果心居士の頭上に墜ちてくる。この光球は今まで果心居士にかわされた者を忍法の力で空中に保管していたものだ。

それだけではない。攻撃と速さが最もバランスが取れた光球。速さと貫通力がある熱線。光球よりも、小さく攻撃力は劣るがそのぶん速く連射が出来る光弾。これら、三つを使い訳ながらハジメは果心居士を的確に追い詰める。

しかし、それでもハジメが優勢とは言えなかった。

「なかなか、激しい攻撃。久し振りに血が滾るわい！」

果心居士は、幾度と無く体を焼き貫かれながらもハジメに接近する。そして、首根っこを掴み勢いよく投げ捨てる。

ハジメは投げられながらも、空中で体制をとり引き金を引く。銃口から放出された熱線が地面を抉りながら果心居士に向う。

「〈忍法・水遁〉」

果心居士は口から水を勢いよく放出。向ってくる熱線の勢いを減退させる。

ハジメは地面に勢いよくたたきつけられる。すぐに立ち上がろうとするが、当然地面から生えた植物がハジメの体に巻き付き拘束する。

「孫市の孫。楽しかったぞ。お主との死闘。じゃが、ここまでじゃ」

「いや、まだだよ」

ハジメは、地面に向って引き金を引く。次の瞬間、果心居士は何かを感じ取り、その場から離れる。一拍遅れ地面から熱線が吹き出した。熱線はまるで生き物のように果心居士に向っていく。

「地面に熱線を撃ちこみ、地面の中で急カーブさせたか！ 矢張りお主は面白い！」

ハジメは、再度同じことを繰り返し自身に巻き付いている植物を焼き切る。しかしその瞬間、果心居士の鋭い掌底がハジメを襲う。ハジメは〈八咫鳥〉で防御する。

果心居士はハジメに肉薄しながら話し掛ける。

「なあ、孫市の孫。そろそろ諦めないか？ お主も分かっているだろう。儂とお主では、生物としていくつもの差がある。例えば、お主は死ぬが儂は死なん！」

その言葉と共に、ハジメは後に蹴り飛ばされる。

「例えば！ お主と儂では法力ほうりきの量に差がある！」

果心居士は五つの印を結ぶ。法力とは忍者が〈忍法〉を使うために必要なエネルギーである。そして、その量が多ければ多いほど強力忍法を使う。

印を結び終えた果心居士の背後に火、水、土、金、木で構成された螺旋現われ、ハジメを襲う。

ハジメは、片膝をいつき引き金を引く。直後、銃口から今までと違う極太の熱線が放出される。

二つの巨大な力は激突し当りに、何度目とも分からない粉塵が舞う。そして、それが晴れたそこには、体中傷だらけのハジメはいた。

「いやいや、先ほどの中々良かったぞ。まさか、私の〈五遁〉を防ぎきるとは。戦国の世でもそういなかったぞ。と、賛辞を送ったところで、先ほどの余波でボロボロのお主には聞えてないと思うがな」

無傷な果心居士はゆっくりとハジメに近寄る。

ハジメは、その場にゴトリと倒れる。

「なあ、孫市の孫よ。最後になにか言い残すことはあるか？ 最低限の礼儀じゃ。聞いてやろう」

ハジメはゆっくりと口を開く。果心居士は腰を折り、ハジメの口に耳を近づける。

「君の負けだよ」

その瞬間、ハジメと果心居士たっている地面が星形に光る。果心居士はその星型を見て驚愕の顔を出す。

「これは……まさか五芒星！」

果心居士はその場から離れようとするが、その足をハジメは掴み逃がさないようにする。直後、果心居士の立っている地面が泥となり果心居士を飲み込む。

「これは〈忍法・土遁〉！ だが、現代にこれほどの威力の土遁をどうやって！」

「何の準備も無しにだったら勿論無理さ。だけど、陣を描いて祝詞と舞をすれば、この場に限りできるんだよ」

ハジメは先ほどの弱々しさは無く、いつも通りの薄っぺらい笑みを浮かべながら言葉を並べる。

果心居士は地中に沈みながら言葉をならべる。その言葉は焦りに満ちていた。

「どういうことだ！ 祝詞？ 舞？ そんなものはどこにも？」

「いいねえ、その顔。興が乗ったから、冥土の土産に教えてあげる」

ハジメは、携帯端末を懐から取り出し果心居士に見せる。画面には巫女服をきた香奈が舞と祝詞を捧げる姿がライブ映像として映し出されている。

「このくノ一……歩き巫女か！」

歩き巫女とは、巫女の修行を積んだくノ一のことである。

「正解。後は僕が〈八咫鳥〉で陣を描けば準備完了。ここは、結果から漏れ出た法力が充満している。それを利用すれば良い。君が自分の法力で体をなおしたようにね」

果心居士の体は既に半分が埋まっている。しかし、それでも諦めきれない果心居士は体を動かしながら逃げだそうとする。しかし、動けば動くほど体は沈んでいく。

やがて果心居士は諦めたのか力無く言葉を発する。

「お主、誰に教えをこいた。忍者の源流を。それは、戦国の世でも一部の者しか知らないことだったはず」

「今の忍者なら誰でも知ってるよ。忍者の源流が神道や陰陽道、密教なんかと深い関わりが

あることぐらい。」

それを聞き果心居士は悟った。自分は目の前に忍者ではなく、時代に殺されるのだと。過去の遺物は未来の力で破壊されるのが世の理なのだ。

「だが、それでも僕は諦めん。必ず……必ず……時代を……」

果心居士の頭が半分埋まったところで沈むことはなくなった。

ハジメは地面からでた果心居士の部分を〈八咫鳥〉で吹き飛ばす。

直後地面は泥から固いコンクリートに戻る。

「これで、しばらくは……あの老害は出てこないでしょ。後は、頼んだよ……影虎くん」

ハジメは小さく笑みを向けると、これから始まるであろう影虎と日鷹の勝負に水を差しかねない化け物の討伐に向った。

十四話 日鷹と影虎（前編）

影虎は今、過去類を無い緊張に襲われている。幼少の頃、初めて殺されそうになった時よりも、真華と初めて会った時よりも緊張しているかもしれない。

全身には嫌な汗がびっしりとへばりついており、喉は異様に乾く。

そんな影虎の目の前に日鷹が柔らかい笑みを向けて対峙している。その手には、赤い唐傘が握られている。

「やあ、兄さん。また会えてうれしいよ」

「ああ、俺もだぜ」

影虎の言葉が予想外だったのだろう瞳を少し丸く上げる。

「なんだよ？」

「フフフフ、いや、なんだが、以外だね。兄さんは僕のこと嫌いだと思ってたからさ」

「嫌いだだぜ、お前のこと……いや、違うか。嫌いだと思ってた。嫌いで、憎いと思いつけないと生きていけなかった。でも……そんな俺を変えてくれた奴がいた」

「それって、真華さんのこと？」

「ああ、だから俺はアイツに恩を感じてる。救いたいと思ってる。だから、どいてくれ。俺は、お前とも戦いたくないんだ」

「それは、出来ない。真華さんのところに誰も行かせないのが僕の今の任務だから。私情を捨てても任務は達成しろ。子供でも知ってることだよ。まあ、安心して。もし、兄さんが死んでも僕が生き返らせてあげるから」

そう言い、日鷹は懐から〈禁死の刀〉を抜くと構える。

「まあ、お前ならそう言うよな」

影虎も構え臨戦態勢に入る。二人の間に冷たく、重い空気が流れる。

影虎は自分の頬を伝う汗が流れ、地面に墜ちた瞬間、凄まじい速さで日鷹に突撃する。

影虎の拳が日鷹の胸を貫く瞬間。日鷹の体がぐにやりと歪み消失する。

直後、影虎は背後に鋭い殺気を感じ、振り向くと同時に抜刀する。二つの刀が甲高い音と

共に交差する。

「ハハハ！ 僕の一太刀を受けるなんて！ やっぱり、兄さんは凄い！」

日鷹は興奮したように饒舌に話す。影虎は日鷹の賞賛に素直に嬉しく思いながらも、両腕に力を込め日鷹を弾き返す。

影虎は即座に日鷹に肉薄すると刀での斬撃を繰り出す。臂力では影虎のほうが勝っており日鷹防戦一方となる。

「どうした日鷹！ 忍法を使わないと俺には勝て無いぞ！」

「出来れば、忍法は使いたくないんだよね。でも、こっちは使うとするよ」

日鷹は一度大きく影虎と距離をとると、持っている唐傘を開くと本来雨粒が当たる外側の面をくるくると回す。

唐傘に描かれている金色の波の模様が、桜に変わっていく。そして突如、唐傘から桜の花びらが渦を巻いて影虎に接近する。影虎は、自分に接近してくる花びらを切り捨てながら後に下がるが、桜の量が多くあつという間に桜の渦に取り囲まれる。

影虎は、刀を構え全方位に意識を研ぎ澄ませる。

「そこか！」

影虎は殺気を感じた法を振り向くと、刀を振るう。しかし手応えがない。直後、影虎の背中に鈍い痛みを感じる。

（やっぱ、厄介だな。〈幻視の唐傘〉は）

影虎は奥歯を噛みしめ、忌々しそうに自分を取り巻く桜を見る。

〈幻視の唐傘〉とは、日鷹が持つてる唐傘のことである。脳力は、相手に練度の高い幻術を見せる能力。日鷹と影虎の祖先、石川五右衛門が大泥棒として名を馳せた理由の一端でもある。

その後も、影虎の体の体に幾度となく鈍器で殴られたような鈍い痛みが襲う。影虎は痛みを耐えかね片膝をつく。影虎の頭に〈幻視の唐傘〉がトドメとばかりに振り下ろされる。しかし頭部に当たる直前、影虎はその攻撃を片手でつかむ。

「捕まえた。やっぱ、片膝ついて満身創痍の奴にトドメ刺すにはやっぱ頭だよなあ！」

影虎は万力のような力で〈幻視の唐傘〉を掴み逃げられないようにする。そして、桜の幻を隔て向こう側にいる日鷹に向かって刺突を繰り返す。

刀が人体に刺さったことを感じた影虎は日鷹を切り裂こうと腕を振るう。しかし直後〈幻視の唐傘〉が開く。

影虎は傘の拓く力を押さえられず手を離してしまう。

〈幻視の唐傘〉がまたクルクルと回り出す。すると今度は、金色の桜の模様は業火に変わる。すると、周りに渦巻く桜は、いっせいに燃え影虎に纏わり付く。

「あぁー！！！」

影虎の体は燃焼し強烈な熱さと痛さ息苦しさにのたうち回る。影虎は必死に意識を保ちながら、自らが持っている刀を自分の腹に突き刺した。

腹を刺す鋭い痛みが体を燃やす痛みを上回る。すると影虎の体を燃やしていた炎がフツと消える。

「なんだ、知ってたんだ。幻術の対処法」

肩から血を流す日鷹が飄々と言う。

「当たり前だ」

幻術とは、いわば虚構を見せる術である。つまり、影虎を燃やした炎も全て嘘。ただ、影虎の脳が燃えていると錯覚し痛みを息苦しさを感じさせていたに過ぎない。そんな幻術を解除する方法は一つ。幻術で引き寄せられた痛みよりも強い痛みを受ければ解くことができるのだ。

「悪手だったな、日鷹。桜の目眩まじだったら、俺に解く手段は無かったっていうのに」

「そうでもないよ。少なくとも兄さんに傷を付けることは出来た。か弱い、僕からすれば御の字さ」

日鷹のその発現に影虎はいぶかしむ。

「お前のどこが弱いんだよ？ 新進気鋭、雑賀衆の若きエリートと呼ばれているお前のどこが」

「か弱いほうさ。少なくとも臂力に関しては、兄さんのほうが強い。接近戦になれば、まず僕に勝ち目がない。だから、やつぱり……これを使おう」

そう言い、日鷹は印を結ぶ。それを見た瞬間、影虎は勢いよく日鷹に接近し拳を繰り出す。しかし、日鷹に当たる瞬間ピタリと体全体が止まる。

「お前、忍法は使わないんじゃないのかよ」

「忍者が本当のことを言うと思う？」

日鷹は影虎の体に一撃入れる。それにより、影虎の足が地面から離れた瞬間凄まじい力で後ろにひっぱられ瓦礫の壁に強く叩きつけられる。そして、どれだけ体に力を込めても壁から体を離すことができない。

影虎は目線を後に向ける。そこには幾何学的な文字が描かれていた。

日鷹は〈禁死の刀〉を構えると地面を滑るように移動し影虎に接近する。

影虎は腕に力を入れる。すると、影虎の腕に巻き付いてる鎖が緩む。それを見て、影虎は叫ぶ。

「起動しろ〈蛇鎖〉」

影虎の腕に巻き付いてた鎖がひとりで動き、凄まじい速さで日鷹に接近する。日鷹は、ギリギリで無数の鎖を避ける。

影虎は鎖を操作し自分の背後にある瓦礫の壁に巻き付き粉碎する。直後、影虎の体は自由を取り戻す。

影虎は、腕を振るい日鷹に向かって八本の鎖を伸ばす。日鷹は向ってくる鎖を〈禁死の刀〉で受け流す。

それにより鎖は近くのビルの壁にめり込む。しかし、それこそ、影虎の狙いだった。鎖を縮ませその力を利用し高速移動をする。そして、日鷹とすれ違いざまに刀を振るう。

今までとは比べものにならない速さと、影虎の人間離れた膂力から繰り出される一撃は、〈禁死の刀〉でガードした日鷹を吹き飛ばす。

影虎はすかさず追撃を行う。鎖を伸ばし、建物の壁などに打ち込み、それを機転に自由な三次元的な移動と強力な攻撃を繰り返す。

まさに化け物じみた攻撃に終始日鷹は圧倒される。

「思い出したよ。その鎖！ 跳び加藤の鎖だね！」

日鷹は、影虎の攻撃を受けながらも笑みを浮べて言う。

跳び加藤とは、香奈の先祖である加藤段蔵の二つ名であり高い跳躍力と俊敏性から付けられた名である。そんな加藤段蔵の伝説の一端を担ったのが妖具〈蛇鎖〉である。

（ちっ、やっぱ知ってたか。となると……すぐに対策を打ってくるな）

影虎が今の戦法がそろそろ、通じないと分かり次の戦法を考える。そして、その影虎の力は当たっている。

影虎が日鷹に攻撃するために、近づいた時だった。刀を持っている影虎の手首を掴みひねり上げる。

（合気ー）

影虎の体は、空中で回転し地面に叩きつけられる。そんな、影虎の顔面に日鷹が躊躇無く〈禁死の刀〉を突き刺す。影虎はそれをギリギリで交わし即座に立つ。

「テメェー、人の顔を」

「大丈夫だよ。兄さん。兄さんは少し傷があっても格好いいから」

そこからは再度刀で斬り合いが始める。しかし、先ほどと同じように影虎は自分の膂力に任せ日鷹を一方的に攻撃する。誰がどう見ても影虎が有利。しかし、影虎本人だけはこの一連の流れが全て日鷹の手のひらの上だと悟る。

影虎は上段から強烈な一撃を放つ。日鷹は、その一撃を〈禁死の刀〉で受け止めようと刀を水平にする。

刀と刀が当たる瞬間、影虎の手に届いたのは刀同士がぶつかった時に生じる痺れではなく霞を切ったような手応えの無さ。

影虎は瞬間的に後に引く。

それと同時に。影虎の一撃を会えて最低限の動きで避けた日鷹は影虎の懐に入り込む。そして、神速の動きで〈禁死の刀〉を振り上げる。

影虎の体から血が流れる。しかし見た目と反して、その傷は浅かった。

それは日鷹も理解したのだろう。驚いたように首を曲げる。

「おかしいな？ 何で分かったの？ 確実に取ったと思ったのに」

「別に対したことじゃないさ。ただ避ける準備をしたただけだ」

影虎は何でもない風を装ってはいるが実際はあの一撃を避けられたのは殆ど奇跡に近い。

その奇跡を掴み取れた理由は二つ。一つは、影虎が並の人間以上に殺気に敏感だったこと。もう一つは、影虎が日鷹に才能を知っていたことだ。

日鷹の才能。それはどんな状況にも即座に対応する対応力の高さである。先ほどの影虎との鏝背り合いも影虎の臂力に対応した日鷹は会えて力を抜くことで、影虎の攻撃を受け流す。そして必殺の一撃がきたところで、必殺のカウンターを放ったのだ。

(理論上、時間をかければかけるほど、俺が勝利する可能性は低くなる。俺の手持ちは後、三つ。それまでにアイツを倒す！)

影虎は手に持っている刀を真っ直ぐ日鷹に投げる。しかし、勿論日鷹はそれを簡単に交わす。その交わした間に影虎は日鷹に肉薄する

そして、渾身の蹴りを放つ。

「〈忍法・集球〉」

日鷹が印とともに静かに唱える。

その直後だった。影虎の蹴りが影虎の意思とは無関係に不自然に日鷹を避ける。影虎は言い知れない不気味さを感じ一度距離をとり視線を動かす。

日鷹の頭上には、金属物質が無造作に集まり形成された球体が浮かんでいた。

(なんだ……あれは)

影虎はその奇怪な物質に強い警戒心を懐く。

勿論、日鷹の忍法を影虎は知っている。日鷹の忍法は石川家相伝の〈忍法・集磁〉。対象にS極N極の力を持った二つの磁力を付与する忍法。

以前、影虎と真華がデートした日、どこからともなく現われ、ひとりでに襲ってきたクナイもこの忍法が深く関わっている。あの時は、真華の服にS極のそしてクナイ自身にN極の磁力を付与させていたのだ。

他にも敵に片方の磁力、地面や瓦礫にもう片方の磁力を付与し動きを止めることも出来る。

対処方法は磁力を付与されたときに現われる文字を破壊すること。

その他にも、使い方は多種多様。しかし、目の前の忍法は影虎が知っているどれとも当てはまらない。

影虎は再度、日鷹に近づき連撃の突きを放つ。しかし、その全てが日鷹に当たる前に湾曲する。

そして、影虎の当たらない攻撃で出来た隙を見逃すほど、日鷹は優しくない。

影虎の腹に日鷹の拳がめり込む。影虎は、自分の口にくみ上げる物を必死に飲み込む。

影虎はすぐに距離をとる。暫くの睨み合いの末、影虎は懐から複数のクナイを取り出しそれを日鷹に投げる。しかし、クナイも急に起動を越え日鷹の頭上に浮遊している球に吸い寄せられる。

(遠距離の攻撃も駄目……クナイの動きからあの球が強い磁力を帯びた物なのは分かるが……)

「戦闘中に考えごとかい兄さん。余裕だね〈忍法・集引擲〉」

影虎の頬に例の幾何学的な文字が浮かび上がる。日鷹は十本のクナイを取り出す。その全てに、影虎の頬に描かれた文字と対となる文字が浮かび上がっている。

「やばッ！」

影虎はきびすを返して逃げる。その後をクナイが追いかける。影虎は、逃げながら懐を漁る。そして、取り出したのは一本の筆だった。影虎は念じると筆に真つ黒な墨がじわりと滲み出る。

影虎は近くのビルの壁にその筆で円を描く。すると、円の間にある壁が消失。影虎は、その穴からビルの中に入る。勿論、クナイも穴から影虎を追おうとすすむがギリギリで壁が復元。追いかけてきたクナイはコンクリートの壁に突きささりその動きを止めた。

「ふうー」

影虎は壁を背にしてその場に腰を下ろす。正直、今の影虎はかなりやばい状況である。

接近線に持ち込めば一方的になぶり殺される。かといって、遠距離戦をしようにも影虎の遠距離戦の方法は、クナイや手裏剣。金属の物質も例の球に引き寄せられるため意味をなさない。

「接近線も遠距離戦も駄目なら。あとは……」

影虎は、懐から手榴弾を取り出す。

十五話 日鷹と影虎（後編）

ビルの扉を日鷹は静かに開く。ビルの中はシンと静まりかえっている。

日鷹は周りを警戒しながら一歩、一歩とビルの中を探索する。

「そこにいたんだ」

日鷹は通路の端に見える影虎の影を追う。

「逃がさないよ！」

日鷹は、逃げる影虎に向って無情にもクナイを逃げる。クナイは、忍法の力で自動で影虎を追尾する。影虎は、通路に備えつけている防火扉を勢いよく閉める。それにより、クナイは防火扉に突き刺さり動きを止める。

日鷹が防火扉を空けた瞬間、複数の鎖が跳んでくる。その鎖は、日鷹の持っている〈禁死の刀〉もろとも右腕に巻き付く。

影虎が左腕を勢いよく引くと連動し、日鷹の体は引き寄せられる。影虎は右手のひらを日鷹の左手のひらに合せ掴む。

「捕まえた。やっぱ、忍法の力でも妖具を押さえることは出来ない。それは、お前の忍法でも同じみたいだな」

「それで、これからどうするの？」

「こうする！」

影虎は首を最後までそらすと勢いよく振り下げる。影虎の額が勢いよく日鷹の額に当たる。日鷹の額から血が出る。

「お前はその刀の力で死ぬ事はできない。でも、脳震盪を起せば起き上がれないよな！」

素晴らしい、再度影虎は頭を振り下ろす。日鷹の額から血がなられる。そして、もう一度頭突きを食らわそうとした時だった。影虎の右手の甲と日鷹の左手の甲に同じ文字が浮かび上がる。直後、影虎の手は弾かれるように日鷹の手を離す。

「悪いけど兄さん。流石にそれには付き合いきれない」

日鷹はそう言うと、クナイを取り出し真上に投げる。直後、影虎の左腕に文字が浮かび上がる。

それに引き寄せられるようにクナイが腕に突き刺さる。

「グッ！」

影虎のうめき声と共に鎖の拘束も解かれる。日鷹の蹴りが影虎の腹に入り後に飛ばされ地面に倒れる。

日鷹が地面に倒れる影虎に〈禁死の刀〉を振り下ろそうとする。影虎は腕から流れる血を日鷹に飛ばし目くらましに使う。しかし血液は日鷹の球に引き寄せられる。

影虎は床を転がるようにして攻撃を避けると近くの部屋に逃げ込む。これ以上、何か仕掛けられても厄介と考えた日鷹はすぐさま影虎が入った部屋に入り絶句する。その部屋には多数の机と椅子。そして多数のピアノ線が張り巡らされておりそのピアノ線は多数の手榴弾のピンにくりくりつけられていた。

「これは……」

「動くなよ。動いたら、ドカンだぜ」

部屋の最奥の机の腕には、影虎が立っていた。

「まあ、動かなくてもドカンだな」

素晴らしい、影虎は目の前のピアノ線に触れる。ピアノ線のある程度動かすと手榴弾が爆破。それに、連鎖し他の手榴弾も爆破する仕掛けになっている。

「ただまあ、一つ聞きたいことがある」

「答えたくないって言ったら？」

「今すぐこの部屋の仕掛けを発動させる。今死にたいか？」

影虎の言葉に日鷹はフツと笑い口を開く。

「ずるいよ。その言い方は。そんなことを言われたら、答えるしかないじゃないか。で、何が聞きたいの？」

「別に、対したことじゃねーよ。お前、いったい何があった？ 俺の知っている石川日鷹っていうのは、任務に忠実で決して仲間を裏切らない。誰よりも忍者らしい、模範的な男だった。俺は、そんなお前に憧れてたんだぜ。なのに……今のお前は、俺の知っているお前とは

真反対のことをしてる。何があったんだ？」

影虎は鋭く日鷹を見据える。暫くの間、無言で重い時間が流れる。しかし、無言の時間の末に出てきた日鷹の言葉は軽い物だった。

「強いて上げれば兄さんと同じかな」

「同じ？」

「そう。兄さんが真華さんと出会うことで変わったように、僕は仙人に殺されて、生き返らせられて、忍者とか任務とか全部取っ払って世界を見て思ったのさ。僕のやってきたことは、全部無駄だってね」

日鷹は軽い口調で語っているはずなのに、その瞳には深い失望と悲しみが混ざりあっていた。恐らく、影虎が真華と触れあっている間に、日鷹は耐えられないほど、悲しい経験をしたことは容易想像出来た。

「……僕はさ。忍者の仕事は世直しみたな、正義の味方のようなものだと思ってたんだよ。僕が頑張れ、他の忍者と手を合して妖具を全部回収すれば、世界はきっと良くなって。みんな幸せに過ごせると思ってた。でも……違った。いくら、僕が頑張っても仮に妖具を全部回収しても世界はきっと何も変わらない」

「だから真華の妖具を使って世界を一度めちゃくちゃにすることか？」

「めちゃくちゃっていうのは少し違うかな。僕はただ世界を一度、妖具が元凶で悪しきことが起きてしまう。悪いことは全部妖具のせい。そんな世界にするだけさ。そして、改めて妖具を回収する。そうすれば、世界は確実に良くなる……できないって、顔だね兄さん。大丈夫、出来るよ。妖具を発端の戦争を起せば良い。そうすれば、世界は今よりも荒廃する。不幸になる。皆、妖具のせいだっと思う。そんな、世界で妖具を回収すれば戦争の火種は無くなる。ね、世界は良くなるでしょ」

自分の望む世界を語る日鷹の表情は喜々としていた。日鷹はそんな表情のまま、片腕を影虎に差し出す。

「ねえ、兄さんもこっちの来なよ。兄さんも救世主になろう？」

日鷹の瞳は先ほどの悲しみや絶望とは違い期待に満ちていた。恐らく、影虎なら分かって貰える。影虎なら自分と一緒に辛く険しい、望んだ道を歩いてくれる。そんなことを日鷹は考えている。

しかし、残念ながら日鷹の期待は悉く裏切られる。

「分からないな」

「えっ？ ……何が……分からないの？」

日鷹は今にも泣きそうな顔を作る。しかし影虎は、そんな表情にあえて目を瞑り淡々と答える。

「全部だ。お前がそこまでこの世を良くしたいと願う気持ちも分からないし、お前の望んだ世界のために真華を裏切った理由も分からん」

日鷹の表情が絶望に染まる。しかし、影虎は話すのを辞めない。

「別に世界が仮に絶望一色に染まっていたとしても、忍者の任務がそこまで世界に影響を及ぼしていなかったとしても、今を生きているならそれでいいだろう」

その言葉は、影虎の今までの人生そのものだった。幼少の頃より常に殺し殺されの日常に生き、自分以外を全て敵だと認識してきた影虎にとって、今の世界を憂うことも、未来に希望を持つことも、今の幸せに不安を懐くことも全て贅沢な考えに思えてならないのだ。

そんなある種、短絡的な考えは日鷹の懐いていた影虎像を壊すには十分だった。

「そう……失望したよ。兄さん」

「それはすまなかったな」

影虎はピアの線を引くと共に、影虎は自分の後に備えつけられていた窓から墜ちる。直後、轟音爆煙が部屋を満たす。

影虎は窓から墜ちるとそのまま着地する。

日鷹は死んだ。誰もが、そう思う。影虎だって頭で分かっている。しかし、それでも死んだと思え無い影虎がいる。そして、その考えは悲しくも当たってしまう。

爆煙が未だ立ちこめる煙から、一人の影が墜ちてくる。その影は、落下しながら影虎に無数の机をなげる。

影虎は、それを全て避ける。

「よく生きてたな。日鷹」

日鷹は何も答えない。しかし、その体には傷らしい傷は見当たらない。

(ま、大方爆風よりも速く忍法で机を自分の方に引き寄せて防御した……ってところか)

日鷹は、地面を強く蹴りあげ影虎に接近する。影虎は、日鷹の怒濤の攻撃を紙一重で交わす。

いよいよ、影虎にはもう後がない。残った手段は一つ。影虎その手段に全てを賭けるため準備する。

日鷹は今までの余裕のある攻撃とは打って変わって荒々しく、それでいて無慈悲に影虎を攻撃する。忍法で自動で動くクナイで影虎に攻撃する隙を与えず、自らも動き接近線を仕掛ける。

景虎もそんな日高の行動を読んでのことだろう。とにかく、逃げ続ける。クナイや、そこから辺に墜ちている金属の瓦礫などを日鷹に投げる。しかし、そのどれもが日鷹の頭上に浮く瓦礫の球体に吸い込まれる。

日鷹にしてみれば、無駄な攻撃を繰り返す影虎をウザったくなるようになり叫ぶ。

「いい加減にしてよ！ 兄さんがいくら僕を攻撃しても、その攻撃は全て無駄なんだ！ だから、大人しく死んでくれ！」

「無駄……か。まあお前からすれば無駄だろうぜ、殆どのが。けど……案外、その無駄も馬鹿に出来ない」

そう言い、影虎は踵を返し日鷹に突貫する。日高の体に無数のクナイが刺さる。しかし、影虎は走るのを止めない。拳を強く握り、一直線に伸ばす。

日鷹は完全に油断していた。影虎の拳もまた自分には当たらないと高をくくっていたからだ。故に防御をしない。完全に抗武士が伸びたところで、カウントを狙うつもりなのだ。しかし、予想外にもその拳は

「えっ？」

日鷹の顔面にめり込む。そのまま日鷹は地面に転がる。

「どうして……兄さんの攻撃が……」

日鷹は自分の頬を押さえる。

「お前のその忍法がどうして、俺の体術まで阻害出来るのか。理由は俺の血液だ」

影虎の言葉に日鷹は反応する。影虎は続ける。

「血液のその中の微細な鉄分がその球体の強力な磁力に反応し、攻撃がかってにそれる。だろ」

影虎が〈忍法・集球〉のからくり気づいたのは、先ほどのビルでの戦闘。影虎が目くらましで血を吹きかけたとき、その血は日鷹の頭上に浮かぶ球体に引き寄せられたのを見たからだ。

「けど、分からないな。それが分かったところで、どうして僕に攻撃が」

「簡単だ。一つは、俺の血が減ってるからだ」

そう言い、影虎は自分の腕を見せる。その腕はいまでも血がダラダラと流れている。血が少なくなれば〈忍法・集球〉で引き寄せる力も半減していく。

「もう一つは、単純にその忍法のキャパオーバーだ」

磁石に砂鉄が大量に纏わり付けば、砂鉄が磁力を阻害してその機能を半減する。影虎は先ほど、逃げ続けながら大量の金属物質投げた。それらは、日鷹の頭上に存在する球体に引き寄せられ、結果日鷹を守ることはなかったが同時に、〈忍法・集球〉の力を阻害することになったのだ。

「ハハハ、なるほどね。流星兄さん、じゃあ、これは予想出来る？」

そう言い、日鷹は地面に伏しながら新たに印を結ぶ。

「〈忍法・集球・解〉」

その刹那、日鷹の頭上に浮かぶ球体。それに纏わり付いていた金属物質が一気にはじけ飛んだ。弾け飛んだ金属物質は周りの物と衝突し破壊する。

後に残ったのは、爆心地かと思いがう巨大なクレータ。その中心で一人立つ日鷹だった。

「〈忍法・集球〉はS極の磁力を付与した小さな石ころが中心にある。だから瓦礫にも同じS極の磁力を付与させれば、当然反発しあう」

「そうか……解説ありがとな」

日鷹は背後から聞える声にとっさに振り向く。しかし、遅かった。日鷹の腹部に深々と、影虎の腕が突き刺す。

「あれ？ 生きてたんだ、兄さん」

「ああ。〈蛇鎖〉で、俺の体をグルグル巻きにして最後の技を耐えきった」

「なんで分かったの？ 僕、誰にも見せてないのに」

「ゲームのボスに二段階目は常識、らしいぜ」

「何それ」

「お前が切り捨てた、真華の言葉だ」

「なるほどね。真華さんらしいや……けど、残念だったね。僕は、一度死んでる。この程度じゃ死なないよ」

「いや、お前は死ぬ」

その瞬間、日鷹は目、鼻、口から血を流す。

「えっ？」

「俺の血は、甲賀の忍者が作った毒で他者の細胞を破壊する猛毒に変化してる」

影虎がここに来るまえ、正宗に渡されたひょうたんの中身こそがその毒である。

そして、この毒による攻撃こそが真正正銘、影虎の最後の切り札である。

「死体であろうと、細胞そのものを破壊されれば流石に生きていけないだろう」

「……そうだね。流石に、無理かな」

影虎はゆっくりと、傷を開きながら引き抜く。日鷹は力無く仰向け倒れる。地面に血の水たまりが生れる。

「日鷹。お前は、本当に真華のことを好きじゃなかったのか？」

影虎は日鷹を見下ろしながら言葉を紡ぐ。

影虎は真華と出会ってまだ十数日しか立っていない。しかし、そんな短い間でも影虎の凝り固まった思考、世界の見え方を変えた。

恐らく、彼女の生来の気質なのだろう。彼女には良い方向に人を変える力がある。

そんな彼女と一年以上、偽りとはいえ恋人関係なり一緒に過ごした日鷹がどうして真華を傷つけるようなことが出来るのか影虎には疑問だったのだ。

日鷹は影虎の質問にフツと笑いゆつくりと答える。

「楽しくなかった……辛かった……そう言えば嘘になるかな。実際……楽しかったよ。彼女という事は。ただ、彼女と一緒にいればいるほど……僕が幸せだと実感すればするほど……僕の知らないところで誰かが不幸になることが耐えられなかった……」

日鷹の独白を聞いても、やはり影虎には理解出来ない。しかし、こうも思った。もし、自分がコイツの隣にいれば、虚像の恨みや嫉妬に駆られず、純粹に日鷹を尊敬し日鷹の隣に並び立てていければ、あるいわ……そんな考えが頭を過る。

「ねえ……兄さん……僕は愚かだったかな」

日鷹が力無く語りかける。影虎は静かに語る。

「ああ、愚かだ。お前は、俺以上に何もかもを持つてるくせに、それ以上のことを望んだ……望みすぎちゃいけないって子供でも知ってることだろう」

「……そうだね」

日鷹はそう言い、瞳を閉じようとする。しかし、影虎は言葉を続ける。

「でも、お前が望んだから、俺は真華と出会えた。本当の気持ちに気づけた。だから……ありがとな」

影虎の言葉に日鷹は、フツと笑みを零す。

「良かった……最後に……兄さんを救えて……後、真華さんにも……謝って……おいて」
そこで、日鷹は事切れる。それにより、日鷹の体は灰となる。

影虎の頬に一つの滴が流れ落ちた。

十六話 夜明け

影虎は、フラフラになりながら結界に中心にそびえ立つ巨木の前まで歩む。日鷹との死闘で影虎の体もボロボロだった。

正直、立っているだけで奇跡に近い。それでも、動いていられるには一重に真華を助けたという影虎の気持ちである。

影虎は、クナイを取り出し巨木に突き刺し昇る。

それから、数十分が過ぎる。さしもの影虎も身体中、傷だらけ、血だらけでは本来の動きは出来ない。

「やっとなつた」

影虎は、巨木がへこみにたどり突く。目の前には四肢が木々と同化した真華の姿があった。影虎は、一步と一步と真華のほうに歩いて行く。

そして、真華に手を伸ばした瞬間。無数のツタが影虎の体に巻き付く。

「なんだ、影虎さん……か」

ゆつくりと、瞳が開けた真華はポツリとつぶやく。その声は言わずもがな落胆であった。

「悪かったな……日鷹じゃなくて」

「ねえ、日鷹は？」

「死んだ。俺が、殺した」

その言葉に真華は一言

「そう」

とつぶやく。

「私、馬鹿な女だよね……。本当は愛されて無かったのに……。私は日鷹を愛してき……。」
影虎の体に巻き付いてるツタがゆつくりと影虎の体を離れる。

「まあ、だけど。私の代わりに影虎さんが日鷹を殺したならそれでよしとしようかな。じゃあーね。影虎さん。速くここから逃げて。出来るだけ遠くに」

そう言い真華の残っている人間の部分にも植物の枝がゆつくりと巻き付いていく。恐らく、何らかの方法で真華は自ら命を絶つつもりなのだろう。

それを理解した瞬間、影虎は走っていた。そして、真華の体に巻き付こうとしている枝の間に腕を突っ込む。

「ふざけんな！」

そして、強引に幹を引きちぎる。

「えっ！」

真華は驚いたような表情を作る。そんな、真華とは裏腹に影虎の表情は怒りそのものだった。

「たくっ！ どいつもこいつも軽々しく命を捨てやがって！ 何なんだよお前は！」

影虎は、真華の肩を掴み強引に引っぱる。

「えっ、ちょ、辞めてよ！」

その言葉と共に無数の枝が影虎の体を再度拘束する。

「私のことは良いから！ もう、楽にさせてよ！」

「なんでそう思う！ 日鷹に嫌われたからか！ 殺されかけたからか！」

「そうだよ！ 影虎さんに分かる！ 最愛の人に裏切られた私の気持ちか！ どんなに辛い気持ちか……！」

真華は涙と怒りで顔を汚しながら、己の激情をぶつける。

「分からねーよ！ 俺は、人に愛されたことは無いからな。だけど、たった一度の人に裏切られただけで、命を絶とうとするのは間違ってる！」

影虎は強引に自分の体に巻き付く枝を引きちぎると、真華の元まで走る。そして、真華の肩を掴む。

そして影虎は自分の心情を吐露する。

「俺よりも恵まれてるお前が……自分から命を絶とうとしたら……お前よりも恵まれてない俺は、必死に自分の命を守るために殺し続けた俺は……馬鹿みたいじゃないか」

その言葉に、真華の自害の意思が鈍る。それに連動するように真華と巨木との癒着も緩む。「なあ、真華！ お前は日鷹に裏切られた。それは事実だ！ だけど、それはお前が悪い訳じゃないんだ！ 日鷹はお前を嫌ってたわけでも、嫌いになっただけじゃない。ただ、アイツは、自分一人だけ幸せになるのが辛いつて思っただけなんだ。そう、思わせるほど！ お前との時間は幸せだったんだ！」

影虎の言葉を聞き真華は涙を流す。

日鷹の片腕が巨木から抜け出る。影虎はその片腕を掴み引っぱる。

「俺もそうだ！ お前といた時間は、お前とやったゲームは今までの人生の中で一番楽しかった！ 分かるか！ お前は今まで満たされていた日鷹を幸せにして、人生のどん底だった俺を救ったんだ！ そんなお前が！ 死んで言い訳ないだろう！」

その言葉と共に、真華の体が全て巨木から抜け出る。

二人はお互い体を抱き合いながらゴロゴロと巨木の地面を転がる。

「抜け……出たってことは」

真華はその場に座り、自分の体を見る。それは紛れもなく真華の体だった。

「生きなくなったってことだろう」

影虎は地面に倒れながらポツリと言う。

「良かった。一人は救えて」

影虎はゆっくりと体を起す。影虎の顔の口元は笑みを作っているがその瞳には悲しみや後悔の色が移る。

「本当は、日鷹も救いたかった、ですよね」

「……ああ。だが、俺じゃアイツは救えなかった。結局俺は、アイツに貰ってばかりだ」

日鷹がいたから、幼少のころ影虎は歪ながらもアイデンティティを獲得し自己を確立できた。日鷹が優秀で真華に出会った結果、影虎は真華に出会えた。

与えてもらってばかりの人生。なのに、影虎自身は何も返せなかった。そう思うだけで、影虎の心は後悔で一杯になる。

影虎は一つの筒状を取り出すと、それに火をつける。すると煙りが勢いよく吹き出す。任務完了ういお伝える発煙筒である。

数秒後、街を覆っていた境界が消失していく。その証拠にそれは赤から夜の黒に、そして薄く白んでいく。

「影虎さん。私が言うのも何ですけど、日鷹の貰ったものを誰かに返すっていうのはどうですか？ 影虎さんみたいな、困ってる人に」

それを聞き影虎は声を上げて笑う。

「えっ！ 笑うとこですか！」

「いや、すまん。今さっきまで死のうとしてた人間がそれ言うかと思って」

それを聞き真華はふて腐れる。

「けど、良いな。そうするか。人助け……いいかもな。やっぱり、お前は人を救う才能があるな」

その時だった。真華の体がゆっくりと傾く。急にまぶたが重くなり強烈な睡魔に襲われる。

「影……虎……さん」

「悪いな」

そこで真華の意識が途切れる。実は、影虎の灯している発煙筒には耐性の無い物を眠らせる効果があるのだ。

影虎は眠りについた真華の首筋に薬剤を投与する。こちらは投与された者の記憶を消去する。これで、真華の妖具に関する記憶、影虎との記憶を全て消去するのだ。

「終わったかい？」

影虎の後にいつの間にかハジメが立っていた。

「今、終わりました。これで……真華は大丈夫ですか」

「確約は出来ない。ただ、記憶があるよりかは、幾分かマシだよ」

今回の事件は、忍者界限に大きな爪痕を残した。

しかも世界を滅ぼす可能性を持った妖具が自らの体に内包されていることを真華自身が認識していることが致命的だ。それは、影虎以外の忍者かすれば世界を終わらせるボタンを無思慮な小娘が握っているように見えるだろう。

恐らくすぐにでも、真華の命を襲う忍者が何人も訪れるだろう。それら全てを蹴散らし真華を守ることが影虎には不可能である。

「悲しいかい？ 真華ちゃんに忘れられるのは？」

「正直、忘れられたくは無いですよ。でも……最後に真華には生き方を貰いました。だから、悲しいけど……後悔はありません」

「そう。君は、強いね」

そう言い、ハジメは空を見上げる。つられて景虎も見上げる。空には太陽が顔を覗かしていた。

終章 奇跡

仙人もとい果心居士と日鷹が起した例の事件は『鬼の乱』として忍者界限に悪しき事件として名前を刻んだ。現在も情報統制や隠蔽工作に多くの忍者が日夜働いている。

そんな中、影虎達はといと

「暇だねー」

「そうだね」

「二人とも、少しはシャキッとしてください」

真華の任務から外されたこと以外は何も変わっていないかった。

ハジメ、影虎、香奈は、今回の事件を解決した立役者であるが、そもそも影虎達が果心居士の狙いを察していればこんなことにはならなかった、という声上がり厳罰などはない代わりに昇級や優遇措置もなかった。

「そんなこと言うけど、トラ君。僕、怪我人だよ」

そう言いハジメは、ソファアで寝そべりながら包帯が巻かれた腕を振って見せる。

「怪我人なら、怪我人らしくベッドで寝てくださいよ」

「えー、もう飽きたんだよー。療養生活はー」

そんなだらけたハジメの姿を見て影虎は溜息を吐く。果心居士の事件の時は頼りに見えていたが、そもそもハジメは根は不真面目な人間だったことを思い出す。

「ていうか、人にはいけど影虎はどうなのさ？ 傷の具合は」

ハジメの隣に座っていた香奈が後を向き、問いかける。

「アンタこそ、一番の重傷者だったじゃない」

そう、影虎は真華の記憶を消したあと失血と体力の限界でその場に倒れる。医者にみせれば緊急手術と言われ。それが成功しても三日三晩は眠り続けていたのだ。そして四日目。目を覚ました影虎の傷は塞がっていた。

「大丈夫ですよ。俺はもう」は

そう言い、影虎は右腕を見せる。影虎の腕には傷痕はあるが既に包帯は取れている。影虎はチラリと時計を見る。

「じゃあ、俺少し出ていくんで」

そう言い、影虎は財布を手に取るとアジトを後にする。

「最近、影虎いつも、この時間に出ていくね」

香奈は、影虎が出ていく後ろ姿を見ながらぼつりと言葉を零す。

「そう言えば、そうだね。まあ、良いんじゃない。暇さえあれば、修行ばかりしているよりはよっぽど健全だよ」

「そうだけどさ。そう言えば、あの件はまだ影虎に言わないの」

「あの件って？」

「五碌のこと」

「ああ、すっかり忘れていたよ」

現在、石川五碌は『鬼の乱』に首謀者の一人、果心居士と裏で結託していた件で雑賀衆本部に身柄を拘束されている。

忍者にとつて裏切りは重罪だ。本来ならすぐさま、首を跳ねられても仕方が無いのだがそこは、腐っても名門石川家の現当主。あの手、この手を使い一時期は釈放一步手前まで話が進んだ。しかし、そこにハジメが念入りに集めた証拠を提出。

五碌は、決定しかかっていた無罪は取り消されたのだ。

「けど、言う必要があるかなあ。今更、自分の父親の末路にそこまで影虎君、興味ないと思うよ」

ハジメの目から見ても、影虎と五碌の親子の関係は手の施しようがないほどに壊れている。恐らく、影虎は五碌を父とは思っていない。そんな、男の末路を聞いたところで今回の件で色々なものを失い、心に大きな穴を作った影虎の心が癒やせるとは到底思えないというのがハジメの考えだ。

「いや、五碌のことじゃなくて、こっちー！」

そう言い、香奈は一枚の書類をハジメに突きつける。書類の一番上には、決定事項と書かれ文の中には【石川影虎を第二十四代石川家当主に任命する】と書かれている。

「リーダー、まだ言っていないでしょ」

「ああー、そっちねえー」

「何？ リーダー不満なの？ 影虎が当主になるの」

「そういう香奈ちゃんは賛成なの、影虎が石川家の当主になるの」

「うん賛成。だって今回の任務、影虎は実質失ってばかりだし。だったら、手に入れられるものは手に入れるべきだよ。それに、石川家の当主っていいったら、雑賀衆の実質的ナンバーツー。受けられるなら私が受けたいよ」

雑賀衆のトップ、雑賀家を常に裏から支えていた石川家の力もまた絶大だ。これをうければ、影虎は大きな権力と力が手に入るだろう。それだけではなく、今まで影虎を蔑んでいた者達も影虎を認めるだろう。

「でもなあー」

影虎は渋るように顔を顰める。

「もしかして、リーダー。影虎が石川家の当主になったら自分から離れるかもって思ってる？」

香奈の言葉に、影虎の肩がビクリと震える。どうやら、凶星のようだ。

「いやだって実際そうじゃん。石川家の当主になれば僕の父さんの下、多くの忍者に指示を出す立場になる。そうなれば、僕達とはもうこうやって、一緒にチームで任務に挑んだりすることもできなくなる。そう思うと寂しいんだよ僕は」

「リーダー……」

「それに、父さんにトラ君を渡すのは、なんか癪だしね」

「そっちが本音でしょ」

「だけど、伝えるだけ伝えてみたら？　もしかしたら案外、自分から当主の件捨てるかもしれないし」

「そうだね」

そう言い、ハジメと香奈はお互いに笑い合う。



アジトであるホテルから歩くこと数十分。影虎は最寄りの繁華街を訪れていた。最初来たときは、道に迷い携帯端末に内包している地図アプリが手放せなかったが、今では既に見知った道だ。

影虎は目的のゲームセンターの前に来ると中に入る。影虎は最近、学校が終わりゲームセンターに学生が訪れる時間に一緒に訪れゲームをするのが最近の影虎の日課だ。

本当は、関原駅付近にある初めて訪れたゲームセンターが良いのだが、そもそも関原街自体が『鬼の乱』の影響で復興作業中で関係者以外立ち入り禁止なので仕方がない。

影虎は、真華とやったシューティングゲームの前に来るとコインを入れゲームをスタートする。次々と敵を倒し、あつという間に例の二段階変身をするボスのところまで訪れる。

そして、そのボスをあつという間に倒す。画面にはGAME CLEARの文字が表示される。

影虎は、ゲームの銃をしまう。

(なにやってんだろう。俺)

影虎は小さく自笑する。心に虚しさが広がる。

影虎も理解している。これは、真華の影を追っての行動だということを。こんなことをしても意味が無い。もし、仮に真華に会ったところで、真華は妖怪と共に影虎の記憶を失っている。つまり、今の真華は影虎の知っている真華では無いのだ。

会ったところで辛いだけ。それでも、どうしても会いたいと思ってしまう。

影虎は、胸に張り付く虚しさを取り除くように財布からお金を取り出し、シューティングゲームの競台に入れよとしたときだった。

「あっ」

と、素っ頓狂な声が聞える。そして、影虎の足下に何か当たる感触が伝わる。見ると、影虎の足下に一枚のコインが転がっていた。影虎は、徐にコインを拾い上げると後から「すみません。それ、私のです」

と、声が聞こえる。振り向くとそこには、腰まで伸ばした黒い髪と、赤い瞳を持った見知った少女が高坂真華がそこにいた。

思わず影虎は、真華と呼びそうになるのをグツと我慢しコインを手渡す。

「ありがとうございます。拾ってくれて」

影虎は真華の言葉にぎこちない笑みを返してしまう。

「あの、そのゲームするんですか？」

そう言い、真華は先ほど影虎がやっていたシューティングゲームを指さす。

「そうだ。初めて、やったゲームで思い出があるからな」

「へえー。あの、良かったら対戦しませんか？ 私、けっこう上手いですよ」

そう言い、影虎の浮べる笑みに影虎は断ることが出来なかった。

「ああ、やろう」

二人は同時にコインを入れ、ゲームを開始させる。銃を構えて、次々と襲いかかるゾンビを撃ちスコアを上げていく。

「へえ、なかなかやりますね。お兄さん、もしかしてけっこうやりこんでますか？」

「いっただろう、思い出があるんだ」

「その思い出って、どんな思い出なんですか？」

「……」

影虎は言葉をつまらせる。果たして、これは言っただけの良いのだろうか、と。話してしまえば、真華の記憶が戻ってしまうのではないのか……と考えてしまう。

そんな影虎の沈黙を真華は勘違いしたのだろう。慌てたように言葉を並べる。

「あの、すみません。踏み込んだこと言っちゃって」

「あ、いや。別に。ただ、少し言語化は難しいと思っただけだ。そうだな。端的な言葉で言いたすなら今までの人生に一番楽しかった思い出だよ」

二人は白熱した戦いを見せる。お互い敵を一匹も撃ち漏らすことなく同時にゲームをクリアした。

「同点……ですね」

「そうだな……じゃあ、俺はこれで」

そう言い、影虎はコントローラーの銃を置きゲームセンターから出ようとした時だった。その手を握られる。振り返ると、真華が影虎の手を握っていた。

「あの、もう一戦しませんか……影虎さん」

その言葉に、影虎は瞳を丸くする。

「……なんで、俺の名前を」

「あ……いや」

真華はそこで何かに気づいたように、パツと手を離す。その態度に何か違和感をいだいた影虎はギロリと真華を睨む。

真華は影虎の視線に耐えかね視線をずらす。その反応を見た影虎は確信する。

「お前、記憶消えてないな？」

その言葉に真華は観念する。

「消えてません」

それを聞き影虎はすぐに、真華の手を握りゲームセンターの入口に向う。

「ちよつと！ 待って下さい！」

真華は影虎の手を振りほどく。

「あのなあ真華！ お前は分かっているから言うがお前が記憶を持つてるとお前の身に危険が及ぶんだ！」

「だから、また私の記憶を無くすって言うんですか？」

「それは……」

影虎は言葉を詰まらせる。影虎としても、真華の記憶が無くなって無いのは凄く嬉しい。だが、真華の記憶を再度消さなければいけない理由も理解している。相反する気持ちが影虎の思考を停滞させる。

「ねえ、少し話しませんか？ あれでもしながら」

そう言い、真華は先ほどのシューティングゲームを指さす。

再度、二人はコントロール銃を構える。

「で、なんで記憶が残ってるんだ？」

「分かりませんよ。最初は、本当に記憶が無かったんです。でも……ある日、急に蘇って」（甲賀の葉が効かなかった？ いや、忍者界限でも一、二を競う甲賀の忍びが調合した葉が効かないなんてことは……となると、妖具）

〈鬼の心臓〉は所有者に不死に近い肉体を与える。もし、その効力が投与された葉や毒にも作用されるのであれば可能性は零ではない。

「なあ、もう一度言うが俺は妖具のことも俺のことも忘れるべきだと思う。忘れて平穩に過ごせば良いと思ってる。俺は、お前には生きてて欲しい」

「それは、日鷹のことを忘れても、ですか？」

「それは……いや、そうだ。どんな不幸な目になっても、どんなに幸せなことを忘れても命があるだけマシンだ」

影虎の言葉は生物としては間違っていない。しかし、真華は自分すらも助けたその言葉を真っ向から否定する。

「確かに、死ぬよりかは幾分かマシンだと思いますよ。でも、それはマシンってだけです。影虎さんの考えも正解じゃあないんです」

「じゃあ！ どうしろって言うんだ！」

「影虎さんが、私を守れば良いんです。私が、日鷹のこととかを覚えていることで命を狙う

人たちから。日鷹に貰ったもの、私に返してくださいよ。私を、助けてください」

そう言い、真華はコントロール銃を置き右手を影虎に突出す。

今までの影虎ならもしかしたら、真華の提案を却下していただろう。

だが、今は違う。日鷹に貰った物が、日鷹を救えなかった後悔が、真華に貰った新たな生き方が影虎に今までと違う答えに導く。

「分かった」

影虎はそっと、その手を握るのだった。